

京都府遺跡調査概報

第 12 冊

1. 千代川遺跡第3次
2. 国道9号バイパス関係遺跡
 - (1)北金岐遺跡
 - (2)千代川遺跡第5次

1984

序

昭和56年4月に当調査研究センターが発足し、本年度は4年目を迎えました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にす考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和58年度は42件の調査を実施しました。これらの調査結果の概要は、「京都府遺跡調査概報」第9冊から第11冊までにまとめて既に刊行いたしました。この第12冊に収めた概要は、昭和58年度に発掘調査を実施した「千代川遺跡第3次調査」と「国道9号バイパス関係遺跡」に関するものであります。このうち、国道9号バイパス関係の亀岡市北金岐遺跡では、水路の途中に杭と板を組み合わせた堰の遺構が検出され、その堰にひっかかるようにして、木製の舟が出土し注目を集めました。これらの木製品は、本年度保存処理をすることが認められ、現在京都府立山城郷土資料館で、その作業が続けられています。

当調査研究センターでは、遺跡の保存のためにあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努めていく所存であります。この概報を既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、亀岡市教育委員会をはじめ、関係機関の御協力を受け、さらに、炎天の下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これらの多くの関係者に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 千代川遺跡第3次 2. 国道9号バイパス関係遺跡
を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 千代川遺跡第3次	亀岡市千代川町ほか	昭57. 11. 17 } 8. 12 昭58.	水資源開発公団	水谷 寿克 岡崎 研一
2. 国道9号バイパス関係遺跡				
(1) 北金岐遺跡	亀岡市大井町	昭58. 5. 18 } 3. 24 昭59.	建設省近畿地方建設局	水谷 寿克 石井 清司 村尾 政人 田代 弘
(2) 千代川遺跡第5次	亀岡市千代川町	昭58. 10. 11 } 11. 30 昭58.		

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目 次

1. 千代川遺跡第3次発掘調査概要.....	1
2. 国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要.....	23
(1) 北金岐遺跡.....	25
(2) 千代川遺跡第5次.....	59

挿図・付表目次

千代川遺跡第3次

付表 1	千代川遺跡調査回数一覧表	1
第 1 図	調査地位置図	3
第 2 図	調査地全体図	4
第 3 図	B 拡張調査地遺構図	6
第 4 図	竪穴式住居跡 SB 01 実測図	7
第 5 図	竪穴式住居跡 SB 02 実測図	8
第 6 図	SD 01 実測図	9
第 7 図	SD 02 実測図	10
第 8 図	工事中発見の溝	13
第 9 図	出土遺物実測図(1)	14
第 10 図	出土遺物実測図(2)	15
第 11 図	出土遺物実測図(3)	16
第 12 図	出土遺物実測図(4)	17
第 13 図	出土遺物実測図(5)	18
第 14 図	出土遺物実測図(6)	19

国道9号バイパス関係遺跡

(1)北金岐遺跡

第 15 図	北金岐遺跡位置図	24
第 16 図	北金岐遺跡地形図	26
第 17 図	北金岐A地点遺構図	27
第 18 図	被籠土器出土状況	30
第 19 図	北金岐A地点 SD 01・SD 02 出土遺物	31
第 20 図	北金岐A地点 SD 0201 出土遺物	33
第 21 図	北金岐B・C地点遺構図	37
第 22 図	北金岐B地点 SB 03 出土遺物(1)	41
第 23 図	北金岐B地点 SB 03 出土遺物(2)	42
第 24 図	北金岐B地点 SD 11 出土遺物	43

第 25 図	北金岐 B・C 地点遺構変遷図(1).....	45
第 26 図	北金岐 B・C 地点遺構変遷図(2).....	46
付 表 2	北金岐 B 地点遺構一覧表.....	49
付 表 3	北金岐 C 地点遺構一覧表.....	54

(2)千代川遺跡第5次

第 27 図	千代川遺跡と周辺の遺跡.....	59
第 28 図	調査地トレンチ断面図.....	61
第 29 図	調査地遺構平面図.....	62
第 30 図	出土遺物(1).....	64
第 31 図	出土遺物(2).....	66
第 32 図	遺構変遷図.....	71

図 版 目 次

千代川遺跡第3次

- 図版第1 (1)調査地遠景(西から) (2)調査地近景(調査開始前)(北から)
- 図版第2 (1)A拡張全景(北西から) (2)B拡張全景(北から)
- 図版第3 (1)SB 01(西から) (2)SB 02(西から)
- 図版第4 (1)B拡張東壁 SD 01 断面(南西から) (2)堰状遺構
- 図版第5 (1)第Bトレンチ SD 01(南から) (2)第Cトレンチ SD 01(東から)
- 図版第6 (1)第Eトレンチ SD 03(西から) (2)SD 03 断面(SD 01 合流手前)
- 図版第7 (1)SD 01・07(南から) (2)SD 07 断面(北から)
- 図版第8 (1)遺物出土状況 (2)遺物出土状況(SD 01 内)
- 図版第9 (1)遺物出土状況(木製品) (2)遺物出土状況(木製品)
- 図版第10 出土遺物(1)
- 図版第11 出土遺物(2)
- 図版第12 出土遺物(3)
- 図版第13 出土遺物(4)

国道9号バイパス関係遺跡

(1)北金岐遺跡

- 図版第14 (1)B地点南半部の遺構(東から) (2)B地点北半部の遺構(東から)
- 図版第15 (1)B地点 SB 03 床面直上遺物出土状態(東から) (2)同上(北から)
- 図版第16 (1)B地点 SD 01 完掘状態(西から) (2)同上(東から)
- 図版第17 (1)C地点全景(南から) (2)C地点北端部遺構検出状態(東から)
- 図版第18 (1)C地点 SD 04・SB 13・SB 14(東から)
(2)C地点 SD 04・SB 14(東から)
- 図版第19 (1)C地点 SB 19・SB 20(東から) (2)C地点 SB 20(東から)

(2)千代川遺跡第5次

- 図版第20 (1)調査地遠景(北から) (2)調査地遠景(西から)
- 図版第21 (1)調査地全景(南から)
(2)SB 0501~0504 竪穴式住居跡全景(北から)
- 図版第22 (1)SB 0502・SB 0503・SB 0504 竪穴式住居跡(東から)

- (2)SB 0503 竪穴式住居跡 (東から)
- 図版第23 (1)SB 0501 竪穴式住居跡 (北東から)
(2)SB 0501 竪穴式住居跡 (南西から)
- 図版第24 (1)調査地西側全景 (北から) (2)SD 0501 溝断面 (北から)
- 図版第25 (1)SD 0501 溝遺物出土状況
(2)SB 0504 竪穴式住居跡遺物出土状況
- 図版第26 (1)CA42~38 地区旧地形断面 (東から)
(2)BY43 地区旧地形断面 (北から)
- 図版第27 (1)出土遺物 1 (製塩土器) (2)出土遺物 2 (土師器)
- 図版第28 (1)出土遺物 3 (弥生式土器・土師器) (2)出土遺物 4 (須恵器・陶磁器類)
- 図版第29 (1)出土遺物 5 (縄文式土器) (2)出土遺物 6 (3)出土遺物 7 (弥生式土器)

1. 千代川遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

亀岡市西南部に位置する千代川町・大井町一帯には、行者山から派生する尾根筋の微高地に、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が点在することが、昭和50年度から実施している国道9号バイパス建設に先立つ事前調査等^(注1)により確認されている。

昭和47年9月、治水・利水・既得用水安定供給を目的として、日吉町にダム建設が計画され、その水没対象移転者のための集団移転地住宅建設用地の造成が千代川町に計画された。そこで水資源開発公団は、京都府教育委員会と協議し、昭和57年10月に当調査研究センターに発掘調査実施方の協議書類を提出した。

当該地は、千代川町小林・湯井、大井町小金岐にまたがる対象総面積 31,200 m² の広大な範囲であり、また京都府遺跡地図には弥生時代の散布地「湯井遺跡」とする周知の遺跡を包蔵しており、再三に亘る協議を行ったうえ、試掘調査を前提とした調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和57年10月20日付けで文化庁長官あて「発掘調査届出書」を提出し、同年11月17日より現地調査に着手した。また、後述する住居跡や大溝等の検出など多大な成果や問題点を残し、昭和58年3月31日に終了した。昭和58年度には、前年度問題を残した集落跡の規模等を確認する必要が生じたので、水資源開発公団と協議し、主要部分の全面発掘調査を実施することとなり、同年5月30日から8月12日まで現地調査を行った。また同年8月26日には現地説明会を開催し、全ての調査を終了した。

発掘調査にあたっては、調査課・主任調査員 水谷寿克 同調査員 岡崎研一が中心となり調査の進行をはかったが、調査補助員として京都学園大学・同志社大学等の有志学生諸氏、

付表 1 千代川遺跡調査次数一覧表

次 数	所 在 地	概 要	備 考
第 1 次	千代川町北ノ庄	試掘調査	府概報1981-2
第 2 次	千代川町北ノ庄	古墳時代・住居跡	センター概報1982-1・情報2
第 3 次	千代川町小林・湯井	古墳時代・溝、住居跡	情報9
第 4 次	大井町小金岐北浦	奈良時代・建物跡	情報10
第 5 次	千代川町北ノ庄	古墳時代・住居跡	情報10
第 6 次	千代川町北ノ庄・千原	方形周溝墓・溝	情報11・12
第 7 次	千代川町千原	弥生時代・水田跡	

整理員として亀岡市内の方がた、また作業員として千代川町の方がたの御協力を賜った。^(注2)

(水谷 寿克)

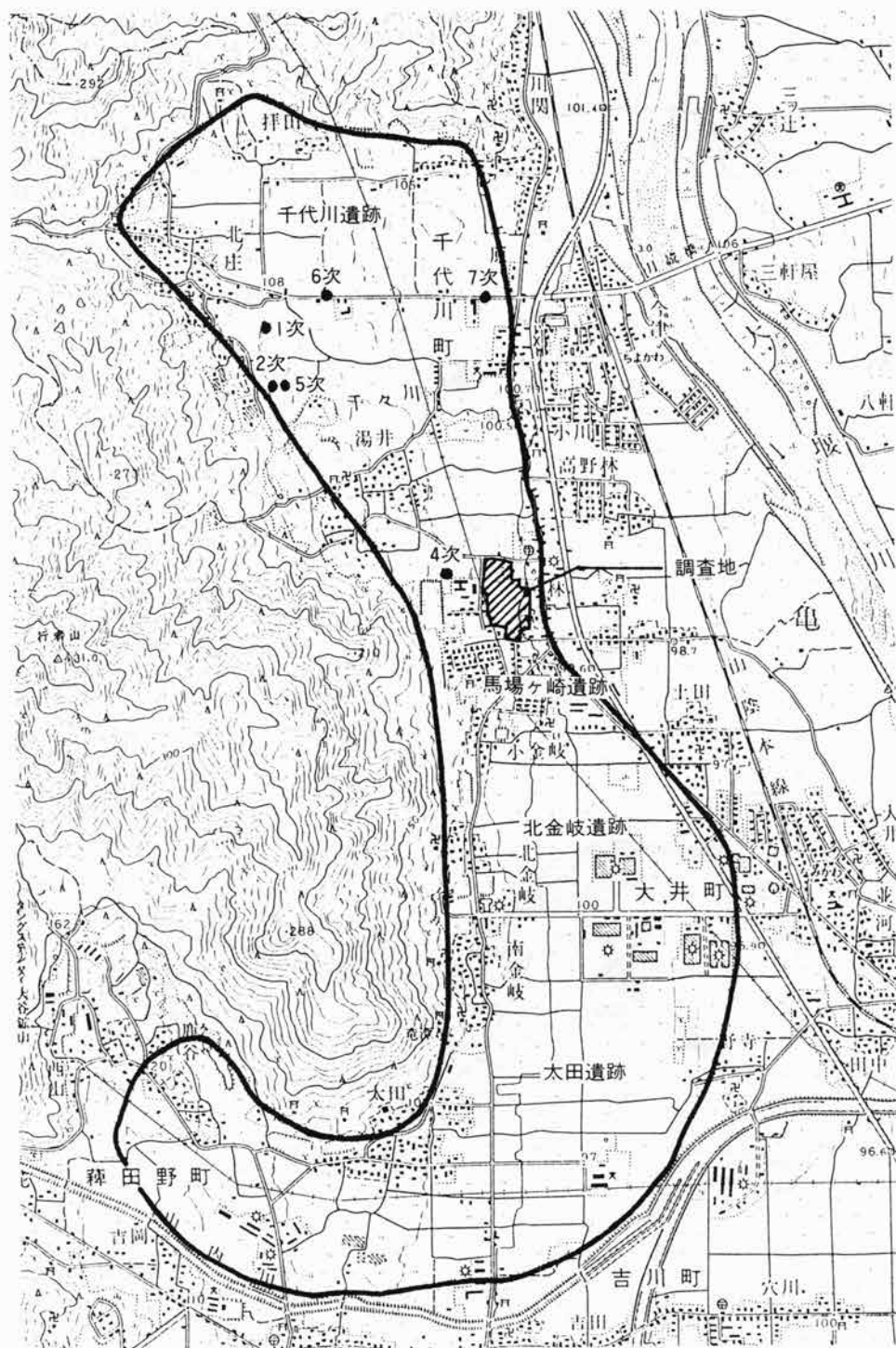
2. 位置と環境

亀岡盆地は、丹波国の南端に位置する。盆地の中央低地部を大堰川が南流しており、亀岡盆地を二分する形にある。断層によって形成されたこの盆地の周囲には、標高 500~600 m の山嶽がとりまき、その一つである行者山から東方に派生する丘陵裾部を、微高地が巡っている。近年の発掘調査によって、この微高地には、弥生時代前期から中期の遺物や遺構を検出した太田遺跡や、主として弥生時代中期から後期の遺物が出土した北金岐遺跡^(注3)、さらに太田・北金岐遺跡で出土数の少ない弥生中期の遺物が出土した千代川・桑寺遺跡^(注4)がある。今回の調査地付近では、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出した千代川遺跡第2・4次調査^(注5)がある。これらの遺跡の大半は、国道9号バイパス建設工事に伴う発掘調査によって明らかになったもので、その予定路線は、遺跡が密集すると思われる丘陵裾部あるいは微高地を通り、亀岡盆地を縦断する形にある。発掘調査は、路線内のみ行われたにすぎないが、上記の遺跡を知ることができ、今まで亀岡市の歴史の空白部分とされてきた弥生時代全時期の資料を得ることが出来た。

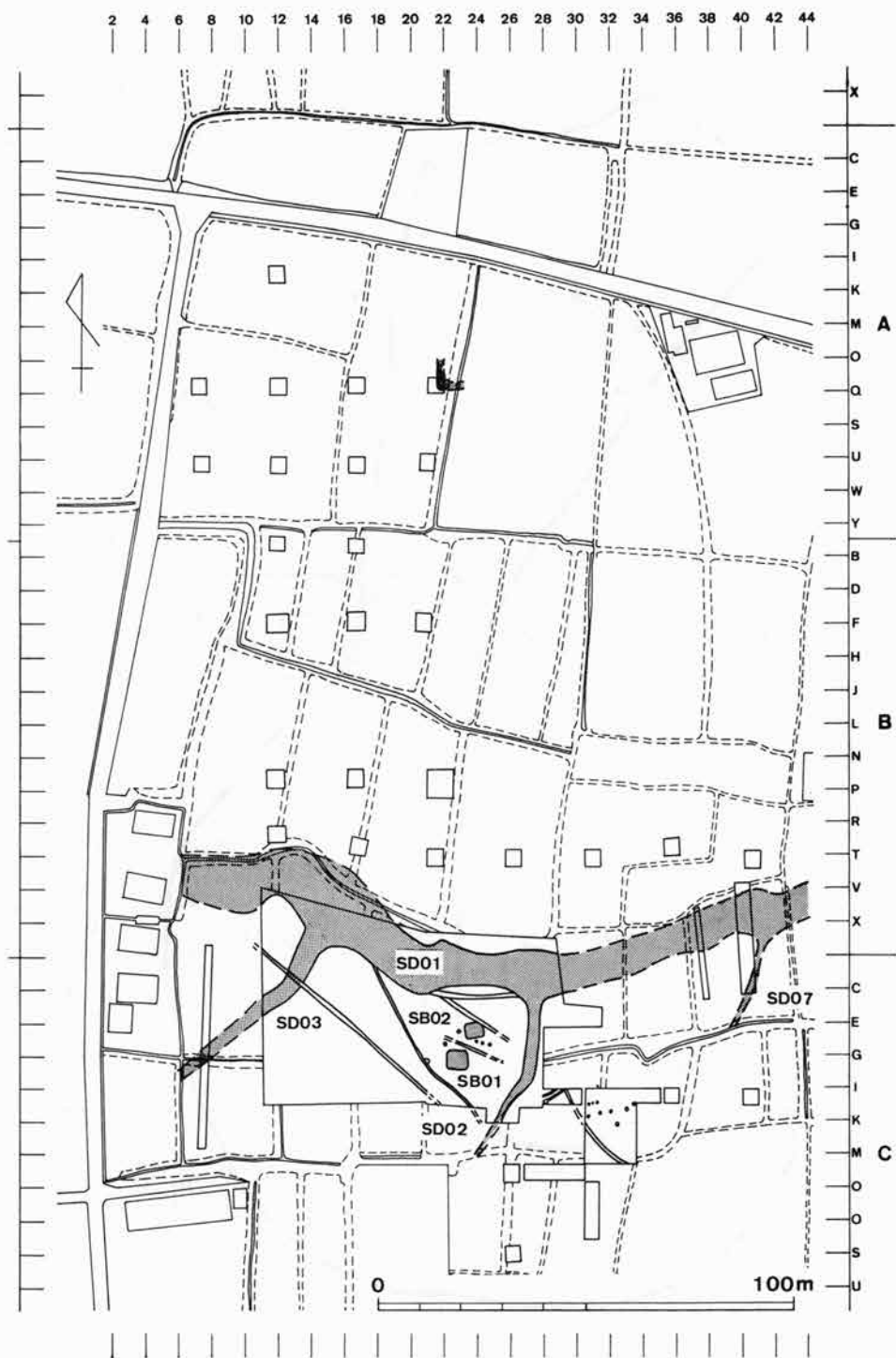
また、亀岡市は群集墳の多いことでも知られている。山嶽から派生する低丘陵斜面から裾部にかけて、径 10 m~20 m の円墳が密集している。調査例としては、拜田古墳群^(注6)、小金岐古墳群^(注7)、医王谷3号墳^(注8)などがある。特に前方後円墳1基と円墳から成る拜田古墳群は、主体部が、片袖式の横穴式石室や石障を有するものや石棚を有するものや木棺直葬の土塚墓のものと、各古墳に特徴が見られ、亀岡市の群集墳の中でも注目されている古墳群である。また北金岐遺跡からは、古墳時代前期の溝や住居跡も検出しており、古墳時代の亀岡盆地の様相が解明されつつある。

歴史時代になると、亀岡市千代川町に6町四方の丹波国府跡が推定されており、千代川・桑寺遺跡として調査が行われ、柱穴や溝などを検出している。亀岡市南部においては、古墳時代から平安時代にかけての生産遺跡である、篠窯跡群^(注9)がある。この窯跡群は、約100基以上から成り、大規模な生産遺跡であることが判明しており、陶邑に引き続く窯跡群である。また、亀岡市教育委員会によって、大堰川左岸に位置する国分尼寺、国分寺の調査が行われている。国分尼寺は、御上人林遺跡として報告され、国分寺は調査中である。

今回の調査地は、京都府亀岡市千代川町小林西芝、同町湯井巽筋、大井町小金岐北浦に位置する。国鉄山陰本線千代川駅の南西 900 m にあたり、行者山から派生する丘陵の裾部に



第1図 調査地位置図



第2図 調査地全体図

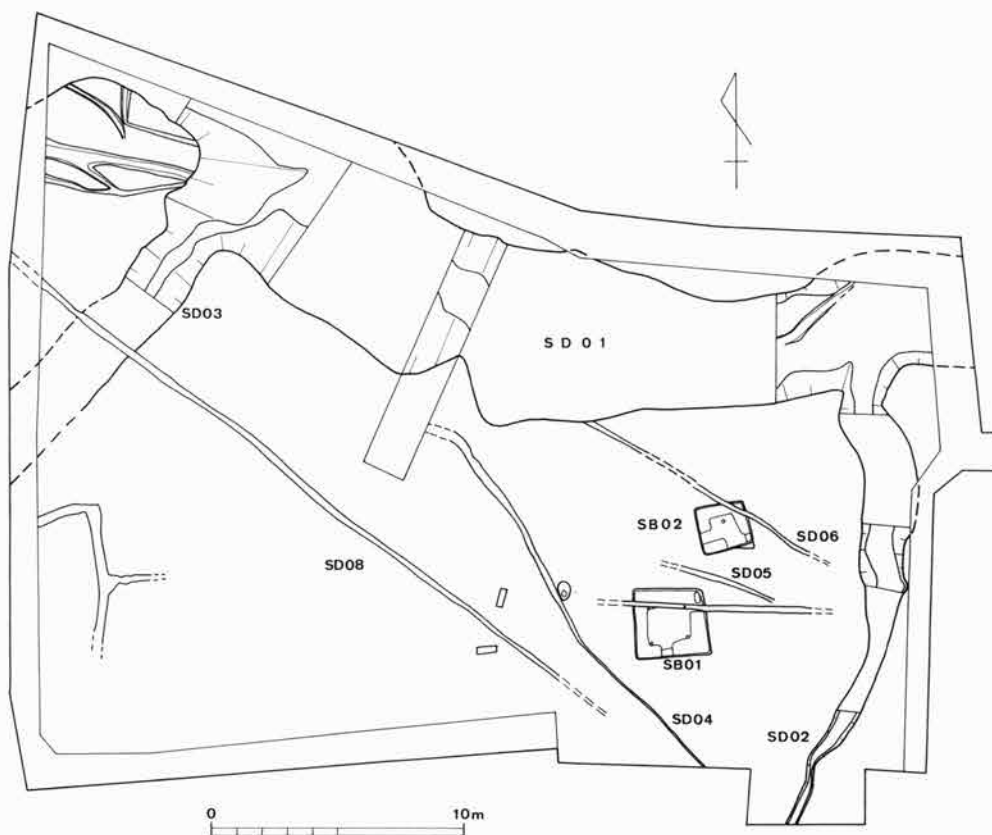
広がる微高地上である。調査地は千代川遺跡の最南端に位置し、南には弥生時代中期の溝を検出した馬場ヶ崎遺跡があり、南西には100基からなる小金岐古墳群がある。北西約1kmの微高地上を調査した際（千代川遺跡第2次調査）に、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構が見つかったことや、馬場ヶ崎遺跡や小金岐古墳群などの周辺の遺跡も考え合わせると、調査地には弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡が存在するものと思われた。

3. 調査概要

調査地は、丘陵裾部に位置するため、西から東にかけてわずかに低くなっている。調査対象面積が31,200 m²と広範囲な調査であるため、昭和57年11月17日から昭和58年3月31日までと、昭和58年5月30日から8月12日までの、2年度に分けて調査を行った。昭和57年度の調査は、主に層位及び遺構等の確認を目的とした試掘調査を行い、昭和58年度は、57年度の調査結果から遺構の範囲、規模等を確認するため、拡張を行い調査することにした。

調査を行うにあたり、地区割りをを行った。南北方向は、A～Cの3地区に分け、北からA・B・C地区と名付けた。この大地区をさらに4m毎に区画し、A～Yの小地区を設定した。東西方向は、4m毎に区画し、西から東へ数字を用いて地区割りをを行った。地区名は、南西隅の杭を基準とした。

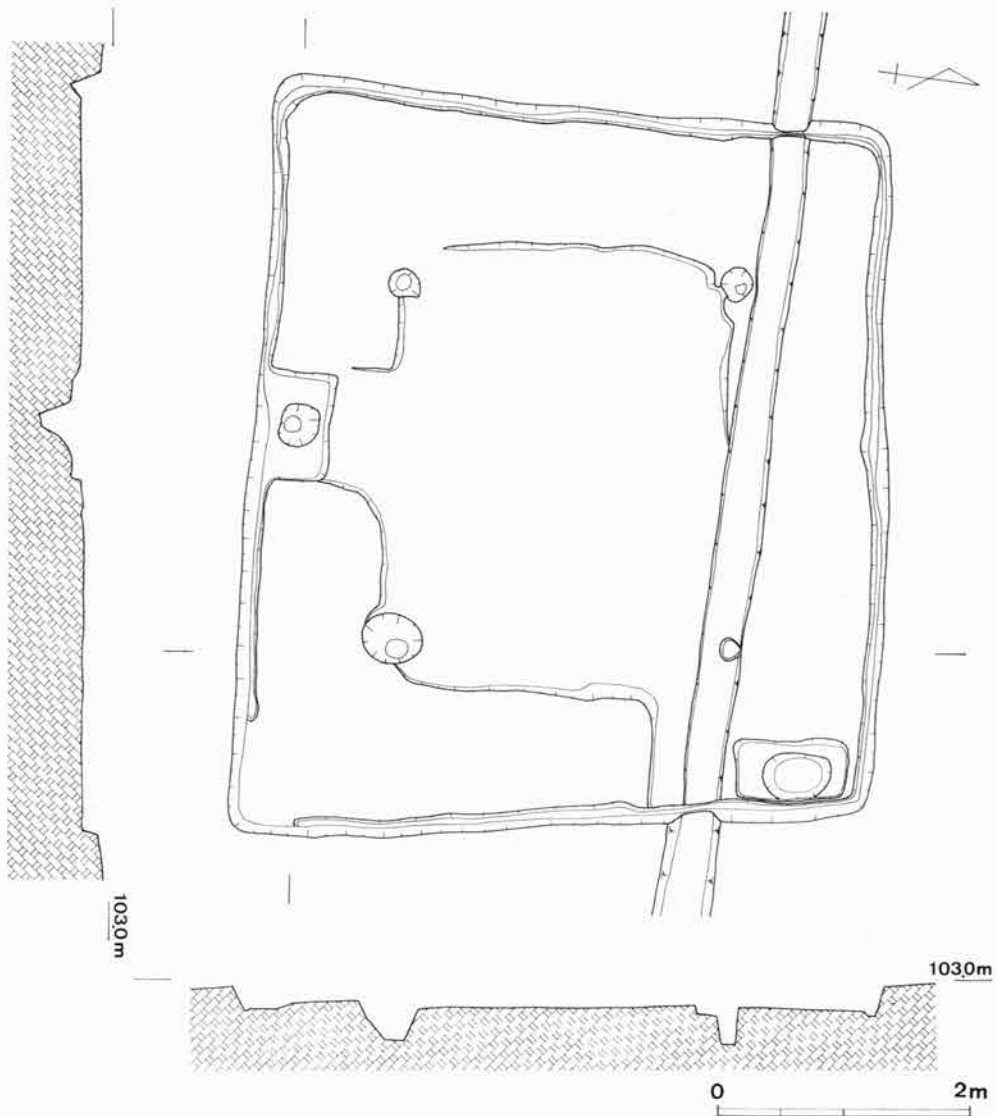
昭和57年度の試掘調査は、調査地の西側の高台を重点的にを行い、4m×4mのグリッドを20m毎に設定し、掘削を行った。調査地の基準となる層位は、耕土・淡茶褐色土・黒色土・黄褐色土（地山）である。28ラインより東側になると、耕土・黄褐色土（地山）となり、淡茶褐色土や黒色土は見られない。また、調査地北側では、全体的に砂質土の堆積であった。このように、28ラインより東側は、後に削平されている可能性があり、調査地北側では、AO20以外のグリッドからは、遺構を検出することはできなかった。AO20グリッドからは、L字状に曲がる溝を検出したが、調査地の東端にあたり、北側には、現地プレハブを建てたため、その範囲を調査することは出来なかった。以上の調査経過から、遺構は調査地の南西部に存在すると思われたため、引き続き試掘調査を行った。その結果、CJ31グリッド付近から、幅20cm程の溝や径50cm程の柱穴を検出した。調査地南側は、現在住宅地であるが、この付近の小字が「大門」であり、造成中に瓦や頭大の石が出土したという、地元の人の話から、南側に拡張を行った。（A拡張）その結果、柱穴9個と1条の溝を検出したが、遺構内出土の瓦や切り込む層位から、かなり新しい頃のものと思われた。また、CJ26グリッドから幅約50cmの南北方向の溝を検出した。溝内から布留式土器片が出土したため、古墳時代前期の遺構が存在すると思われた。そこで南北に24m、東西に28mの拡張を行ったとこ



第3図 B 拡張調査地遺構図

ろ、竪穴式住居跡2基と南北方向の溝(SD02)を検出した。SD02は、さらに北方に続いたため、BYラインまで拡張を行った。(B拡張) その結果、幅約10mを測る溝(SD01)と、それに合流する溝(SD02)と、竪穴式住居跡2基を検出した。これらは、環濠集落の一画と考えられた。SD02に対して、SD01の規模が大きいことから、自然流路を利用した集落跡と思われ、B拡張の西側と東側にトレンチを設定し、SD01の範囲を調べることにした。トレンチによる試掘調査を行った時点では、昭和58年度に検出したSD03をSD01の延長と思い、SD01は調査地南西隅からBX14付近で屈曲して、東流する大溝と考えていた。

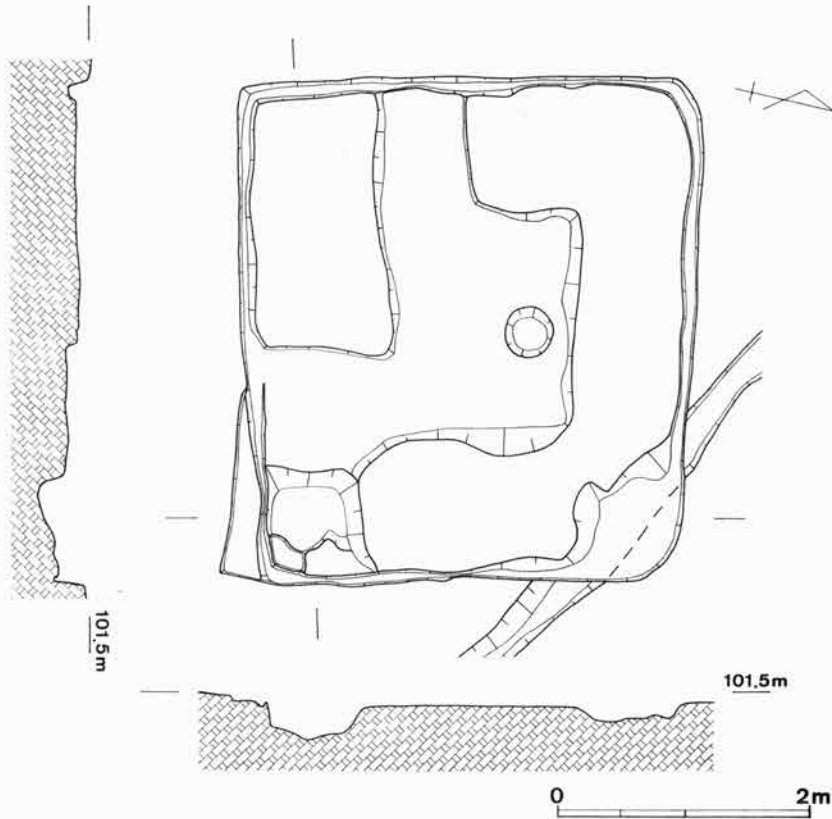
昭和58年度は、大溝や竪穴式住居跡また倉庫跡がB拡張の両側にも存在すると考えられたため、約2,000m²の発掘調査を行った。SD01の延長と考えていたSD03は、SD02と同じ様にSD01に合流する溝で、SD01は北側の畦に沿って流れることがわかった。また、調査地東端からもSD01に合流する溝(SD07)を検出した。このSD07の発見によって、約60m毎に北流する溝SD03・SD02・SD07がSD01に合流していることがわかった。



第4図 竪穴式住居跡 SB01 実測図

これは、小金岐古墳群の位置する丘陵から東流する自然流路 SD 01 を利用して、環濠的役割りを行ったと思われる SD 03・SD 02・SD 07 を設けることによって、生活空間をつくり出したものと考えられる。以上のことから、B 拡張の西側を拡張することは、一集落の規模解明につながるものと思われた。

掘削を行ったところ、後世の削平を受けていたために、現地表面から遺構面までがかなり浅く、竪穴式住居跡や倉庫跡はなかった。今回検出した遺構は、SD 01・SD 04 の延長とそ



第 5 図 堅穴式住居 SB02 実測図

れに合流する SD 03 と、性格が不明な土坎状遺構 2 基と SD 09 である。調査は、各遺構の掘削と昨年度掘削出来なかった、SD 02 が SD 01 に合流する付近の掘削も行った。

両年度の調査の結果、亀岡市では初めてのベッド状遺構を有する堅穴式住居跡 2 基と、堅穴式住居跡を囲む様に SD 01・SD 02・SD 03 を検出した。これらの遺構は、後世にかなりの削平を受け、全体的に遺構の残りは悪く、一集落の規模解明には至らなかった。しかし、自然流路を部分的に改修し、人工による溝を自然流路に流すことによって生活空間をつくり、環濠的な集落を築いていたことがわかった。また、SD 07 の発見によって、ある一定の間隔で人工の溝を設けていることもわかった。これは、この付近に以上のような形態で古墳時代前期の集落が存在したことを物語る。

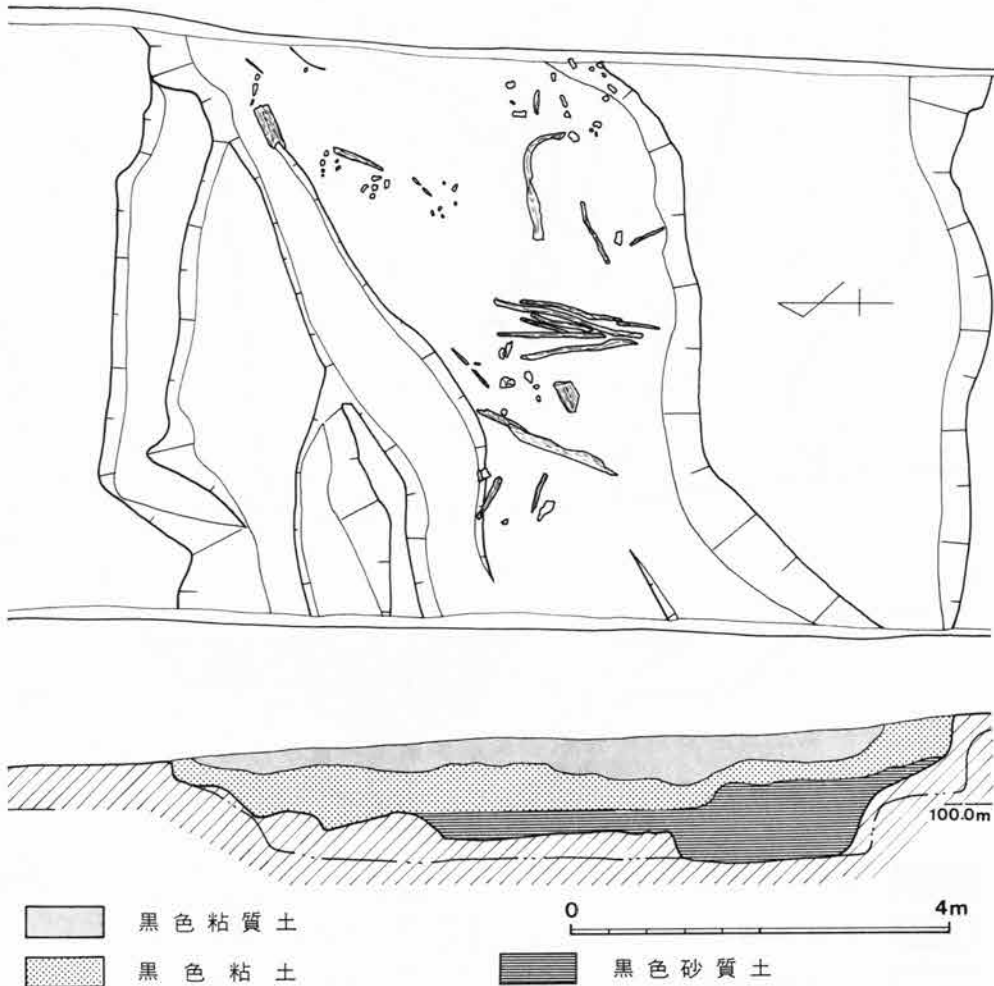
調査中に、水資源開発公団から工事用通路を取り付けるため、調査地北側の道路を拡幅するとの連絡があった。拡幅幅が 2 m 程であるため、立ち会い調査によって、遺構の存在を確認することにした。その結果、幅 5.6 m の溝を検出することができた。これも、今回検

出した溝と同じ性格のものと考えられ、あるいは、AO 20 グリッドで発見した溝と関連するものかもしれない。

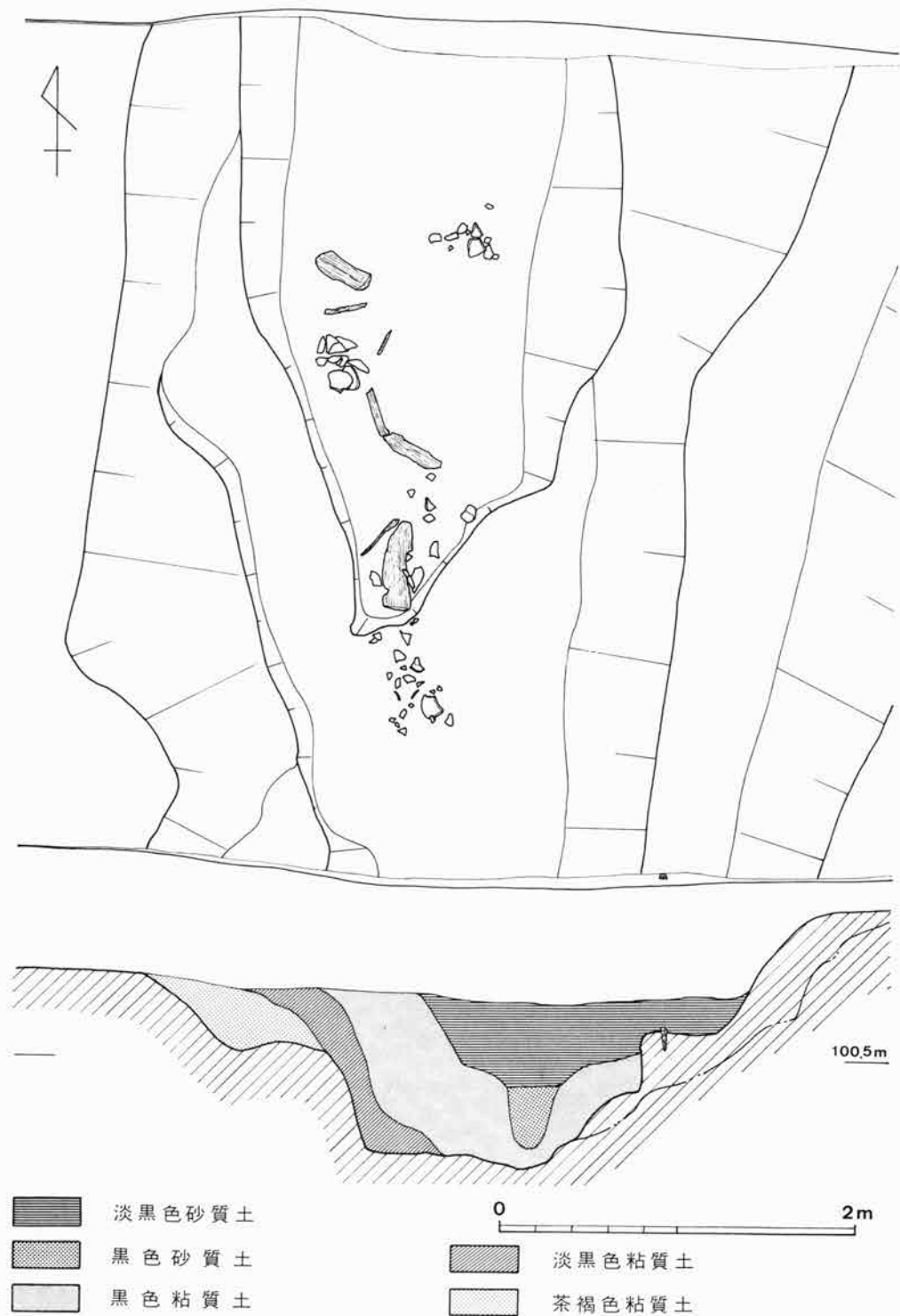
4. 検出遺構

昭和57年度・58年度に検出した主要な遺構は、竪穴式住居跡 (SB 01・SD 02) と大溝 (SD 01) と溝 (SD 02・03・04・05・06・07・08) と土塚状遺構 2 基と柱穴と工事中に発見した溝である。

SB 01 東西 5.5 m, 南北 5.0 m とわずかに東西方向に長い竪穴式住居跡である。かなりの削平を受けており、壁の高さは約 20 cm 残っていた。壁の周囲を幅約 10 cm の溝が巡り、住居跡の北東隅と南辺中央部の 2 箇所から貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は東西 50 cm, 南北 80



第 6 図 SD01 実測図



第7図 SD02 実測図

cm程で、深さは、床面から35cmを測る。また、中央部よりも四方が一段高くなるベッド状遺構を有する住居跡で、幅約1m、中央部より約10cm高いものである。このベッド状遺構の四隅から柱穴も確認している。住居跡内からは、布留式土器片が出土しており、床面直上から甕の口縁部などが出土した。(図版第8)

SB02 東西4m、南北3.6mとわずかに東西方向に長く、SB01よりも小規模な竪穴式住居跡である。東北隅は、SD06と切り合っており、SD06よりSB02の方が古く、住居跡のほぼ中央の柱穴は、SB02以降のものである。後世に攪乱を受けているが南東隅に貯蔵穴があり、SB01と同様にベッド状遺構や周溝を有する竪穴式住居である。貯蔵穴は、東西80cm、南北70cm、深さ約30cmを測り、ベッド状遺構は、幅約1m、高さ10cmである。ベッド状遺構は、SB01程良く残っていないが住居跡の南辺と西辺に幅70~90cmの切れ目が見られる。おそらく、どちらかが住居の出入口であったものと思われる。この竪穴式住居跡はSB01と異なり、柱穴がなく、住居跡付近から柱穴もなかったことから、どのような建物であったか明確でない。住居跡内からは、布留式土器片が出土した。

SD01 小金岐古墳群が位置する丘陵裾部から東流し、千代川町小林を流れ、大堰川に合流すると思われる自然流路である。調査範囲内では、竪穴式住居跡の北の畦に沿って流れている。その規模は、最大幅約10m、深さ約1.5mで、調査対象地内の長さは約150mを測る。竪穴式住居跡の北側を掘削したところ、削平を受けており、断面を観察する限りにおいては深さ約2m近い溝であった。溝内の堆積土は、大きく3層に分かれ、上層には古墳時代から平安時代にかけての須恵器片が混入しており、中層と下層からは、布留式土器片と木製品が出土している。また、溝底では、さらに北東方向の溝を掘り、その方向に流れるように板材を立てるなど、水量または水流の調節を行っており、部分的に人の手が加わっていることもわかった。この様に古墳時代前期以降に部分的な改修を行い、灌漑用として、また生活用として、この自然流路を利用したものと考えられる。溝内出土遺物としては、布留式土器片以外に流木が大半を占めるが、杭や板状木製品のほかにくわやちぎりが出土している。(第13図)これらの木製品は、布留式土器片と共に出土しており、古墳時代前期のものと思われる。第9図に示した弥生時代の遺物は遺構周辺からの転入とみられ、調査地西側に所在する丹波養護学校付近に、該期の遺構があるものと考えられる。しかし、昭和58年度に千代川遺跡第4次調査として、B拡張から北西約300mの所を調査したが、弥生時代の遺構は検出していない。

SD02 SB01の東側を北流し、SD01に合流する溝で、人工に因るものである。SD02の規模は、最大幅約3m、深さはSD01に近づく程深くなり、約1.2mを測る。溝内の堆

積土は、全て西側の堅穴式住居跡側から埋っており、その堆積状態を見ると、SD 02 が機能していた頃は深さ 1.5 m 前後の溝であったと思われる。また、堆積土は茶褐色粘質土・淡黒色粘質土・黒色砂質土・淡黒色砂質土の順に堆積しているが、流土が堆積するたびに改修工事が行われている。

溝内出土遺物の大半は、布留式土器片で、わずかに木片も出土している。布留式土器はSD 01 溝底出土のものや、SB 01 の床面出土のものと同じ時期であり、堅穴式住居跡に伴うものである。遺物は、狭い範囲に一個体の土器片が散乱していることから、あるいは投棄したものかもしれない。

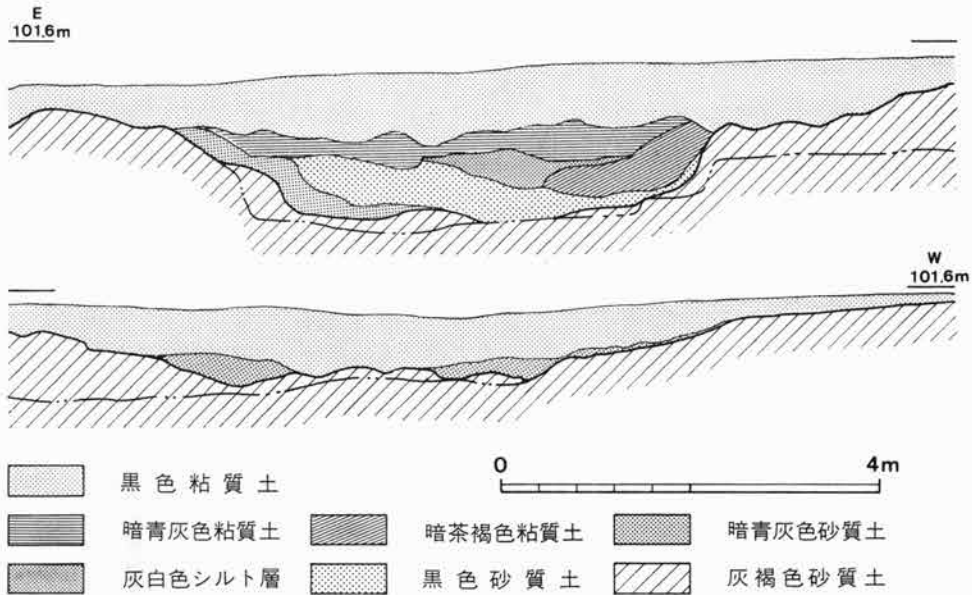
SD 03 調査地南西隅から、北東の方向に流れ、SD 02 から約 60 m 西側の人工に因る溝である。規模は、幅約 4 m、深さ約 1.2 m を測る。この溝からの遺物はなく、SD 03 付近から西側はわずかに傾斜が急になることから、SD 03 から西側には集落はないものと思われる。

SD 07 この溝は、調査対象地の周囲に工事用道路を設ける際に発見したものである。SD 02 から約 60 m の東側を、北東方向に流れる人工に因る溝である。規模は、幅約 1.5 m、深さ約 1 m を測る。溝内からは、数点布留式土器片が出土したにすぎない。

以上の遺構が、古墳時代前期に築かれ営まれたものである。調査地の西方約 100 m に位置する大池付近を源として東流する自然流路 SD 01 に、約 60 m 毎に、西から SD 03・SD 02・SD 07 を合流させることによって、環濠集落のようにしたものと思われる。周知の遺跡である、池上遺跡のように、溝を巡らせていたかについては、調査地最南端において検出したために確認することは出来なかった。しかし、SD 03・SD 02・SD 07 は同じ方向に流れており、各溝の規模もほぼ同じである上に、これらの溝は全て人工に因るものである。このように微高地に立地する千代川遺跡は、自然流路を利用し、3条の溝を設けることによって、人為的に区画を行っている。仮りに、一辺 60 m 四方の人為的区画を行ったとすれば、3,600 m² の生活空間があったことになる。今回の調査では、その様な区画が、2区画存在したことを確認した。その区画内に住居が構成されるが、千代川遺跡では、後世に削平を受けており、堅穴式住居跡2基にとどまった。しかし、この堅穴式住居跡は、丹波地方で初めての、ベッド状遺構を有する住居跡で、今後検討しなければならない遺構である。

SD 04・SD 05・SD 06・SD 08 (第3図)

この3条の溝は、堅穴式住居跡をはさむようにあり、SD 06 のみが、SD 02 の北東隅に重っている。切り合いから、SB 02 よりも SD 06 の方が新しい。規模は、幅約 20 m、深さ約 20 cm を測る。SD 06 をはじめ、SD 04 と SD 05 から、溝内出土遺物がなく、明確な時期はわからない。しかし、溝の規模から見ても、B 拡張北西隅に見られる溝群と同時期の鎌倉



第8図 工事中発見の溝

時代の溝と思われる。

土壇状遺構・柱穴

SD 04 北側の土壇状遺構の規模は、長辺 1.5 m, 短辺 0.8 m, 深さ 3 cm であるが、出土遺物がなく、時期は不明である。また、柱穴については、SB 02 付近から、4 個の柱穴を検出したが、堅穴式住居跡に関連するものでもなく、遺物も出土しないことから、時期・規模などに関しては不明である。

工事中発見の溝

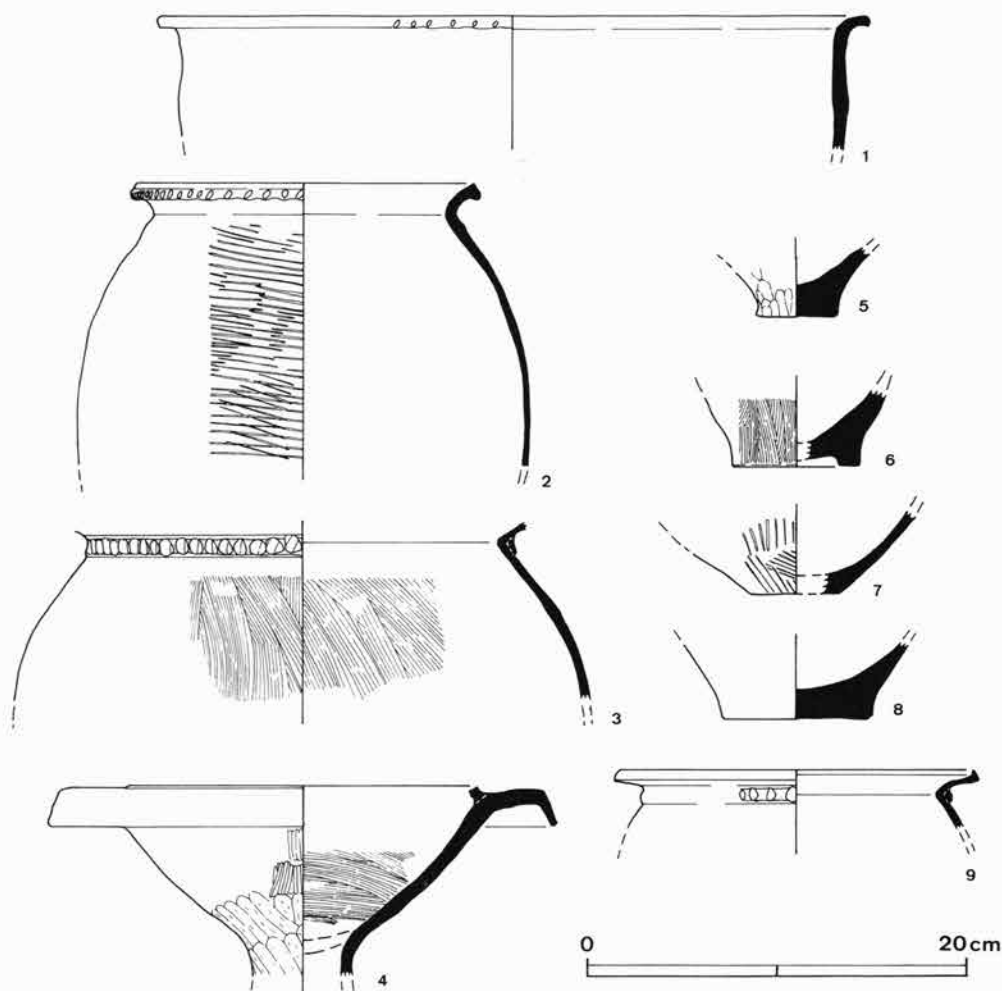
調査対象地の北側の道路を、工事用道路とするため、拡幅工事を行うことになった。工事幅が 2~3 m ときわめて狭いことから、立ち会い調査によって、遺構・遺物の確認を行った。重機によって工事を行っていたところ、幅 5.6 m, 深さ 1 m の溝を検出した。溝底近くから、布留式土器片 2 点を表採したことから、この付近にも、古墳時代前期の集落跡が存在する可能性がある。

5. 出土遺物

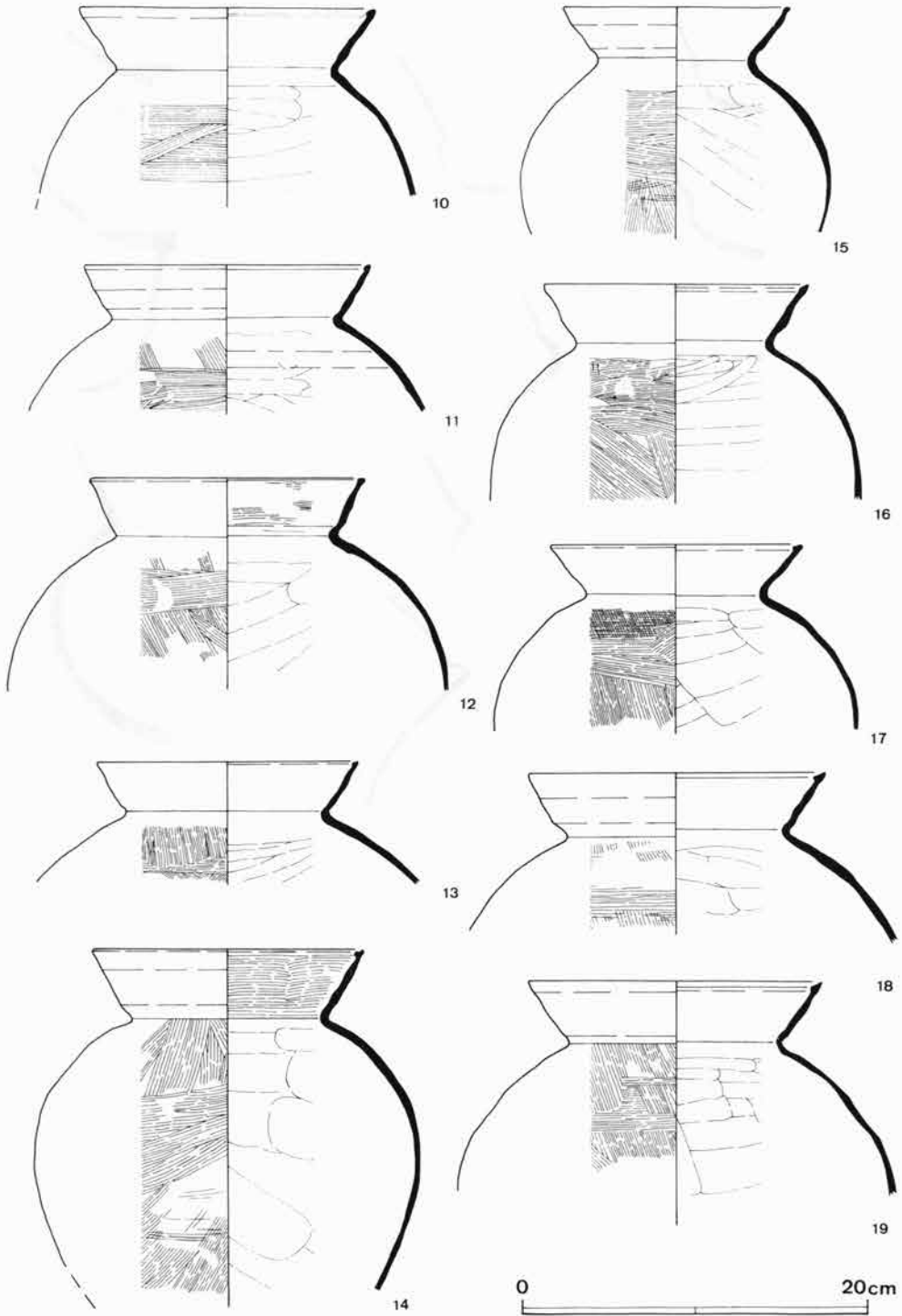
今回の調査で出土した遺物は、前期から後期にかけての弥生土器（第9図）と、堅穴式住居の時期である、古墳時代前期の古式土師器（第10図・第11図）と、古墳時代から平安時代にかけての須恵器（第12図）と、古墳時代前期の木製品（第13図）と、石器・鉄器（第14図）

がある。この中でも特に、古式土師器の出土量が多く、また弥生時代中期の土器の出土は、亀岡盆地においては希である。

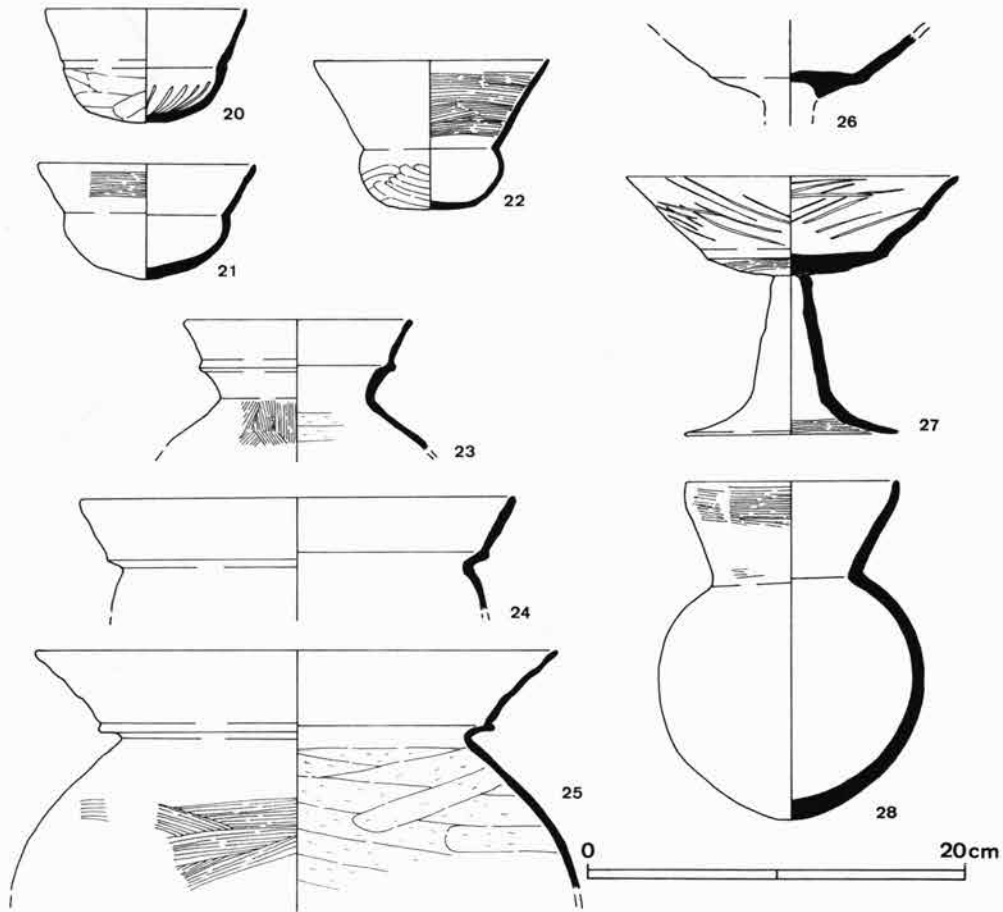
弥生時代前期の遺物は、第9図の(1)のみである。口縁部が逆L字状に屈曲しており、口縁端部に刻み目を施している。この形態のものは、太田遺跡で多量に出土しており、大堰川右岸の微高地上で、この頃から、またかなり広範囲にわたって集落が営まれていたものと思われる。弥生土器(3・4・9)は、中期の遺物である。甕(3・9)は、頸部に篋による連続圧痕文をくわえた凸帯をめぐらし、口縁端部を上方につまみ上げている。高杯(4)は、口縁部が水平に広がり、口縁部外縁が下方に折れ曲がる。また、口縁部内縁に1条の凸帯を巡らしている。



第9図 出土遺物実測図(1)



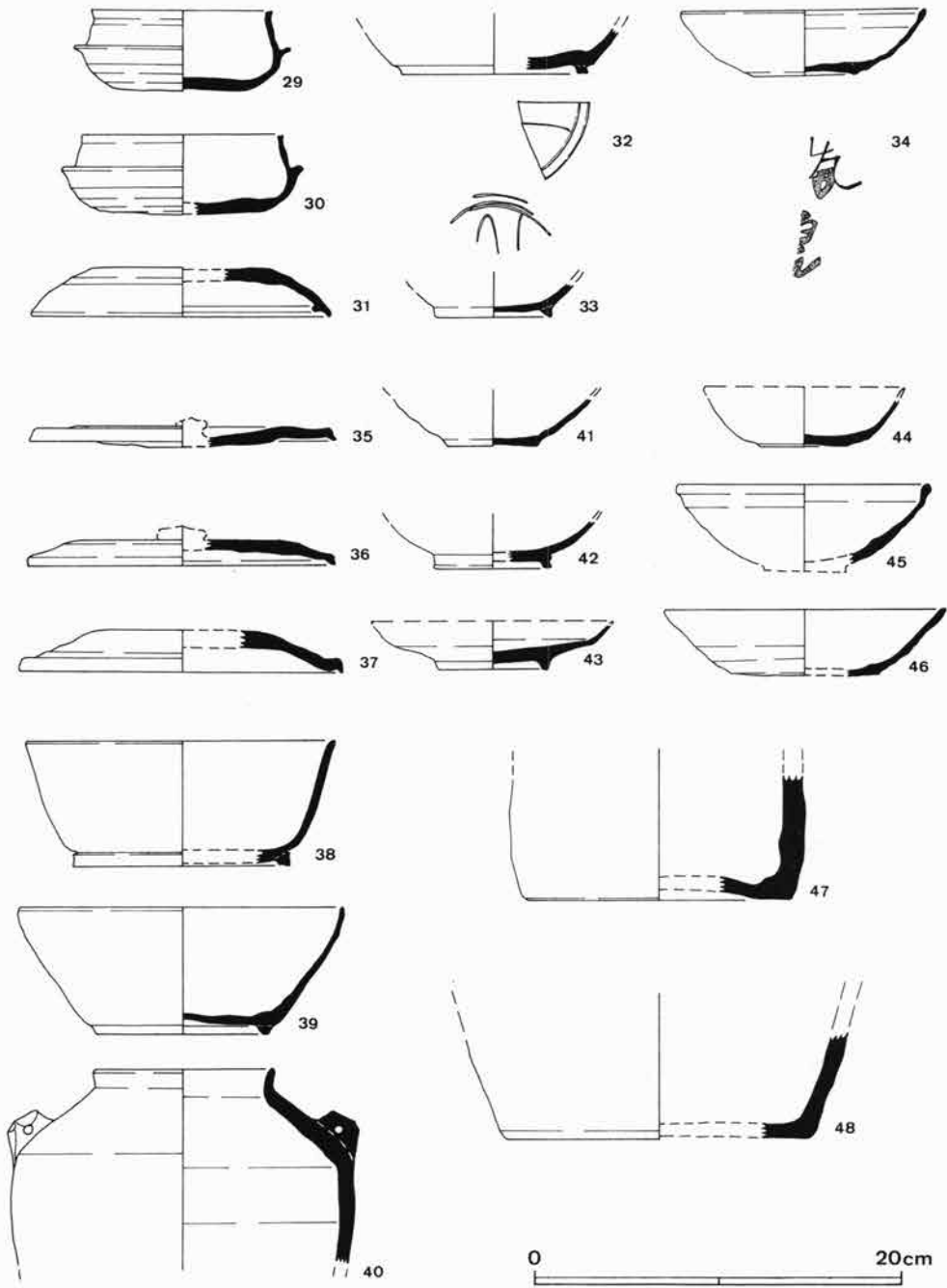
第10图 出土遺物実測図(2)



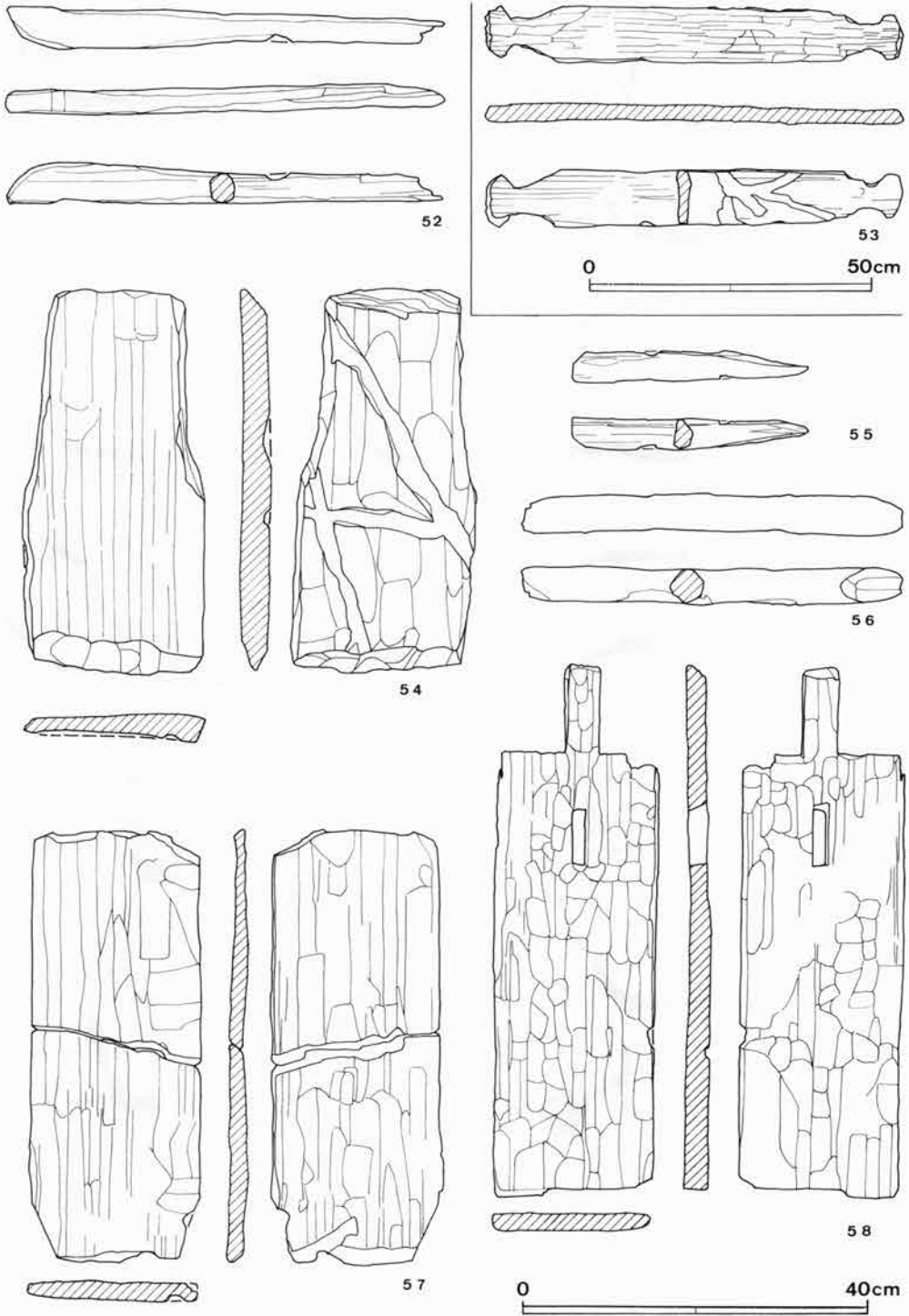
第11図 出土遺物実測図(3)

第10図は、SD 01 と SB 01 から出土した古式土師器である。これらの甕は、口縁部の形状により大きく5つのグループに分類することができる。口縁端部が内側に肥厚するもの(10・11)と、平坦なもの(12・15)と、口縁端部が外上方に尖るもの(16)と、端部がわずかにくぼむもの(13・14・17)と、口縁端部断面が三角形を成すもの(18・19)である。これらは、いずれもほぼ同時期の甕と考えられる。手法上の特徴としては、体部外面に縦・横・斜め方向のハケ調整を行い、内面はヘラ削りによる。器壁は、3~4 mm とかなり薄いものである。

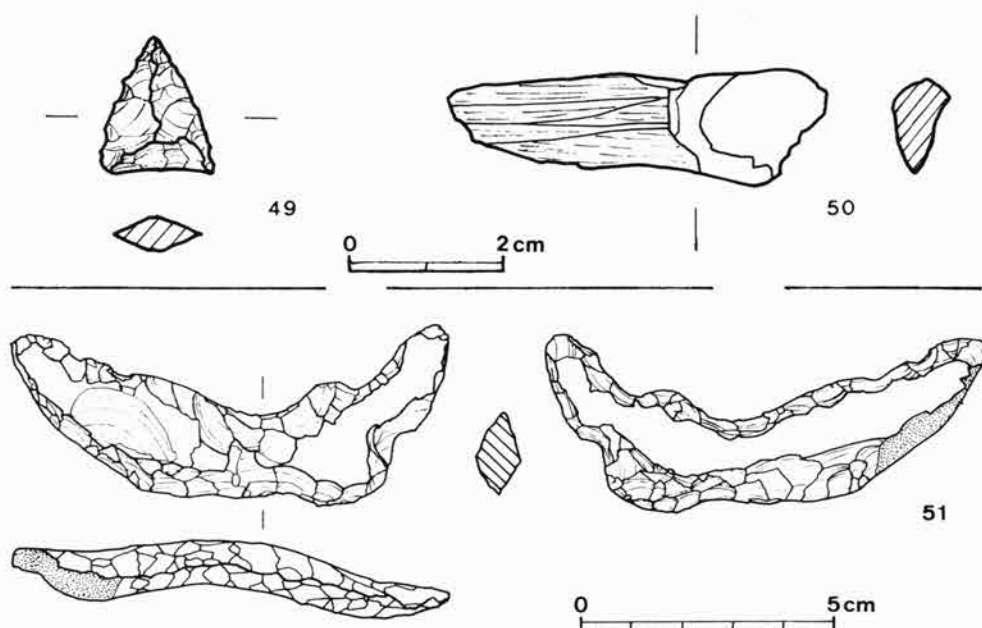
第11図は、甕以外の古式土師器である。小型丸底壺(20・21・22)と二重口縁をもつ壺(23・24・25)と高杯(26・27)と壺(28)である。小型丸底壺は、比較的古手のもので、奈良県大和郡山市の発志院遺跡の編年試案^(注10)によると、布留1式から布留2式の古段階に当るものと思われる。二重口縁を有する壺(25)は、SB 01 より出土したものである。摩滅しており、



第12図 出土遺物実測図(4)



第13図 出土遺物実測図(5)



第14図 出土遺物実測図(6)

器壁の調整が明確でないが、体部外面は、ハケ調整を行い、内面はヘラ削りを行っている。高杯(26・27)は、SD 02より出土したもので、みがきを行い仕上げている。球型に近い体部から「ハ」の字状に広がる口縁をもつ壺(28)は、丁寧にナデ調整を行っており、手法を明確に示すことはできなかった。

第12図は、主に遺構面より上層で出土したものである。

古墳時代の遺物としては、杯身(29・30)とかえりのつく蓋(31)がある。杯身(29・30)は、立ち上がりが高く、(30)よりも(29)の方がわずかに古手と思われるが、陶邑の編年の第1期3段階に相当する遺物と考えられる。(31)は、かえりのつく蓋で、陶邑の編年の第III期3段階に相当する。

奈良時代の様相を残す遺物としては、蓋(35・36)と杯(32)がある。天井部から「S」字状に屈曲して、口縁端部に至る蓋(35・36)は中央部が欠損しているが、つまみを有するものである。亀岡市南部に位置する篠窯跡群の西長尾1号窯頃に相当すると考えられる。蓋(37)は、中央部が欠損しているため、つまみの有無が確認できず、つまみの無い蓋であれば、(35)や(36)よりも時期が新しくなるため、平安時代の遺物としておく。杯(32)は、底部外面にヘラ記号を有する。どのようなヘラ記号であるかは、破片のため不明である。

平安時代の遺物は、(38)から(48)と(34)である。杯(38)は、貼り付け高台で、底部

外縁を巡ることから、平安時代前期の遺物と思われる。杯(39)は、貼り付け高台が退化したものであるため、杯が消滅する平安時代中頃と考えられる。椀(42・43)は、削り出しによる高台を有したもので、篠窯跡群の前山・黒岩窯跡頃と思われる。(34)と(41)と(44)から(46)の椀は、底部が糸切りによる切り離しで、体部に水びきによる凹凸が残っていることから、篠窯跡群の西長尾5号窯頃と思われる。椀(34)は、墨書土器で底部中央に二文字記されているが、読解できなかった。下の文字は、「嶋」か「鳥」と思われるが、欠損しているため不明である。

木器

第13図の木器は、SD 01 から出土したものである。形のわかるものは、織具の一部品と考えられるもの(52・53)と、くわの未製品(54)と、くい(55・56)と、建築材と思われるもの(57・58)がある。もっとも出土量の多いものはくいである。

ちぎり(53)は、長さ72cm、幅4cmを測るもので、SD 01 より出土している。織具(52・53)の出土により、今回検出した竪穴式住居内で織物を作っていたものと思われる。また、くわ(54)の出土は、調査地東側の低湿地で、農耕を行っていたことを示す資料と言える。建築材(57・58)は、板状のものであるが、これらが建物のどの部分に使用されたものかは、不明である。

石器・鉄器

石鏃(49)と石ヒ(51)は、埋積層より出土したもので、遺構に伴うものではない。刀子(50)は、SB 01 内から出土したものである。

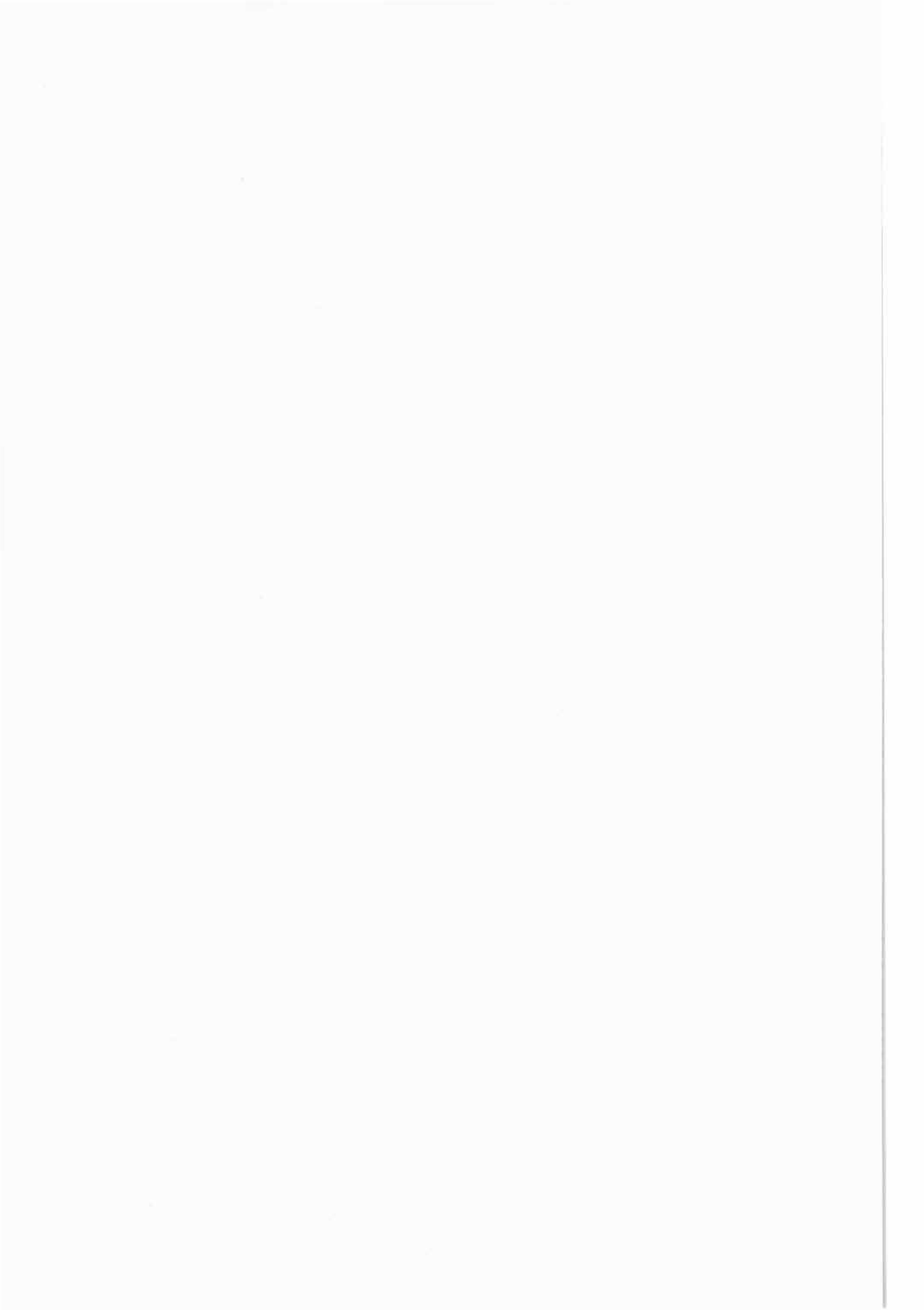
6. ま と め

調査の結果、古墳時代前期には、行者山から派生する微高地上を自然流路を利用して、そこに人工による溝をめぐらすことによって、集落を区画し、生活空間をつくり出していた環濠集落であることがわかった。その生活空間の中に亀岡市では初めてのベッド状遺構を有した、竪穴式住居跡2基を検出することができた。検出した遺構は、いずれも削平されており自然流路や人工による溝に沿って柵が設けられていたか、あるいは土盛りされていたかは不明である。しかし自然流路に一定の間隔で人工による溝が合流していることから、SD 01 に沿って、企画された大規模な集落が営まれていたことを想像することが出来る。また、調査地南方約700mに位置する北金岐遺跡においても、自然流路を検出しており、溝内から布留式土器が出土していることから、亀岡盆地西側の微高地上には、古墳時代の集落がかなり広範囲に営まれていたと思われる。

また、出土遺物から、当時の生活を知ることができる。織具・くわ・建築材等の出土は、竪穴式住居内での生活や、大堰川近辺の低湿地において農耕を営んでいたことを知る事が出来る。出土遺物の中でも、畿内第Ⅳ様式に相当する遺物は、亀岡盆地においては希であり、流れ込みによるものであることから、調査地西側に、その頃の遺構があるものと思われる。今回の調査によって出土した遺物は、口丹波地方の古墳時代前期の様相を知る上で、貴重な一資料であり、検出した遺構は、当時の生活を知る上で重要なものであり、今後検討を要するものである。

(岡崎 研一)

- 注1 村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1982-1)』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982
村尾政人「千代川遺跡第4次」「千代川遺跡第5次」(『京都府埋蔵文化財情報』第10号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983.12
石井清司・森下 衛「北金岐遺跡B地点検出の大溝について」・森下 衛「千代川・桑寺遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984.3
- 注2 天野 裕・岩崎公一・榎 康史・緒方 泉・河原昭夫・河原浩一・小谷 悟・小仲幹夫・小早川泰章・谷口秀樹・中井秀樹・中沢 勝・中西 宏・萩原浩昭・長谷川克功・原田昭一・東前龍一・細川康晴・村山一弥・森田由郎
赤司 紫・荒木和子・加藤由美・川田美由起・雲出美智子・小柳純子・関本典子・田中智子・土屋桂子・並河智実・難波千重・東山結花・山本弥生・萬谷幸美
田中格一・真継幸男・八木初次・渡辺春三
野々村文子・原田敦子・俣野利江・俣野ふじを・俣野まさ枝・松井よし子・山内きくの・山内タカ子・八木千代江・八木まさ子・八木美重子・八木淑子・八木よし子
- 注3 注1と同じ
注4 注1と同じ
注5 注1と同じ
- 注6 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会)1978
安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)1979
- 注7 安藤信策・吉水真彦「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会)1977
- 注8 引原茂治ほか「医王谷3号墳・医王谷焼窯跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報(1983-7)』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983
- 注9 注1・注6と同じ
- 注10 『発志院遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1981



2. 国道9号バイパス関係遺跡 昭和58年度発掘調査概要

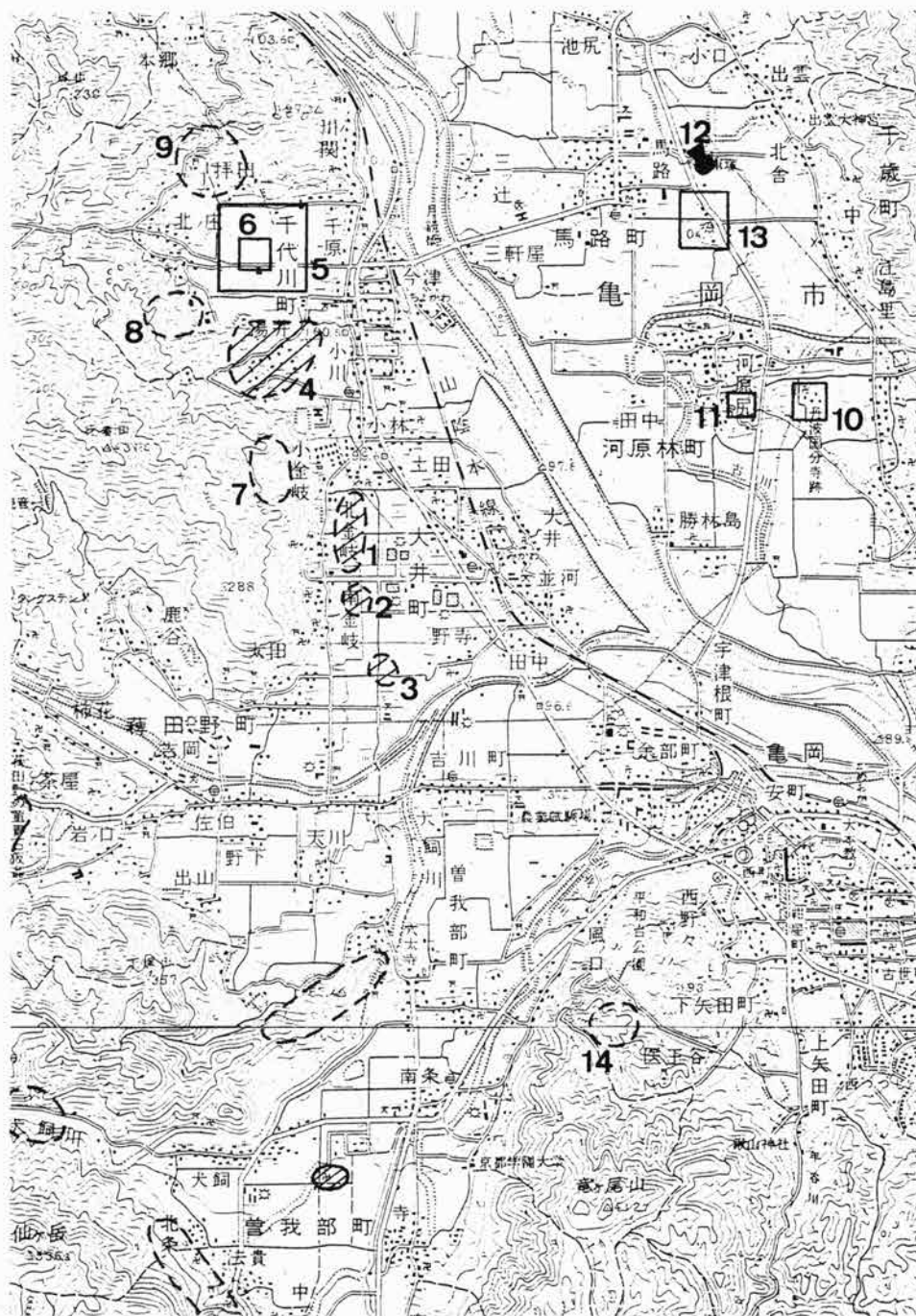
はじめに

国道9号バイパス関係遺跡は、建設省近畿地方建設局の国道9号バイパス建設に伴う事前調査であり、京都市右京区大枝沓掛町から京都府船井郡丹波町須知に至る延長32kmの範囲内に点在する埋蔵文化財（遺跡）の総称である。昭和50年度から昭和57年度までに調査を実施した遺跡は、京都府教育委員会、当調査研究センターの刊行している各年度毎の発掘調査概要に報告しているが、既に調査を終えた遺跡及び今後調査が必要な遺跡を列举すると以下の遺跡がある。〔園部町〕瓜生野古墳群・善願寺遺跡^(注1)・曾我谷遺跡^(注2)〔八木町〕小谷古墳群〔亀岡市〕拝田古墳群^(注3)・千代川遺跡^(注4)・小金岐古墳群^(注5)・北金岐遺跡^(注6)・太田遺跡^(注7)・条里遺構^(注8)・篠窯跡群^(注8)。また昭和54年度より老ノ坂峠から曾我部町風ノ口に至る約10kmの区間を日本道路公団大阪建設局が施工することとなり、その範囲に分布する篠窯跡群^(注8)・医王谷古墳等^(注9)の発掘調査概要は、老ノ坂岡バイパス関係遺跡として報告している。

今年度の調査は、昭和56年度より継続して実施している条里制跡の大井町北金岐地区試掘調査、昨年度調査により弥生時代の集落跡が予想された北金岐遺跡及び昭和56年度千代川町北ノ庄で弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての住居跡を検出した千代川遺跡の未調査地の発掘調査である。

北金岐地区の条里制跡試掘調査は、北金岐遺跡と重複していることが予想されたため、当初条里制跡試掘調査1,500m²、下層遺構及び拡張面積1,500m²として調査を進めた。しかし北金岐遺跡は当初予定していた以上に範囲が広がり、建設省京都国道工事事務所と再三に亘る協議を行い、最終的には6,500m²の大規模な調査となった。

現地調査は、昭和59年5月18日より北金岐地区の調査、同年10月11日より千代川遺跡の調査に入った。また後述する調査成果を得て、同年12月18日に北金岐遺跡の現地説明会を開催した。発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査課・主任調査員 水谷寿克・同調査員 石井清司・同調査員 村尾政人・同調査員 田代 弘・同調査員 森下 衛が担当して行ったが、補助員、整理員、作業員として調査に参加していただいた方^(注10)には心から感謝する次第である。また本書の作成にあたっては各担当者が分担して報筆したのが、文末にて名を記し文責を明らかにした。なお、北金岐遺跡については、広範囲かつ長期的な遺構であり、また出土遺物も膨大な量にのぼるため、今回は概要報告にとどめるが、近々あらためて本報告を



第15図 北金岐遺跡位置図

1. 北金岐遺跡 2. 南金岐遺跡 3. 太田遺跡 4. 千代川湯井遺跡 5. 丹波国府推定地 6. 桑寺廃寺 7. 小金岐古墳群 8. 北ノ庄古墳群 9. 拝田古墳群 10. 丹波国分寺 11. 御上人林廃寺 12. 千歳車塚古墳 13. 三日市遺跡 14. 医王谷古墳群

作成したい。

(水谷 寿克)

(1) 北金岐遺跡

1. 北金岐遺 A 地点の調査

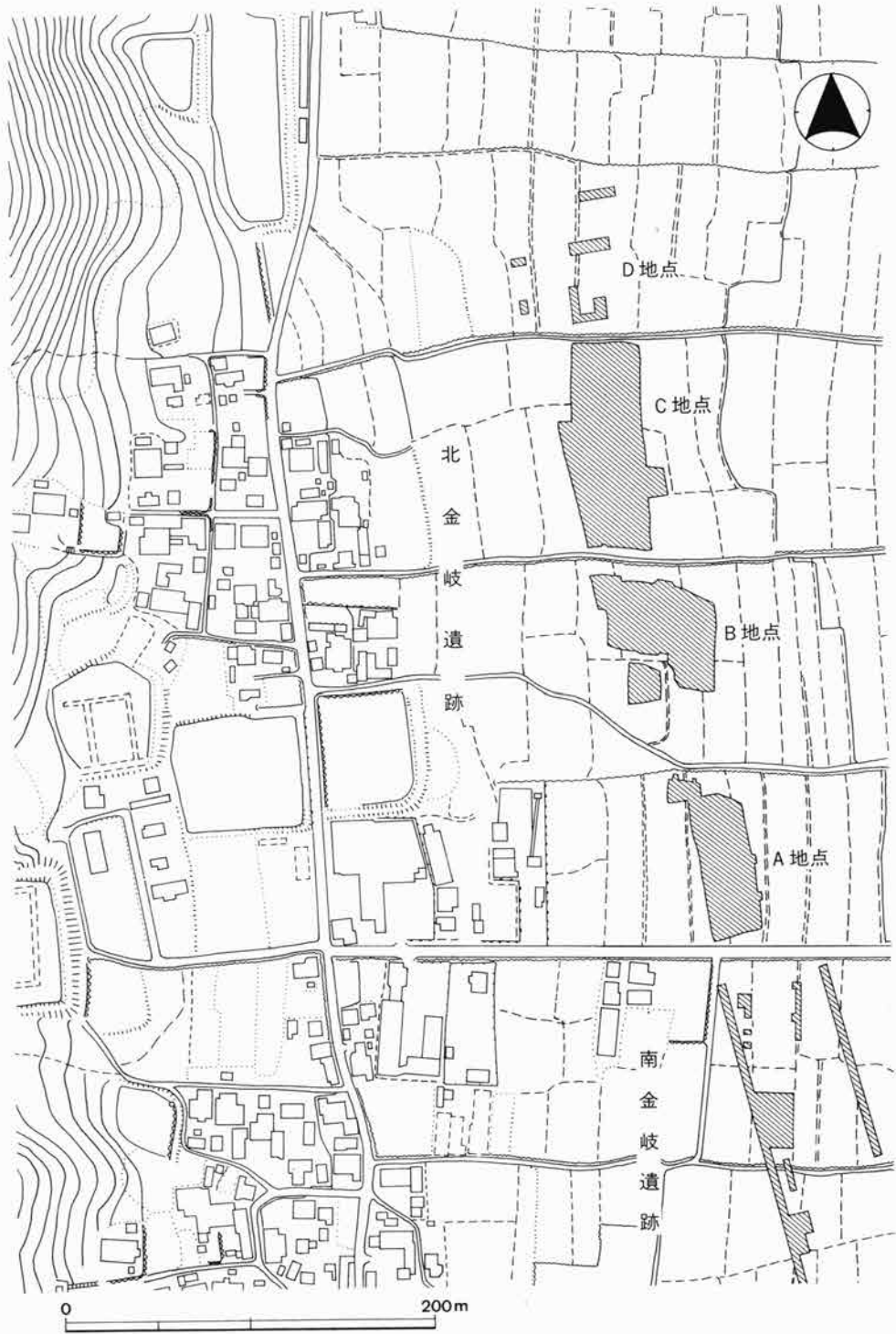
調査対象地は、亀岡市大井町大字南金岐小字尾垣内～同町大字北金岐小字小山に所在する。標高は調査地西限で 104 m、東限で 101 m を測り、今回の調査対象となっている丘陵の南端を占めることになる。行者山東麓では耕地としての土地利用が水田から畑地へと変わる地点にあたる。現状は水田で階段状に耕地を造作することによって水平面を得、緩傾斜地をうまく土地利用している。

調査は昭和57年度に実施した試掘調査の成果にもとづき、遺物・遺構の集中してみられた地区南半を中心に拡張を行い、遺物の包含状況、遺構の遺存状態をより詳しく調査確認し、あわせて資料を作成し記録保存を図ることを目的として行った。昭和58年5月18日に着手し、同年8月31日に終了した。

(1) 調査経過

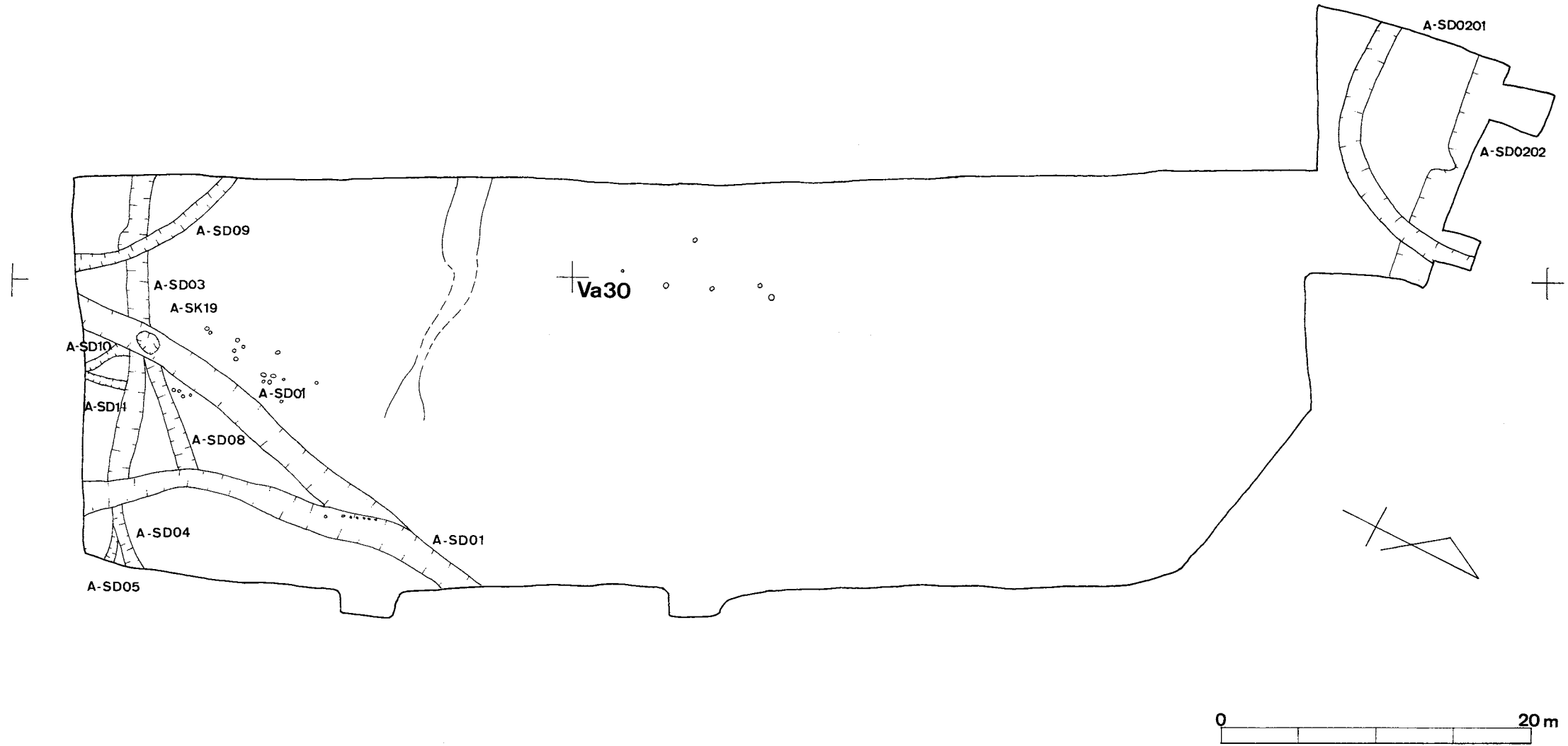
調査を開始するにあたってはまず地区割りをを行った。地区割りにあたっては試掘調査の際設定した路線図にもとづいて実施することとした。すなわち、建設省で設定した予定道路センター杭を用いて中央軸線を定め、調査地を 75 m ごとの大地区に分割し、更に 3 m 四方の区画に分割した。地区の表示は、南北方向は大地区を大文字のアルファベット、小地区を小文字のアルファベットで表わし、東西方向は予定道路センター杭を30ラインと仮定してアラビア数字で表わし、両者を組みあわせて地区を呼称した。各地区、グリッド等の名称は西南隅の杭によって代表させた。

試掘調査では道路予定方向に沿って平行するトレンチを設定するのと併行して 3 m 四方の試掘杭を各所に設け、調査地内の土層の堆積・遺物の包含状況を観察することとした。掘削は、トレンチでは耕作土、床土までをすべて重機(パワーショベル)によった。床土以下は全て人力によって行った。グリッドは大半は人力のみによって掘削した。トレンチ・グリッドともに床土除去後、掘削を中断して土層の断面、平面の清掃を行いその写真撮影断面図作成を行い遺構、遺物の集中度をみた。層序は耕作土の下に2層の床土、黒褐色砂質土があり、地山に至るのが基本である。床土下層から土師器、須恵器、瓦器片などが少量ながら地区全体にわたってみられ整地が中世以後に行われたことが示唆された。条里制についての顕著な



第16図 北金岐遺跡地形図

| n | o | p | q | r | s | t | u | v | w | x | y | a | b | c | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u | v |



| n | o | p | q | r | s | t | u | v | w | x | y | a | b | c | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u | v |

第17图 北金岐A地点遗构图

遺構は検出されず、遺物の上で認められた平安～中世期の明瞭な遺構も検出し得なかった。遺構は主に調査地の末端、すなわち丘陵状地形の端部側において顕著に認められた。この地点は沖積作用による再堆積が多くみられ複雑な土層を呈している。遺構は、溝・ピットのみであって帰属時期不明のものを除いて全て弥生時代後期に属するものであった。また調査地北端において検出した溝状遺構のうち一本は弥生時代後期に属するものであることを知り得た。その他自然流路を検出した。

今回の調査では上記の成果に基づいて調査対象地の南半を主に拡張し精査を行った。掘削は試掘調査同様、耕土、床土、黒色土層の一部までを重機（パワーショベル）によって剥ぎそれ以下を人力によって掘削した。

(2) 遺構について

遺構は全て地山上面ないしその上層の再堆積層中において検出した。

SD 01 幅 1.5 m, 深さ 1.2 m, 延長約 28 m にわたって検出した。丘陵状地形縁辺を巡るようにして北流する。検出場所によっては幅の広狭がみられた。SD 02 との合流点にしがらみ状の遺構を有する。遺物は南端に集中してみられ北半はわずかに破片がみられたのみであった。逆台形を呈する。弥生時代後期。

SD 02 SD 01 と合流する。幅 1.8 m, 深さ 1.4 m。逆台形～U字状を呈する。SD 01 との合流点まで延長約 20 m にわたって検出した。AS 36～AD 34 付近には地山ブロックまじりの土層が充填された痕跡が認められた。人為的な埋めもどし作業があったものであろうか。遺物は SD 03 との切り合いをみる付近～SK 19 付近に集中してみられた。弥生時代後期。

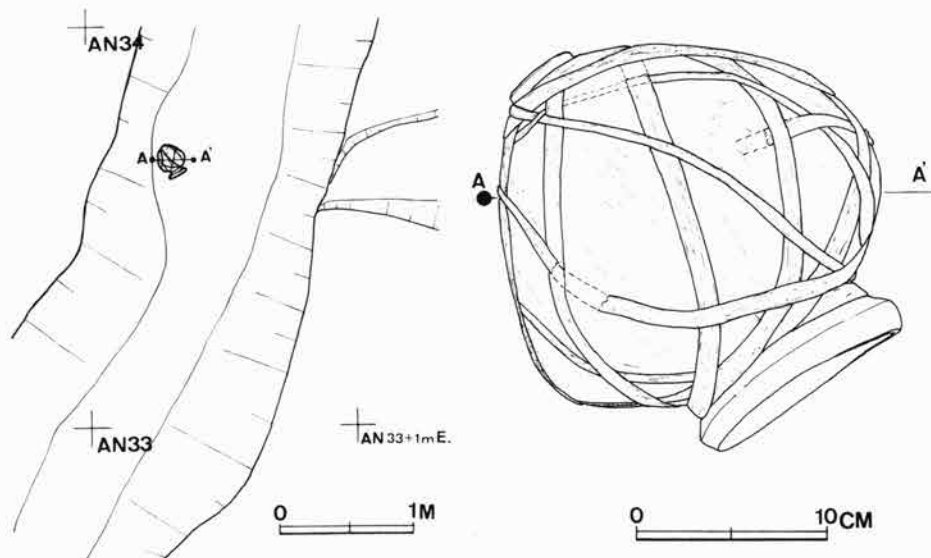
SD 03 幅 1.8 m, 深さ 0.2～0.3 m。山側から平地に向かって東流する。下方で検出した SD 08, SD 04, SD 05 はこれらと一連の関係を有しているものと思われる。いずれも 0.2～0.3 m の深さを有し、浅く広い溝である。SD 03 は SD 08 を切り、SD 04 は SD 05 を切る。弥生時代後期の土器破片をわずかに含む。

SD 09 幅 0.5 m, 深さ 0.2 m を測る。黄褐砂層の単層で形成されるU字形の溝である。ごく微細な弥生土器片を含む。自然流路か。

SD 10 幅 40 cm, 深さ 20 cm, 形状は弱いU字。砂層の単層で形成される溝。わずかではあるが、良好な遺物を出土。弥生後期。

SD 11 SD 10 と同様の規模、形状を呈する。ごく微細な弥生土器片を出土。SD 10 と隣接して存在。いずれも延長部を検出し得ていないため性格は明らかでない。

SK 19 SD 02 中にて検出。上面では検出し得ず、底面付近で検出した。長径 1.6 m, 短



第18図 被籠土器出土状況

径 1.2 m, 深さ 40 cm。SD 02 の機能が停止した後掘り込まれたものであろう。遺物は底部に土器細片が貼りついていた。SK 19 直上層では2個の完形土器を検出しているが SK 19 に属するか SD 02 の埋土中に属するかは断じ得ない。弥生時代後期。完形土器のうち一個は被籠土器である(第18図)。

SD 0201 調査地北端で検出された2条の溝のうち的一条。幅 1.2 m, 深さ 0.4~0.5 m。弧状を呈し堆積土中に水流を示すような砂層の堆積はみられなかった。下層より弥生土器が良好な状態で出土している。逆台形。

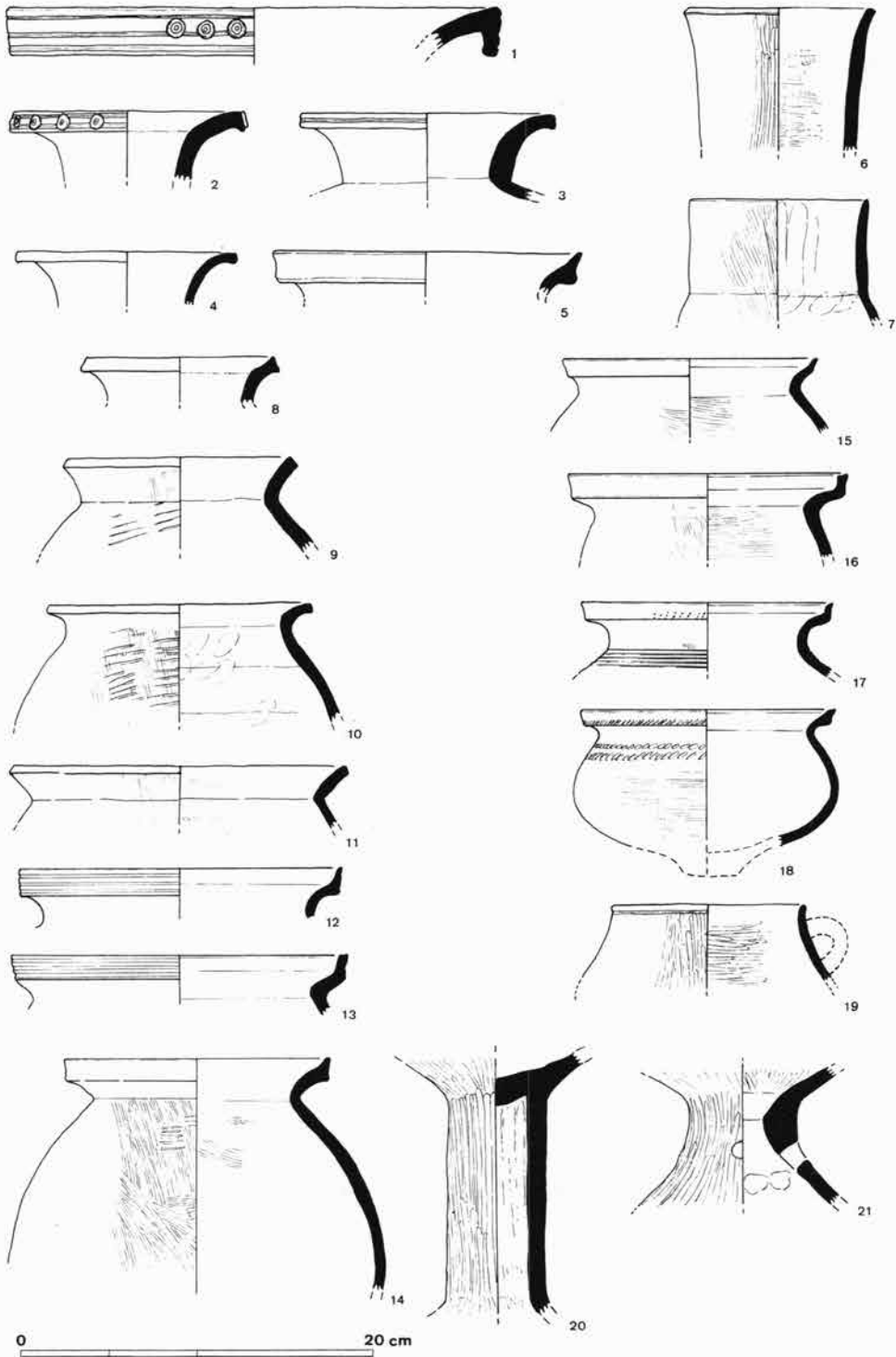
SD 0202 調査地最末端で確認された落ち込み状の遺構。幅は不明であるが深さは 0.6~0.7 m。瓦器, 須恵器小片をわずかながら含み形成時期が中世以後であることが知られる。

(3) 遺物について

A地点より出土した遺物は包含層より縄文式土器片, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 瓦器, サヌカイト剥片等がある。今回は SD 01, SD 02 及び SD 0201 より出土した遺物について略述する。

SD 01~SD 02 出土遺物(第19図)

広口壺(1)~(5), (19) 大きく外反する口縁部を持つ。口縁端面に粘土を貼付し下方に拡張し文様帯を形成するもの(1)~(2), 単純に外反しておわるもの(3)~(4), 二重口縁を持つもの(5)などがある。(1)は端面に3条の擬凹線を巡らしたのち3個一対(以



第19図 北金岐A地点SD01・SD02出土遺物

上)の円形浮文+竹管文を施す。胎土には主に粒径 1~2 mm の角礫が顕著に混入される。角礫は角閃石が主体をなし全体にチョコレート色を呈するいわゆる「生駒西麓産」の土器で、在地産のものとは明瞭に判別される。(2)は口縁端面を強くナデ、端面を拡張し擬凹線を2条施す。円形浮文+竹管文を等間隔に配する。(3)は口唇部に一条の擬凹線。ヘラ先状の工具による。(4)は装飾性を持たないもので、器壁も薄く小形である。(19)はタタキによる成形のち縦位のハケ。内面は部分的にハケのちナデ。

長頸壺(6)~(7) (6)は直に立ち上がり口縁部付近でやや外反する。口唇部付近に明瞭な端面を持つ。器表外面を縦位の丁寧なヘラミガキ、内面を横方向のやや粗い板ナデ状の調整。(7)の口頸部はやや短めで端面を丸くおさめる。外面タテハケ、内面タテ方向の強いナデ。肩部の張りが弱く長胴の形態を持つものであろう。

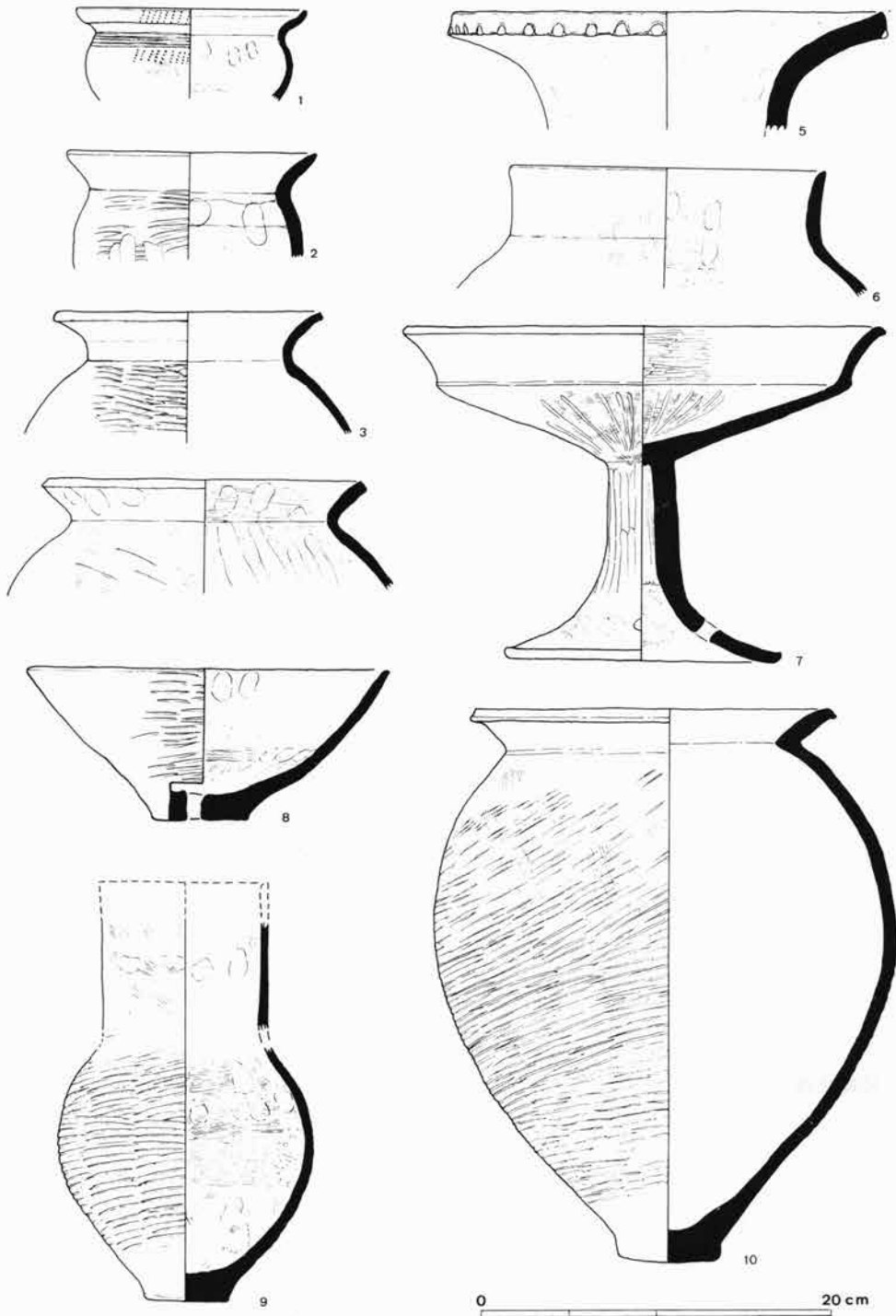
甕(8)~(18) 口縁が「く」の字状に単純に外反するもの(8)~(11)と複合口縁をもつもの(12)~(18)とがある。(9)~(11)は体部をタタキによる成形を行うもので、後ハケによる調整。(10)は内部に粘土紐接合痕がみられる。複合口縁を持つものには、口縁端面に3条の擬凹線を施すもの(12)・(13)、加飾を全く持たずナデで終るもの(14)~(16)、櫛描き烈点文を有するもの(17)・(18)の三者がある。擬凹線を施すものには端部を丸くおさめるもの(12)と端面を強くナデ、面をなし受口状を呈するもの(13)とがある。(16)も口縁端面をナデ、面をつくるもので、受口状を為している。(16)・(17)は受口状口縁をもち、口縁に櫛描烈点文、肩部に櫛描直線文ないし烈点文を施すいわゆる近江系の土器である。(18)は口縁外面の烈点文と同様の施文を肩部に巡らせる。裸眼観察による胎土観察では在地産の土器との伴別は困難である。(13)・(16)もかかる土器製作技術を担うが、同様の影響下にあった人々の製作したものと思われる。なお、(12)・(13)の擬凹線をもつ土器は『丹後系』として当地域では認識されるものであって、(13)のように受口の特徴を具有している例は当地域で該期の土器を考える上で興味深いものがある。

SD 0201 出土遺物(第20図)

広口壺(5) 直立する頸部にゆるやかに外反する口縁がつく。ナデによってわずかに端面を拡張し施文帯を作る。下方から押圧し口唇部下端に大形の刻み状の加飾を施す。調整は器壁荒れのため不明。粒径 1~2 mm の長石、石英粒の角礫の混入を多くみる。

短頸壺(6) ほぼ直立して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。最大復径は体部中央付近に推測できる。外面タテハケのちナデ、内面はヨコ方向のハケ。

長頸壺(9) 円筒形の頸部。口縁部を一部欠損。ほぼ直立して立ち上がる口縁部を有するものと思われる。頸部内外面ともハケのちナデ、指頭圧痕を残す。胴部は口頸部からなだ



第20図 北金岐 A 地点 SD0201 出土遺物

らかに移行，体部中位よりやや下方に最大腹径を有する。外面はタタキのち弱いナデ。肩部よりやや下方に接合痕を有し，これを境に叩き目の主軸が異なる。原体は同一のもので上半は右上り，下半はほぼ水平。内面は全体に横位のハケによる調整。小さな平底，不安定である。

甕（1）～（4）・（10） 口縁が二重口縁を有し受口状を呈するもの（1），単純に「く」の字状を呈するもの（2・4・10），「く」の字状であるがわずかに頸部が円筒状を呈するもの（3）等がある。（1）はいわゆる近江型に類似するもので，口縁端面に櫛描烈点文，肩部に櫛描直線文＋烈点文による加飾を行う。体部外面ハケ，内面は部分的なハケによる調整を施したのちナデ。（2）はタタキによる成形痕著しい。口縁部に至るまでタタキ成形するもので粗製である。タタキは粘土を積みながら行われたもののように内面に接合痕を顕著に残す。（4）はタタキ成形のち部分的にハケのちナデ調整。口縁部内面～肩部にかけて横位のハケ。部分的に強いナデ。（10）は完形。口縁を強く外反させ「く」の字状に成形した口縁端面を強くナデ，面をなす。外面にタタキ成形痕著しい。部分的にハケならびにナデ調整を施す。内面はナデによる。図示した甕類は内面調整をナデないし弱いハケによる調整によるものであって，ヘラ削り痕をとどめるものはない。

高杯（7） 斜上方にのびる体部から角度をかえて短く外反する口縁部。口縁部と体部の境には外面に稜，内面に段をもつ。口縁端部は弱い面をなす。外面はヨコハケのち放斜状のヘラミガキ。内面は口縁部横方向，体部はハケ調整のち放斜状のヘラミガキを施す。内底面は円盤充填状の手法により成形し，脚部上端面の一部を利用する。脚柱部は中空でなだらかに裾部へと移行する。脚部は杯部とは別々に整形した後接合を行う。外面はタテ方向のヘラミガキ，裾部にはハケ調整痕をどめる。内面はしほり痕，ハケが顕著で裾部を丸くおさめる。

有孔鉢（9） 甕の体部下半と形態的に類似する器形の小型鉢。口縁は擬口縁状を呈し端部は薄く尖っておわる。外面は大筋のタタキ成形痕をとどめる。内面はハケのちナデ調整。平底である。孔は内面から外側にむかって焼成前に穿つ。

被籠土器（第18図） 出土状態を図示した。SD 02 中層において検出し SK-19 上面にあたる。「く」字に外反しやや内彎して受口状をなす口縁部。肩部はやや張って倒卵形の体部，底部は小さな平底をなす。蔓ないし樹皮状の植物繊維を幅 0.1～1.4 cm ほどに調整し紐として用い土器を覆う。紐の巻き方は，頸部と底部付近にあるくびれを利用し紐かけとし，頸部から底部にかけて順序よく行われる。紐は上下関係が入り組んでおり，ただ単に巻きつけただけというのではなく，“編む”ことを通じて現状に至っているものである。

（田代 弘）

2. 北金岐 B・C・D 地点の調査

(1) 調査経過

北金岐 B・C・D 地点の試掘調査は北金岐 A 地点の調査と併行して昭和58年7月18日より開始した。

試掘調査はまず調査対象地の地形測量を行い、そののち、一対象田畑を畦畔の区画単位により仮番号をつけ、各仮番号の田畑単位に 3×6 m のグリッドを 2～4 か所、総計38か所を設定した。グリッドの掘削作業は人力により各層位ごとに行い、遺構、遺物の検出につとめた。掘削の結果、各グリッドの基本層位は表土下・耕作土・床土・灰褐色砂質土、黒褐色粘質土、黄褐色土（地山）に分れる。灰褐色砂質土層には、土師器・陶器・瓦器の各破片を含むが、明確な遺構は検出しえなかった。黒褐色粘土層には、弥生土器のほか土師器・須恵器など弥生時代後期より平安時代に至る遺物が混在し、同層直上での遺構検出につとめたが、基盤層と遺構埋土の識別が困難なため、最終的には黒褐色粘質土を除去し、識別可能な黄褐色土（地山）直上での精査につとめた。

各グリッドでの遺構検出状態は、B地点 No 10・No 11 田畑部で、溝状遺構の落ち込み、住居跡の一部を検出し、溝状遺構・住居跡の性格を明らかにするため一部グリッドの拡張を行った。その結果、溝状遺構は上面幅約 10 m、深さ約 2 m を測り、東西方向にのびる大溝 (B-SD 01) であること。住居跡は溝状遺構の南側で 2 基 (B-SB 02・B-CB 03) 確認され、B-SB 03 は一辺約 6 m を測る隅丸方形を呈し、床面を四周するように壁溝がめぐり、床面直上には 30 個体以上の土器のほか、柱・壁材が焼けて倒壊した状態で出土した。C地点 No 21 田畑では、東西方向にはしる上面幅 2 m、深さ 0.3 m の溝状遺構 (C-SD 08) があり、溝内より奈良時代中期の土師器・須恵器が出土し、溝状遺構の南に隣接して 1 間×4 間の南北棟の掘立柱建物が検出された。No 35 田畑では一辺約 4 m を測る方形の竪穴住居跡と、鍵状にのびる溝状遺構 (C-SD 03) が検出され、その他の各グリッドでも奈良時代より鎌倉時代に至る小ピットが無数に検出された。D地点では小溝・小ピットは検出されたが、出土遺物より近世以降の遺跡であり、顕著な遺構は検出されなかった。

以上の試掘調査の結果を踏まえ、当センター・京都府教育委員会・建設省と今後の調査方針について再三協議を行った。その結果、北金岐 A 地点は早急に調査を進め、それに併行して、遺跡の存在が希薄な A 地点の南半・D地点の全面を除いた遺跡の存在が想定される B 地点の北半・C地点の全面について今年度事業として発掘調査を実施することが明らかになった。

発掘調査はパワーシャベルにより灰褐色砂質土まで除去し、黒褐色粘質土層より人力により除去し、順次遺構の検出につとめた。その結果、検出遺構は竪穴住居・掘立柱建物・溝状

遺構・土坑・井戸など多種にわたり、出土遺物より弥生時代後期より室町時代に至る複合遺跡であることが明らかになった。

なお、調査地区の地区割は、北金岐A地点の地区割に準拠する。

(2) 検出遺構

今回の発掘調査によって検出された遺構は住居跡・溝状遺構・土坑・井戸のほか無数の小ピット群があり、その概要は付表1のとおりである。同表は現地調査時に付記したものであり、各遺構の所属時期は一般的な呼称にとどめ、今後、北金岐遺跡の歴史の変遷過程を留意して整理作業を進めていきたい。

本稿では説明の便宜上、北金岐遺跡を第Ⅰ期；弥生時代後期～古墳時代初頭、第Ⅱ期；古墳時代後期、第Ⅲ期；奈良時代～平安時代、第Ⅳ期；鎌倉時代～室町時代の四期に分け各期の概略説明を行う。

第Ⅰ期の遺構

第Ⅰ期の遺構は、B地区の北半にその集中がみられる。

検出遺構は堅穴住居跡(B-SB 02・B-SB 03・B-SB 15)、溝状遺構(B-SD 01・B-SD 08・B-SD 26・C-SD 16)、土坑(B-SK 09・B-SK 10)がある。

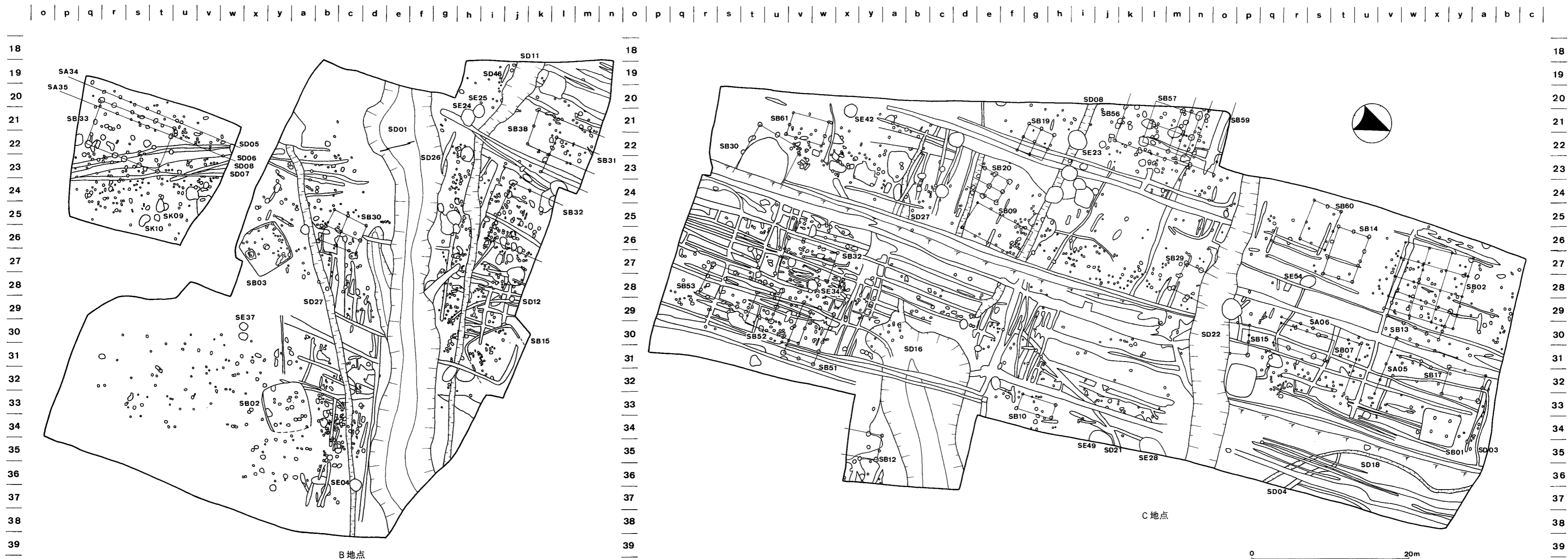
堅穴住居跡は3基確認され、平面形態はいずれも隅丸方形を呈する。住居跡の内、遺存状態が良好なB-SB 03は一辺約6mを測り、床面を四周するように壁溝がめぐる。南辺中央には直径1m、深さ0.6mの土坑があり、貯蔵穴と考えられる。また床面直上には、柱及び壁材が焼けて倒壊した状態で検出され、各壁溝に隣接して完形品を含む土器が30個体以上出土した。

B地点では3基の堅穴住居跡の中央を流れる、検出長約55m、上面最大幅約10m、深さ2mを測るB-SD 01がある。B-SD 01は東西方向に貫流し、調査地西端より東へ約5mで、3枚の板材を組み合わせた堰が出土した。堰周辺の土層観察及び出土遺物より、B-SD 01は弥生時代後期後半に掘削され、古墳時代初頭には一部改修を行い、同時に堰を構築したと考えられる。

第Ⅱ期の遺構

第Ⅱ期の遺構は、遺構密度が希薄である。B地区中央を貫流する溝状遺構(B-SD 27)のほか、C地区北部に偏して堅穴住居跡(C-SB 01)、溝状遺構(C-SD 18)がある。

C-SB 01は方形を呈し、一辺約4mを測る。床面には直径20～40cmのピットを4か所対角線上に配し、西辺に接して焼土層が認められる。床面直上及び埋土内より須恵器杯身・



第21图 北金岐 B·C地点遗構图

杯蓋・土師器甕のほか、白玉50個以上が出土した。

C-SD 18 は C-SB 01 の東約 7 m で、南北方向に S 字状に曲折する上面幅 30 cm、深さ 30 cm を測り、断面「U」字形の溝状遺構である。同遺構には竪穴住居跡に近接した時期の須恵器杯身・杯蓋・土師器甕のほか、製塩土器が一括排棄されていた。

第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期の遺構は B 地区の北半、C 地区の全域に亘り、掘立柱建物 (B-SB 32・C-SB 13・C-SB 15・C-SB 19・C-SB 20・C-SB 61)、溝状遺構 (B-SD 11・C-SD 04・C-SD 08・C-SD 27)、井戸 (C-SE 54) などがある。

掘立柱建物は 8 棟以上が検出され、2 間×3 間の東西棟の建物 (C-SB 14・C-SB 61)、2 間×3 間の南北棟の建物 (C-SB 52・C-DB 53)、2 間×2 間の総柱の建物 (C-SB 19・C-SB 20) などがあり、方位はほぼ真北をむく。

溝状遺構は掘立柱建物を区画するかのよう東西方向に流れ、一部調査地の南・北端で曲折するものがある。

井戸は C-SB 14 の東西隅に隣接して確認され、直径 10 m、深さ 1.2 m を測る素掘り井戸である。

第Ⅳ期の遺構

第Ⅳ期の遺構は B・C 地区の全域に広がり、掘立柱建物 (B-SB 31・B-SB 32・B-SB 33・B-SB 38・C-SB 02・C-SB 56・C-SB 57)、柵列 (B-SA 34・B-SA 35)、溝状遺構 (C-SD 22)、井戸 (B-SE 04・B-SE 24・B-SE 25・B-SE 37・C-SE 23・C-SE 28・C-SE 42・C-SE 49) のほか、不明土塚・小溝・小ピットが無数にある。

掘立柱建物は南北棟の建物 (B-SB 31・B-SB 32・B-SB 33・B-SB 38) と東西棟の建物 (C-SB 02・C-SB 56・C-SB 60) があり、遺存状態の良い C-SB 56・C-SB 57 では柱穴内に直径約 25 cm の柱痕が一部遺存する。

柵列は B-SB 33 に重複する B-SA 34・B-SA 35 があり、南北方向上にのびるもので、柱間は一定しない。

井戸は石組みのもの (B-SE 24・B-SE 25・C-SE 23・C-SE 42)、木枠組みのもの (B-SE 54)、素掘りのもの (B-SE 04・B-SE 37・C-SE 28・C-SE 49) があり、石組み井戸の底部には 1～3 段の曲物を据える。(石井 清司)

(3) 遺物

北金岐 B、C 地点からは、弥生時代後期を中心として中世に至るまでの各期の多量の遺物

が検出された。今回は、B地区 SB 03, SD 11 の一括資料についてのみ記述することとした。

SB 03 出土遺物 (第22・23図)

床面直上より検出され、伴出関係が明確に把握される良好な資料である。壺・甕・高杯・鉢・裝飾器台・ミニチュア土器等よりなる。円筒状の頸部を有し外反する大きな口縁をもつ壺類を欠く。本資料中には、貯蔵形態として明確に把握しうる器形を欠くが、法量、器面調整から便宜的に (1), (19) を壺, (3) を甕として扱い記述する。

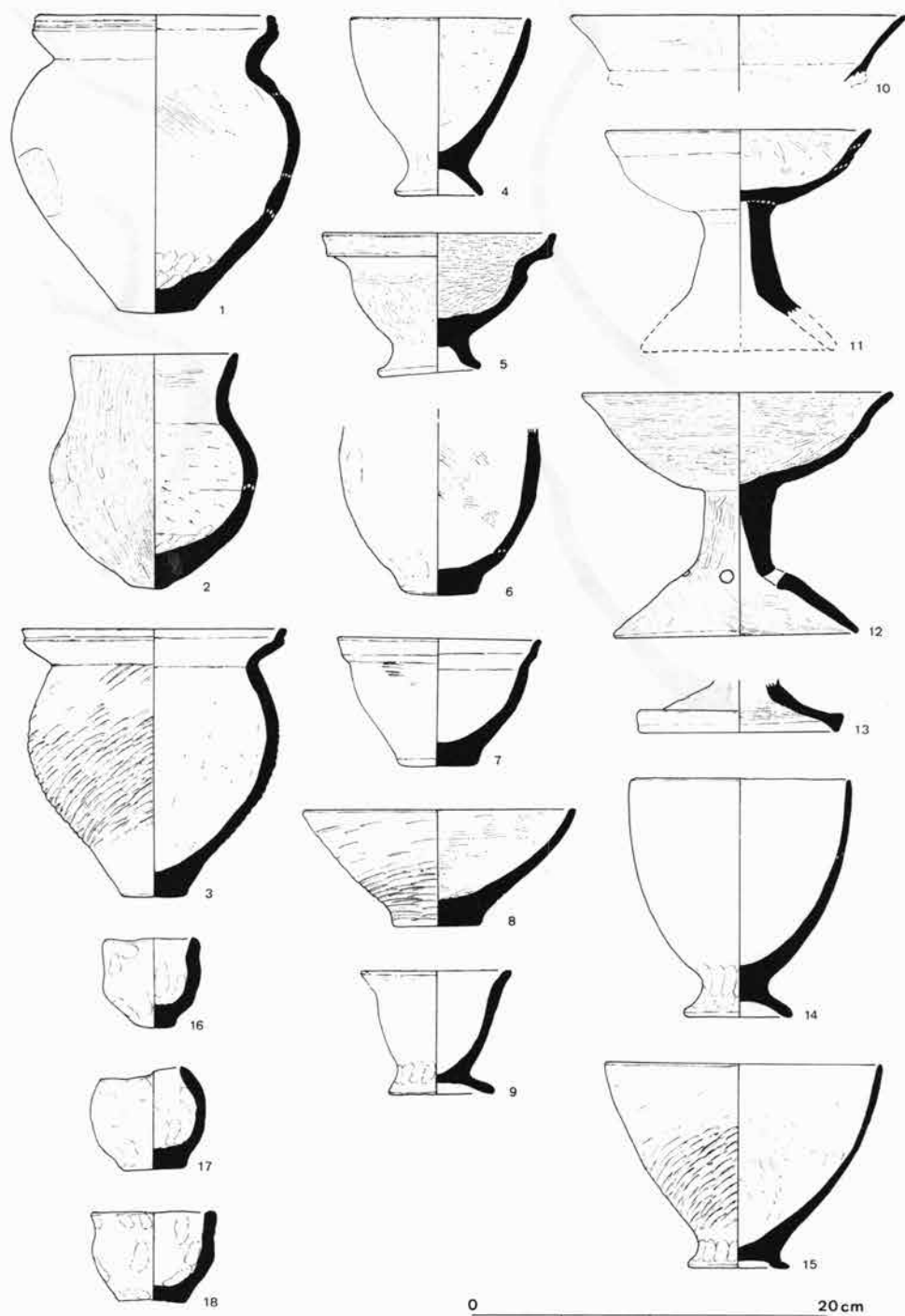
壺 (1)・(19) 二重口縁を有する。「く」の字状に外反する口縁の端面を上方に拡張し施文帯を形成、二条の擬凹線を施す。(1) は内傾してたちあがる口縁。体部外面はナデによる丁寧な調整、内面にはわずかにハケがみられる。底部内面には指頭圧痕顕著。(19) はやや外傾する口縁部。体部外面ナデ、内面をハケによって丁寧に調整する。底部欠損。

短頸壺 (2) 円筒形の口縁部。ほぼ直立して立ちあがる口縁部を有する。頸部外面ハケのち縦方向のヘラミガキ。内面には横方向のヘラミガキを施す。口頸部から胴部へとなだらかに移行し、体部中央よりやや上方に最大腹径を有する。外面はハケの縦方向のちヘラ磨き、内面は斜方向のヘラ削りを施す。わずかに平底をなすが不安定である。

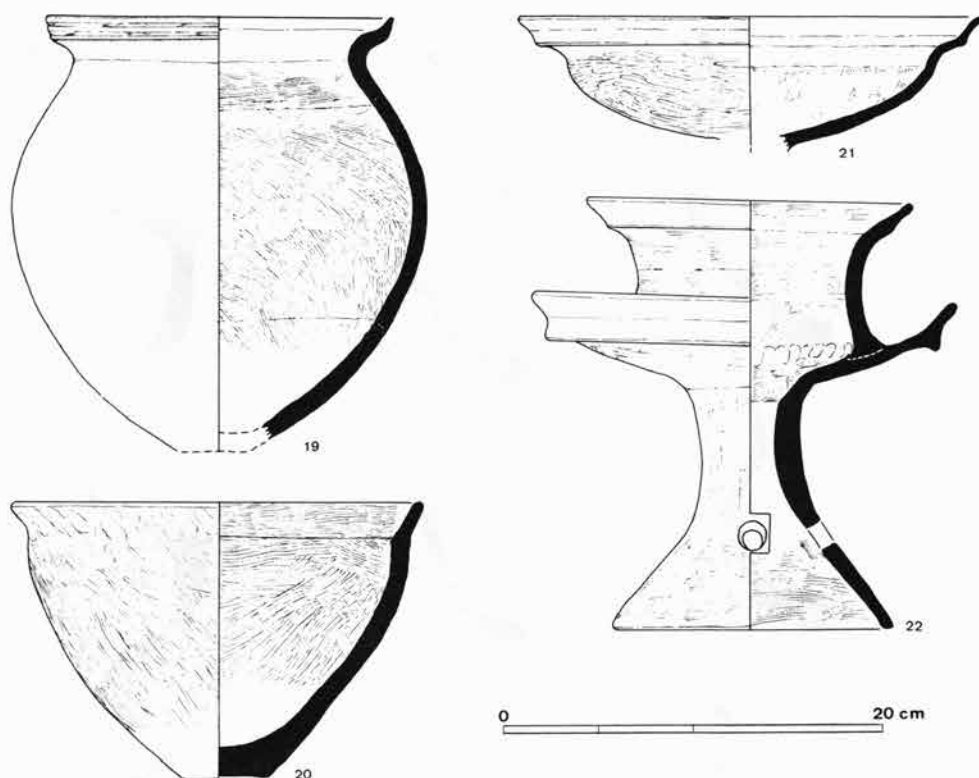
甕 (3) 壺とした (1) と形態的に類似。「く」の字状に外反する口縁の端面をわずかに上方へ拡張し強くナデ。幅広の擬凹線状を呈する。器表外面は体部中位にタタキ痕を顕著にとどめる。底部付近はタタキのちナデ。内面は全体に丁寧なナデを施す。底部は平底。

高杯 (10)~(13)・(21) 斜上方にのびる杯体部から角度をかえて外反する口縁部をもつもの(10)、杯部が浅い鉢状を呈し体部と口縁部の境界に明瞭な稜をもたないもの(11)・(12)、浅鉢状の杯部で複合口縁を呈するもの (21) 等がある。(11)・(12) はほぼ完形である。いずれも脚柱部は中空でなだらかに裾部へ移行するが、裾部で末広がりになる。(11) は器表外面にわずかにハケ痕をとどめる。(12) は杯部内、外面ヘラ磨き、ハケ痕をとどめる。脚柱部は縦方向のヘラ磨き。裾部には内外面にハケ。(21) は複合口縁を有する高杯である。口縁部は内外面とも強いナデ調整。杯部外面は横方向のヘラ磨きによって丁寧に器面の調整を行う。内面はハケを残す。

鉢形土器 (4)・(5)・(7)・(8)・(9)・(14)・(15)・(20) 脚台をもつものともたないものがある。脚台をもつものには二重口縁を有するもの (5) と単純におわる直口のもの (4)・(9)・(14)・(15) とがある。(4), (14) は口頸に比して器高があり長胴を呈する。脚台は粘土を貼付し手づくねによる。調整はハケがわずかにみられるがナデを基調とする。(5) は器表を丁寧なヘラミガキ。(15) は甕体部下半と形態的に類似する形状をもつ。タタキによる成形痕を顕著にとどめ、口縁端面は擬口縁状を呈する。(7)・(8)・(20) は



第22図 北金岐 B 地点 SB03 出土遺物 (1)

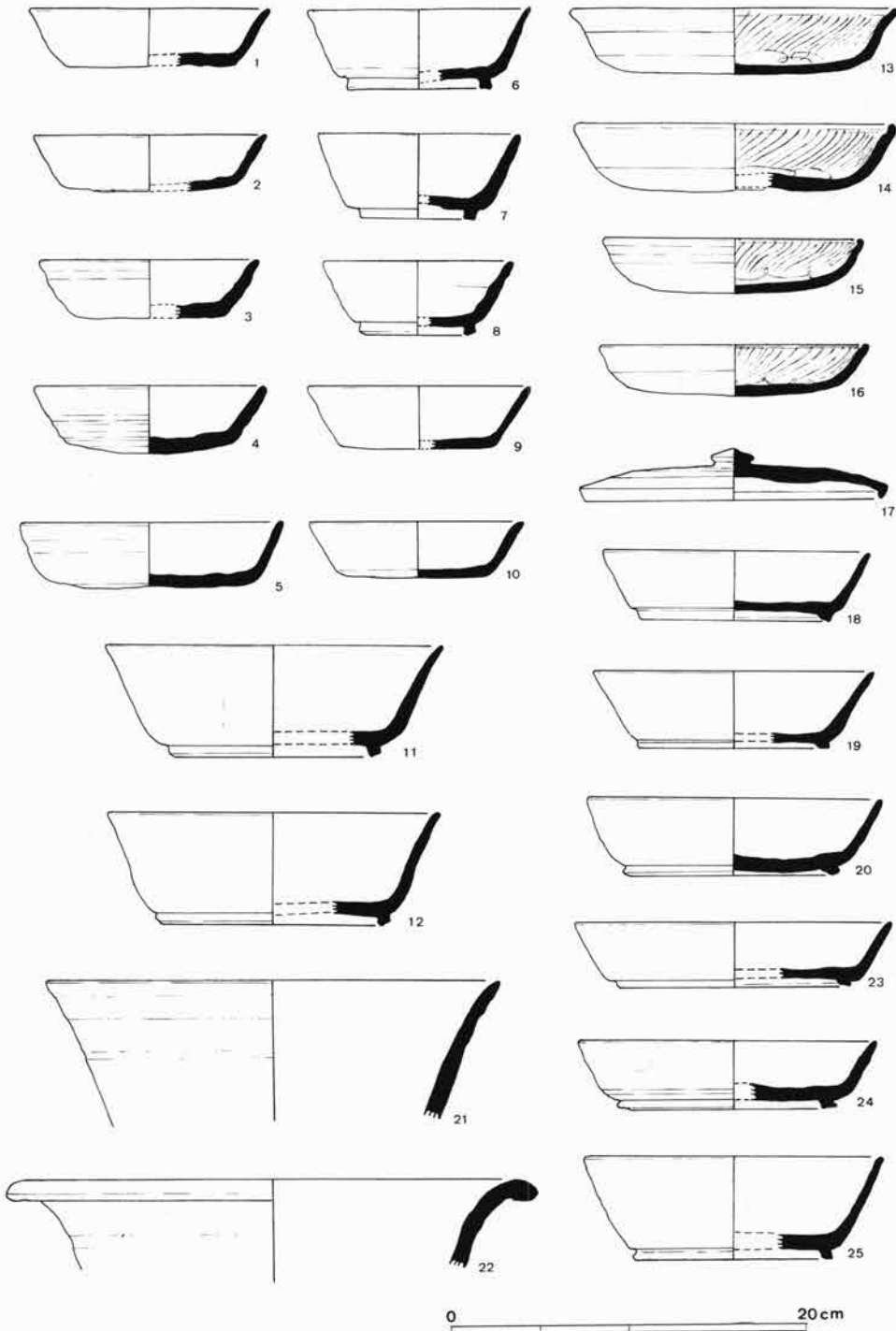


第23図 北金岐B地点SB03出土遺物(2)

脚台をもたない。(7)は二重口縁をもつ。体部外面にはわずかにタタキ痕が観察されるが内外面ともに丁寧にナデ調整。(8)は(15)と同様の形状で、カメ体部下半に形態を同じくする。外面にタタキ痕を顕著にとどめ内面はハケによる調整。口縁は擬口縁を呈し底部は平底をなす。(20)は大形の鉢である。短く外反する口縁部と平底を有す。最大復径は肩部にあり広口である。口縁外面に指頭圧痕。体部内外面は丁寧なハケ調整を施す。

装飾付器台(22) 二重口縁をもつ器台を成形したのち、受部内面に円筒状を呈する口頸部を設け器台としたもの。当初受部として成形された口縁部の機能は、更に上方の口縁部にとってかわられ、装飾的効果へと機能が置換される。脚柱部は中空で、円筒状を呈するが裾部に至って末広がりになる。器面は内外面とも横方向のハケ調整ののち丁寧にナデ。円筒部に透し孔は持たず丹波地方に出土する当該器種の特徴に近似性をもつ。口丹波地域では初出である。

ミニチュア土器(16)~(18) 手づくねによる。指頭圧痕を顕著に残す。口縁が内傾するもの(17)と外傾するもの(16)・(18)とがある。頸部を有するものはなくいずれも平底である。



第24図 北金岐B地点SD11出土遺物

(6) は口縁部を欠損しているため器種不明。指頭圧痕めだつが器表を丁寧にナデ調整。粗製の小型壺であろう。

SD 11 出土土器 (第24図)

SD 11 からは須恵器杯蓋・杯身・甕・鉢・土師器皿等が出土した。

須恵器杯には高台を有しないもの (A), 高台を有するもの (B) とがある。

杯A (1)~(5)・(9)~(10) 平らな底部と外上方にのびる体部よりなる。底部外面の調整はヘラ切り痕をそのまま残すもの、粗くナデるもの等がある。法量は 10 cm 未満のものが多い。

杯B (6)~(8)・(11)~(12)・(18)~(25) 杯Aに高台を貼り付けたものである。高台は器体に比して小さく、内傾するもの、垂直にふんばるもの、外傾するもの等がみられる。接地面は平坦なものより凹むものが多い。底部外面の調整は杯Aと同様である。法量は口径 7 cm 前後のもの、9 cm 前後のもの、11 cm 前後のもの三者がある。

蓋 (17) 頂部の形態がまるく笠形を呈する。端部は短く屈曲しておわる。頂部中央には高さのひくい擬宝珠形つまみをつける。頂部は回転ヘラケズリののちナデ。

(21) は鉢か。外方向にゆるやかな曲線を描きたちあがる。端面は丸くおさめる。体部底部欠損のため器種不明である。

甕 (22) 全形を知り得ない。口縁部は外上方に外反し口唇部を下方にややおり返し端面をととのえる。器表にロクロによる成形痕顕著。

土師器皿 (13)~(16) 高台を持たない。いずれも底部外面をヘラ削りするもので、ケズリののちヘラミガキを施すもの (14) もある。内面にラセン文・放射状文を施す。

(田代 弘)

3. ま と め

北金岐遺跡は弥生時代後期より室町時代に至り、南北約 400 m, 東西約 70 m 以上の範囲で広がる複合遺跡である。検出遺構は堅穴式住居・掘立柱建物・溝状遺構・土壇・井戸のほか無数の小ピット群があり、出土遺物もコンテナ・バット250箱以上の莫大な量にのぼる。

北金岐遺跡の遺構・遺物については現在整理中であり、今後、詳細な検討は報告書に譲り、現時点での北金岐遺跡の性格を整理すると以下のとおりである。

1. 北金岐遺跡は出土遺物より弥生時代後期より室町時代に至る複合遺跡であり、大きくは、第Ⅰ期；弥生時代後期～古墳時代初頭、第Ⅱ期；古墳時代後期、第Ⅲ期；奈良時代～平安時代、第Ⅳ期；鎌倉時代～室町時代の四期に大別でき、時期を追って遺構の変遷が認めら



第25図 北金岐B・C地点遺構変遷図(1)



第26图 北金岐 B・C 地点遺構変遷図 (2)

れる。

2. 第Ⅰ期の遺構は北金岐A・B地点に集中し、北金岐A地点では昨年度調査された南金岐遺跡の延長と考えられる A-SD 01・A-SD 02 などがある。

3. 北金岐B地点の第Ⅰ期遺構には3基の竪穴住居跡 (B-SB 02・B-SB 03・B-SB 15) と溝状遺構 (B-SD 01・B-SD 06・B-SD 21・B-SD 26)・土壇 (B-SK 09・B-SK 10) があり、特に B-SD 01 と3基の竪穴住居は集落構成を考える上で良好な資料である。

4. B-SD 01 は総延長約 55 m 以上、上面幅約 10 m、深さ約 1 m を測る大溝であり、溝内には縄文晩期の土器を10数点混在するほかは弥生時代後期より古墳時代初頭の土器がコンテナ・バット 150 箱以上の莫大な量にのぼり、土器以外には石器・木製品を少量含む。木製品には船型木製品、鋤型木製品・梯子型木製品があり、梯子型木製品は高床式倉庫の存在を裏付ける資料である。

5. B-SB 03 は床面直上に炭化木が火災にあい倒壊したかのような状態で出土し、また土器が完形品を含め30点以上が出土しており、今後竪穴住居の生活復元を知る良好な資料である。

6. 第Ⅱ期の遺構は一基の竪穴住居 (C-SB 01) と溝状遺構があり、竪穴住居は北金岐遺跡の後背に立地する拜田古墳群と一体となす遺構と考えられる。また竪穴住居に隣接して溝状遺構 (C-SD 16) があり、同遺構内には製塩土器が出土している。

7. 第Ⅲ期の遺構はB地点の北半及びC地点の全域に広がり、掘立柱建物を中心に溝状遺構、土壇・井戸などがある。掘立柱建物はほぼ方位を同じくし、第Ⅲ期の検出遺構が密なC地点北半では掘立柱建物・柵列・溝・井戸が規格をもって配されている。またC地区中央では2棟の総柱の倉庫跡のほか、出土遺物中に須恵器杯・蓋を転用した転用硯を含み、今後建物群の性格を検討する必要がある。

8. 第Ⅳ期にはB・C地点の全域に遺跡の範囲が広がり、掘立柱建物を中心に柵列・井戸・溝状遺構などが検出された。掘立柱建物の内C地点北半で検出された C-SB 02 は3間×4間の総柱建物で、中世における大型建物として注目される。

9. 第Ⅳ期の井戸は9基が検出され、素掘り、木枠、石組みと差異があり、同遺構内には良好な一括遺物が出土し、今後、亀岡盆地における中世の土器編年の標式資料になるものと考えられる。

10. 北金岐遺跡では条里を想定する明確な畦畔などの遺構は確認しえなかったが、現水田面の方位と比較すると、第Ⅲ期の遺構は水田の畦畔の方位と若干ずれが認められるが、第Ⅳ期の遺構はほぼ方位を同じくし、各トレンチの土層観察を含め、中世以降、現在の水田の畦

畔の方位が確立したと思われる。

(石井 清司)

- 注1 京都府教育委員会 「埋蔵文化財発掘調査概報（以下府概報という）」1796, 1977
- 注2 京都府教育委員会 「府概報」1981-2
- 注3 京都府教育委員会 「府概報」1978, 1980-1
- 注4 京都府教育委員会 「府概報」1980-1
- 注5 京都府教育委員会 「府概報」1976, 1977
- 注6 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 「京都府遺跡調査概報（以下遺報）」6 1982
- 注7 京都府教育委員会 「府報」1980-1
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 「遺報」6 1982
- 注8 京都府教育委員会 「府概報」1977, 1978, 1979, 1980-1, 1981-2
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 「遺報」
- 注9 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 「遺報」
- 注10 補助員 中井秀樹・小早川泰章・河原昭夫・大村武之・榎 康史・岩崎公一・甲田陽亮・籠谷治男・原田昭一・谷口秀樹・東前龍一・森田由郎・西村健司・萩原浩昭・細川康晴・青井 敏・松井正明・佐藤 賢・村山一弥・美馬秀和・北村大輔・南部敦弘・内藤正裕・斉藤秀和・人見克之・上田俊章・伊豆田晃正・勝田典範・山崎浩久・西村安弘・小仲幹夫・小谷 悟・佐藤勝憲・永岡一郎・中坪央暁・木村要吾・矢野 敏・青木義貴・福島弘了・大里秀典・中西 宏
- 整理員 加藤百合子・酒井信子・石原俊子・田中智子・松家みはる・並河智実・高田幸子・出口端鳥・山本清美・日下部恵子・村田みどり・高田江見子・箕輪真紀・山口あずさ・吉岡みよ子・広瀬順子・浅田芳子・堀井幸子
- 作業員 柿田秀雄・田中格一・八木感一・直継幸男・八木初次・渡辺春三・松本 終・並河義次・八木淑子・野々口文子・松本はつゑ・松本菊栄・小西てる江・俣野ふじを・八木千代江・八木美重子・山内タカ子・柿田喜代子・西村和代・山本美代子・八木よし子・堤 和子・野々村礼子・松山晃子・野々村沢子・野々村美さを・松井よし子・俣野利江・山内きくの・原田敦子

付表2 北金岐B地点遺構一覧表

遺構名	地区	規模	出土遺物	時期	備考
SD01	20~37・h~e区	長さ 約52m 最大幅 9.5m 深さ 2.0m	弥生土器・土師器 壺・甕・鉢・器台・ 高杯など コンテナ・バット 150箱以上 石器；石斧・タタキ 石・石包丁 木器；船形・鋤形・ 梯子形 縄文晩期；壺・深鉢 の細片	第Ⅰ期	弥生後期に掘削され、 古墳時代に改修・塚の 構築を行う。
SB02	32~37・b~z区	隅丸方形の堅穴 住居 一辺約6.0m ×約5.5m	弥生土器；壺・甕・ 鉢	第Ⅰ期	SD03・SB15 と同時期
SB03	27~29・b~y区	隅丸方形の堅穴 住居 一辺約1.5m ×1.5m	弥生土器；壺・甕・ 鉢・装飾器台・高杯 木明工製品・砥石	第Ⅰ期	床面直上に炭化木が多 量に出土し、火を受け、 柱が倒壊した状態で、 出土土器も完形品を含 め、当時の使用状態を 復元しえるかのような 状態で検出される。
SE04	37・d区	素掘り井戸 直径 1.5m	土師器；皿 瓦器；皿・椀・甕 鉄器；刀	第Ⅳ期	上面に人頭大の角礫が 多く出土埋土内に灰の 瓦層が認められる。
SP05	P~W22・23区	溝状遺構 検出長 21m 上面幅 40cm 深さ 30cm	須恵器；高杯脚部 土師器；皿	第Ⅲ期	
SP06	P~W22・23区	溝状遺構 検出長 21m 上面幅 70cm 深さ 30cm		第Ⅱ期	SD06 はSD05 に切ら れる。
SD07	P~W23・24区	溝状遺構 検出長 17m 上面幅 40cm 深さ 03cm		第Ⅲ期	SD08 を切る。
SD08	t~w22・23区	溝状遺構 検出長 8m 上面幅 40cm 深さ 20cm	土師器；小型丸底壺	第Ⅰ期	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SK09	t 24・25区	楕円形土塚 長径 1.6 m 短径 1.2 m 深さ 20 cm	弥生土器；甕 4 個体	第 I 期	完形に復元しえる甕形土器 1 点を含む。 墓塚の可能性あり。
SK10	St 25区	不整形土塚 東西 1.0 m 南北 1.8 m 深さ 20 cm	弥生土器	第 I 期	上面より完形に近い土器出土
SD11	W _g ~K19~35区	溝状遺構 検出長 52 m 上面幅 0.6~1.8 m 深さ 50 cm	土師器；皿 須恵器；杯・杯蓋・甕	第 III 期	22~36 区では幅 0.6~1.2 m ではほぼ直線的に穿たれているが、2 区以降北に扁して曲折し、溝幅も変化がみられる。
SD12	Wi~K29・30区	溝状遺構 検出長 10 m 上面幅 30 cm 深さ 10 cm	弥生土器；高杯	第 I 期	SB15 を囲むかのよう に溝がめぐる。
SK13	Wi 13区	不整形土塚 径 1.1 m 深さ 10 cm		第 IV 期 ?	SD12 を切る。
SK14	Wib 31・32区	不整形土塚 径 2.3 m 深さ 25 cm	土師器片・須恵器片 ・瓦器片	第 IV 期 ?	SD11 を切る。
SB15	Wh~i 30~32区	隅丸方形の堅穴 住居 一辺 7 m	弥生土器；壺・器台 甕	第 I 期	SB15 は 遺存状態が悪く西半分のみ遺存する。 出土遺物は壁溝及び柱穴より出土。
SD16	Wi 29~30区	溝状遺構 幅 50 cm 深さ 10 cm	土師器片・須恵器片	第 IV 期 ?	SD12 を切る。
SD17	Wij 29区	溝状遺構 幅 75 cm 深さ 10 cm	土師器片・須恵器片	第 IV 期	
SD18	Wi 32区	溝状遺構 検出長 4 m 幅 2 m 深さ 60 m		第 IV 期 以降?	現水田の段差に沿って穿たれ、人頭大の角礫を含むことより後世のものと考えられる。
SK19	Wh 31・32区	不整形土塚 直径 2.6 m 深さ 60 cm		第 IV 期 以降?	SB15 を切る。

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SD20	Wg 26～30区	溝状遺構 幅 30～40 cm 深さ 15 cm	土師器片	第Ⅲ期	出土遺物が細片のため時期不詳,ただ,SD11と平行してはしるため第Ⅲ期と考えられる。
SD21	Wgh 28・29区	溝状遺構 幅 0.8～1.2 m 深さ 20 cm			SD20 に切られる。
SD22	Wij 28区	溝状遺構 長さ 5.5 m 幅 40 cm 深さ 15 cm		第Ⅳ期? ?	SD17 と併行にはしる溝
SD23	Wij 27区	溝状遺構 長さ 5.3 cm 幅 36 cm 深さ 10 cm		第Ⅳ期	SD22・SD11と併行にはしる溝
SE24	Wh 21区	石組み井戸 掘方直径 2.2 m 石組内面直径 1.2 m 深さ 1.5 m	瓦器椀・土師皿・緑釉陶器	第Ⅳ期	SE25 に切られる。
SE25	Whi 21区	石組み井戸 掘方直径 1.4×1.7 m 石組内面直径 9.5 m 深さ 1.1 m	瓦器椀・土師皿・陶器	第Ⅳ期	底部曲物が遺存する。瓦器椀は完形品が底部にふせた状態で出土。
SD26	Wg 22・23区	溝状遺構 長さ 4 m 幅 50 cm 深さ 30 cm	弥生土器・壺・高杯・器台	第Ⅰ期	SD01 に沿ぐ小溝,完形に復元できる壺,器台が一括廃
SD27	Zy・Wa-C 22～39区	溝状遺構 検出長 50 m 幅 1.0～1.4 m 深さ 60 cm	土師器;小型壺 須恵器;杯身	第Ⅱ期	SD06 に続く溝か? SE04 に切られる。
SD28	Wi 23～25区	溝状遺構 検出長 9 m 幅 70～90 cm 深さ 10 cm	瓦器椀・土師皿	第Ⅳ期	底部に拳大の凹凸がある。SB32 を囲む雨落ち溝か?
SD29	Wh～122～24区	溝状遺構 検出長 14 m 幅 30～70 cm 深さ 20 cm	瓦器椀・土師皿	第Ⅳ期	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SB30	Wb~d25~27区	総柱建物 2間×2間 東西 4.5 m ×南北 4.8 m		第Ⅰ期	出土遺物がなく時期決定の資料を欠くが、第Ⅰ期遺構であるSD01とSB03の中間にあり、SD01間より高床倉庫の付属である梯子型木製品が出土し、第Ⅰ期の高床倉庫を想定。
SB31	WK~m 22~24区	掘立柱建物 南北棟 2間×2間以上	瓦器椀	第Ⅳ期	
SB32	Wi~K 24~27	掘立柱建物 東西棟 4間×2間以上	瓦器椀・土師皿	第Ⅳ期	
SB33	Wh~j 25~27	掘立柱建物？ 2間×3間以上		第Ⅳ期？	
SA34	Xg~W 20~22区	柵列 検出長 20.5 m		第Ⅳ期	出土遺物はなく、時期決定を欠くが第Ⅳ期の掘立柱建物と方位を同じくすることにより第Ⅳ期の遺構と考えられる。
SA35	Xg~W 20~22区	柵列 検出長 20.5 m		第Ⅳ期	西2mのずれをもってSA34と平行する柵列
SA36	Wi~k 24~27区	掘立柱建物 南北棟 3間×2間以上	須恵器杯	第Ⅲ期	
SE37	Xwx・30区	素掘り井戸 直径 1 m 深さ 60 cm	瓦器；椀・皿・土師皿・青磁	第Ⅳ期	
SB38	Wj~m 21~23区	掘立柱建物 南北棟 2間×3間以上	瓦器椀・土師皿・甕 鉄製刀子	第Ⅳ期	
SK39	Wi31	土坑 直径 20 cm	須恵器；杯・蓋・甕	第Ⅲ期	
SD40	Wg~j 30	溝状遺構 検出長 6.5 m 幅 50 cm 深さ 20 cm	土師器	第Ⅳ期	
SK41	Wi 30	不整土坑 直径 40 cm	瓦器椀片	第Ⅳ期	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SK42	Wk 28	不整形土坑 長径 1.5 m 短径 1.0 m 深さ 50 cm	須恵器片・土師器片	第Ⅲ期	SB36 に帰属するか？
SD43	Wl~n 20・21	溝状遺構 検出長 5.5 m 幅 50~70 cm 深さ 20 cm	瓦器碗片	第Ⅳ期	SB38 に平行する溝であり、雨落ち溝と考えられる。
SK44	Wkl 19・20区	隅丸方形土坑 一辺 4 m 深さ 60 cm	瓦器片	第Ⅳ期以降	SD43 を切る。
SD45	Wjk 20・21区	溝状遺構 長さ 5 cm 幅 40~60 cm 深さ 10 cm	瓦器片・土師器片	第Ⅳ期	SD11 を切る。
SD46	Wji 19区	溝状遺構 長さ 2.5 m 幅 30~50 cm 深さ 10 cm	弥生土器；甕	第Ⅰ期	SD26 に続く溝か？
SK47	Wh 22区	円形土坑 直径 1.7 m 深さ 1 m	瓦器片	第Ⅳ期	SD11 を切る。
SD50	Vi~l 33	溝状遺構 検出長 11 m 幅 40 cm 深さ 10 cm	瓦器	第Ⅳ期	
SB51	Vu~W 29~31	掘立柱建物 2間×4間		第Ⅲ期	出土遺物がなく時期決定の資料を欠く。但し建物方位は第Ⅲ期の建物群と同じ。
SB52	Vt~w 28~30	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅲ期	第Ⅲ期の建物群と方位を同じくする。
SB53	Vr~U 27~30	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅲ期	第Ⅲ期の建物群と方位を同じくする。
SE54	Vr・s 28	素掘り井戸 直径 2 m 深さ 1 m	須恵器・土師器	第Ⅲ期	
SK55	Vr 26	長方形土坑 一辺 60 cm×1.0 m 深さ 20 cm		？	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SB56	Vd~l 21・22	掘立柱建物 2間×2間以上	瓦器	第Ⅳ期	
SB57	Vk~n 20~22	掘立柱建物 2間×2間以上	陶器片	第Ⅳ期	柱穴内に柱痕が遺存する。

付表 3 北金岐 C 地点遺構一覽表

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SB01	Vw~y 33~35 区	方形の竪穴住居 一辺 4.0×4.4 m	土師器甕・須恵器杯 身	第Ⅱ期	
SB02	Vu~y 28~30区	掘立柱建物, 総 柱 東西4間 ×南北3間		第Ⅳ期	第Ⅲ期の遺構である SD04 を切る。
SD03	Vu~Ua 32~35 区	鍵形の溝状遺構 一辺 12.5 m 幅 60 cm 深さ 40 cm	須恵器杯・土師器甕	第Ⅲ期	
SD04	Vr~Vx 26~36	溝状遺構	須恵器杯・土師器甕	第Ⅲ期	第Ⅲ期の掘立柱建物 SB13・SB15・柵列 SA SAを区画する溝SD04 は調査地東端で南へ向 かって曲接する。
SA05	Vu~U 31~32 区	鍵状の柵列 検出長南北 15 m 東西 8 m		第Ⅲ期	SB13・SD04 と平行に はしる柵列
SA06	Vr~U 29~30 区	鍵状の柵列 検出長南北 10.5 m 東西 7.5 m		第Ⅲ期	SB07・SD04 と平行に はしる柵列
SB70	Vb~S 30・31 区	掘立柱建物 1間×4間		第Ⅲ期	SB13・SB14・SD04 と 方位を同じくする。
SD08	Ve~i 21~29区	溝状遺構 検出長 33 m 幅 1.2 m 深さ 30 cm	土師器; 皿・甕 須恵器; 杯蓋 打製石器	第Ⅲ期	掘立柱建物群を区画す る溝?
SB09	Vd~t 29~26区	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅳ期 ?	
SB10	Vf~h 33・34区	掘立柱建物 1間×2間		第Ⅳ期 ?	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SK11	Ww~y 32・33区	楕円形土壇 長軸 5m ×短軸 1m	土師器皿・須恵器杯	第Ⅲ期	
SB12	Wvy 33~35区	掘立柱建物 2間×2間以上		第Ⅳ期	
SB13	Vw~x 29・30区	掘立柱建物 2間×4間	土師器皿	第Ⅲ期	
SB14	Vs~u 26~28区	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅲ期	
SB15	Vo~p 30・31区	掘立柱建物 2間×1間以上		第Ⅳ期	
SD16	Wx~Vd 27~36区	溝状遺構 検出長 22m 幅 7~11m 深さ 2m	(下層)弥生土器；壺 甕・鉢・高杯 石斧・石タタ キ (上層)須恵器；杯身 杯蓋	(下層)第Ⅰ期 (上層)第Ⅱ~ 第Ⅲ期	上層に第Ⅱ・第Ⅲ期の 遺構が存在した可能性 あり。 下層はB地点SD01に 続くものか？
SB17	Vx~Ua 32・33区	掘立柱建物 2間×2間		第Ⅳ期	遺物がなく、時期決定 の資料を欠く。ただ、 第Ⅳ期の建物である SB02と方位を同じく する。
SD18	Vp~Ua 30~38区	S字に曲折する 溝状遺構 検出長 6m 幅 50cm 深さ 35cm	須恵器；杯身・杯蓋 土師器 製塩土器	第Ⅱ期	
SB19	Vf~h 21~23区	掘立柱建物・総 柱 2間×2間		第Ⅲ期	SD08・SB20と方向を 同じくする。
SB20	Vd~f 22~24区	掘立柱建物・総 柱 2間×2間		第Ⅲ期	SB19と同様、倉庫跡 と考えられる。
SD21	Vf~K 30~35	溝状遺構 検出長 20m 幅 40cm 深さ 40cm	土師器・須恵器	第Ⅲ期	SB08に続く溝か？
SD22	Vn~P 24~37	溝状遺構 検出長 36.5m 幅 2.5~3.0m 深さ 80cm	須恵器；杯・椀・甕 土師器 青磁・陶器	第Ⅳ期	数条の溝が重複する。

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SB23	Vhi 22区	石組み井戸 掘方直径 2 m 石組み内面直径 90 cm 深さ 2.1 m	土師器皿・陶器	第Ⅳ期	底部に二重の曲物あり。 SD08 を切る。
SK24	Whi 22・22区	円型土塚 直径 2 m 深さ 40 cm		第Ⅳ期	SD08 を切る。
SK25	Vi 23・24区	円形土塚 直径 1.5 m 深さ 30 cm		第Ⅳ期	SK26 を切る。 埋土内に人頭大の角礫 を含む。
SK26	Vi 24区	不整土塚 直径 2 m 深さ 30 cm		第Ⅳ期	SK25 に切られる。
SD27	Vde 23～27区	溝状遺構 検出長 23.5 m 幅 60 cm 深さ 25 cm	須恵器杯	第Ⅲ期	SD27 の延長がSD16 の上面に続く可能性あ り。
SE28	Vlm 35区	素掘り井戸 直径 2.8 m 深さ 1.5 m	瓦器椀	第Ⅳ期	
SB29	Vmn 27・28	掘立柱建物 2間×1間以上		第Ⅳ期	出土遺物がなく、時期 決定の資料を欠く。但 し、掘立柱建物の方位 をみると第Ⅳ期の方位 に近似する。SD22 に 切られる。
SB30	Ws～U 21・22	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅳ期 ?	出土遺物がなく、時期 決定の資料を欠く。 SK44 に切られる。
SD31	Wx～Vb 23・24	溝状遺構 長さ 10.5 m 幅 30 cm 深さ 10 cm		第Ⅳ期 ?	
SB32	Wv～y 26～28	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅲ期	第Ⅲ期の建物群と方位 を同じくする。
SK33	Wv 27	円形土塚 直径 1 m 深さ 20 cm		?	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SE34	Wvw 26	素掘り井戸 直径 1.2 m 深さ 1.0 m		第Ⅲ期 ?	
SD35	Vbc 22~24	溝状遺物 検出長 5.5 m 幅 40 cm 深さ 10 cm	瓦器片	第Ⅳ期	
SK36	Vd 30	円形土坑 直径 1.0 m 深さ 30 cm			
SK37	Vwx 23	円形土坑 直径 2.2 m 短径 1.1 m 深さ 30 cm	須恵器・土師器	第Ⅳ期	
SK38	Wwx 22	不整形土坑 80×110 cm 深さ 20 cm	瓦・器片	第Ⅳ期	
SK39	Wvw 22	方形土坑 一辺 1.0 m 深さ 10 m	瓦器片	第Ⅳ期	
SD40	Ww20~23	溝状遺構 検出長 7.5 m 幅 20 cm 深さ 10 cm	瓦器片	第Ⅳ期	SK41 を切る。
SK41	Ww 22	不整形土坑 長さ 80×80 cm 深さ 40 cm	土師器・須恵器	第Ⅳ期	
SE42	Wx 20	石組み井戸 掘方直径 1.7 m 石組内径 1.0 m 深さ 50 cm	須恵器甕・瓦器	第Ⅳ期	
SK43	Wu 27	不整形土坑 60×20 cm 深さ 5 cm	瓦器・椀	第Ⅳ期	
SK44	Ws~u 22・23	不整形土坑 直径 6 m 深さ 40 cm	須恵器・瓦器・青磁 染付	近世以降	
SD45	Wu 20	溝状遺構 検出長 3 m 幅 30 cm 深さ 10 cm	瓦器・土師皿	第Ⅳ期	

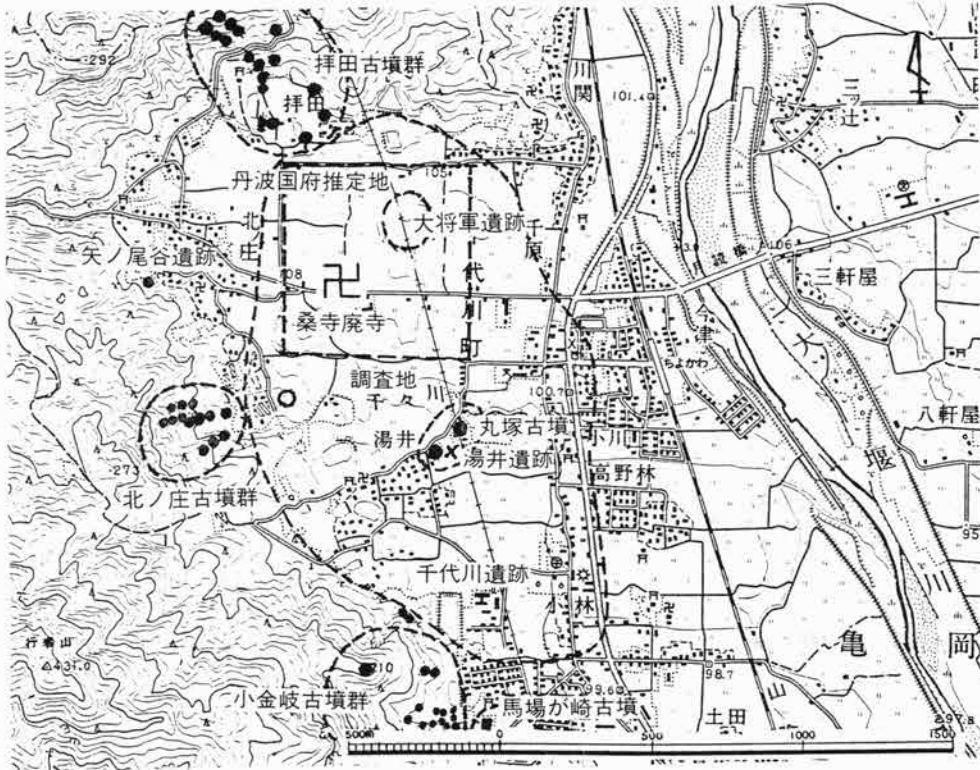
遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SK46	Vs 28	不整形土壇 長さ 1.2 m×30 cm 深さ 30 cm	土師器片	第Ⅳ期	
SD47	Wv 28	溝状遺構 検出長 5 m 幅 50 cm 深さ 10 cm	土師器片・瓦器碗	第Ⅳ期	
SD48	Vj 30	溝状遺構 検出長 3.5 m 幅 10 cm 深さ 20 cm	土師器片・瓦器片	第Ⅳ期	SD22 に切られる。
SE49	Vij 34	素掘り井戸 直径 3 m 深さ 1.2 m	瓦器碗	第Ⅳ期	
SD50	Vi~1 33	溝状遺構 検出長 11 m 幅 40 cm 深さ 10 cm	瓦器	第Ⅳ期	
SB51	Vr~s 30~31	掘立柱建物 2間×4間		第Ⅲ期	出土遺物がなく、時期決定の資料を欠く。但し建物方位は第Ⅲ期の建物群と同じ。
SB52	Vt~w 28~30	掘立建物 2間×3間		第Ⅲ期	第Ⅲ期の建物群と方位を同じくする。
SB53	Vr~u 27~30	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅲ期	第Ⅲ期の建物群と方位を同じくする。
SE54	Vrs 28	素掘り井戸 直径 2 m 深さ 1 m	須恵器・土師器	第Ⅲ期	
SK55	Vr 28	長方形土壇 一辺 60 cm×1.0 m 深さ 20 cm		?	
SB56	Vi~1 21・22	掘立柱建物 2間×2間以上	瓦器	第Ⅳ期	
SB57	Vk~n 20~22	掘立柱建物 2間×2間総柱	陶器片	第Ⅳ期	柱穴内に柱痕が遺存する。
SX58	Ua 26	径 60 cm 深さ 60 cm	白磁片 瓦器碗片	第Ⅳ期	

遺構名	地 区	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
SB59	Vno 22・23				
SB60	Vr~t 24~26	掘立柱建物 2間×2間		第Ⅳ期 ?	
SB61	Wu~v 20~22	掘立柱建物 2間×3間		第Ⅳ期	

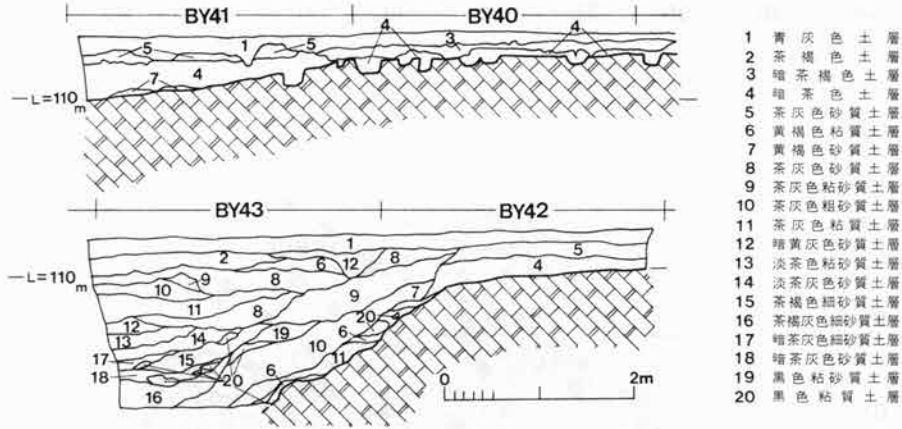
(2) 千代川遺跡第5次

1. 位置と環境

京都府を二分割する二大河川の由良川，大堰川によって切り開かれたなだらかにつづく丹波山地は，丹波高原を分水嶺として広大な範囲を占めている。亀岡盆地は口丹波地方の南部



第27図 千代川遺跡と周辺の遺跡



第28図 調査地トレンチ断面図

地区割は前回調査の割付を利用した。前回は丘陵の中央部と南側の一部であるA・B地区であったが、今回はB・C地区の一部で掘削した。

調査は、B・C地区の丘陵先端の三角形地(約200m²)を調査対象地として全面を掘削した。その結果、丘陵の先端近くはほとんどが中・近世の盛り土であることが判明した。

この丘陵は、現在よりも約5~8m短いもので、後世の水田化に伴い、丘陵上を水平に削平された時点で、削平した土砂を丘陵先端に削り出されたものと考えられる。地山面は丘陵の南西からゆるやかに傾斜しているものの、埋土(丘陵先端から約8m南西)近くでは急な崖になっていた。埋土は、黄褐色砂質土層で、旧崖面には黒色土層のブロックを多く含んでおり、弥生時代から中世の遺物が出土した。

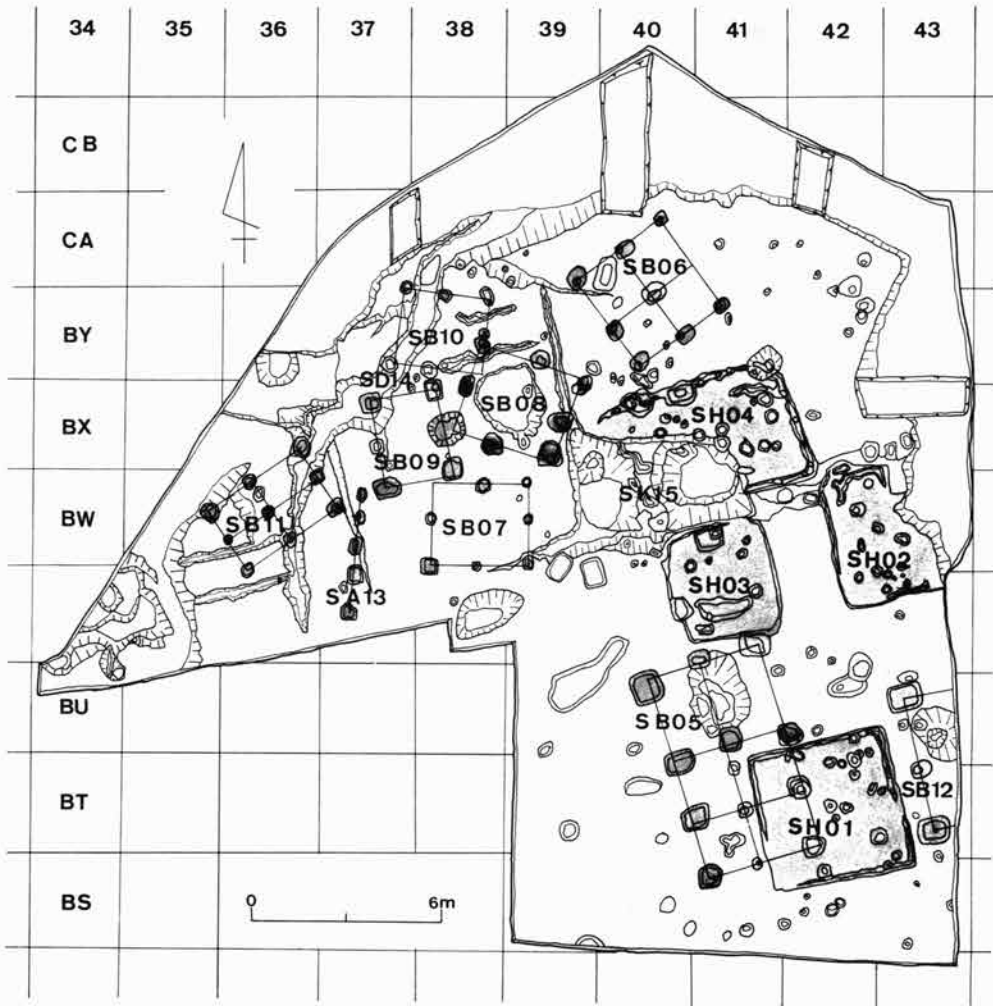
遺構としては暗茶褐色土層から切り込んでいる弥生時代末から古墳時代後期にかけての竪穴式住居跡、溝、土坑、ピット等と奈良時代から中世にかけての掘立柱建物跡、溝、土坑、ピット等を地山面で検出した。

3. 検出遺構

今回の調査の結果、地山面(黄褐色粘土)に暗茶褐色、黒褐色土の堆積があることを確認した。その上層には灰褐色、青灰色土層の現在の耕作土があった。

検出した遺構は地山面に暗茶褐色、黒褐色土層を切り込んだ弥生時代末から古墳時代後期の竪穴式住居跡3基、溝状遺構1条、ピット多数と奈良時代から中世にかけての溝、掘立柱建物跡、土坑、ピット等がある。

以下、各遺構について概要を述べる。



第 29 図 調 査 地 遺 構 平 面 図

竪穴式住居跡 (SH 01)

南北が 4.5 m, 東辺が 4.4 m の方形を呈する住居跡である。住居内においては 26 個の柱穴を数える。周溝は、南、北、東辺と西辺の北側中央までである。幅は約 10 cm, 深さ約 8 cm を測る。残存する壁は 15 cm~10 cm を測った。住居内の土層は黒褐色土層の単一層である。住居内からの出土遺物は布留式期の土器が多く、須恵器片を含まない。時期的には古墳時代前・中期に位置するが、比較的短い時間に使用された住居跡である。

竪穴式住居跡 (SH 02)

南北辺が約 5 m, 東西辺の残存最大幅が 3.2 m の方形住居跡である。住居形態は、北辺東側が L 字型に住居内へ入りこんだもので、東側が攪乱を受けているため不明な点が多いが、時

代を別にして考えた場合、^(注15)綾部青野遺跡に見られる住居跡に類している。住居内に15個の柱穴を数える。周溝は北辺と南辺の一部、西壁の北側にある。住居内からは布留式期の土器と古式の須恵器、製塩土器が出土した。

竪穴式住居跡 (SH 03)

南北が約 4.5 m, 東西辺が約 4 m を測る方形の住居跡である。住居内には 6 個の柱穴と方形を呈する 2 個の土坑、長楕円形を呈する落ち込みがある。土坑は住居跡の北辺中央にあるものが東西辺約 50 cm, 南北辺約 90 cm を測る。この土坑内には東北に一辺約 40 cm の方形の小土坑があり、二段掘りになっている。深さ約 30 cm を測る。西辺の土坑は南北約 60 cm を測る。深さは約 20 cm を測る。これらの土坑の性格は住居に伴う貯蔵穴と考えられる。住居内の少し南側中央の長楕円形の落ち込みは、長辺 170 cm, 短辺 70 cm を測る。住居内からの出土遺物は布留式期の土器が出土している。

竪穴式住居跡 (SH 04)

南北辺が約 4 m, 東西辺が約 6 m を測る長方形の住居跡である。住居内には約30個の柱穴があるが、中世の土坑により切られているため、全体の様相は不明である。住居跡に伴う土坑は北辺の中央と東寄りに各 1 個ある。規模は両者とも同様で、長辺約 90 cm, 短辺約 40 cm を測る。北辺中央の土坑は中央に小土坑があり、二段掘りになっている。深さ約 35 cm を測る。住居内からは庄内期から布留式期にかけての土器が出土している。

掘立柱建物跡 (SB 05)

SB 05 は今回の調査で検出した掘立柱建物跡の中でもっとも大きい。3 間×2 間で、主軸を南北方向からわずかに西側へふる。柱穴はほぼ方形を呈する。一辺約 55 cm, 深さ約 35 cm を測る。なお、北側 2 個の柱穴には礎板状の石が底部に残存していた。出土遺物は柱穴より土師器片が出土した。

掘立柱建物跡 (SB 06)

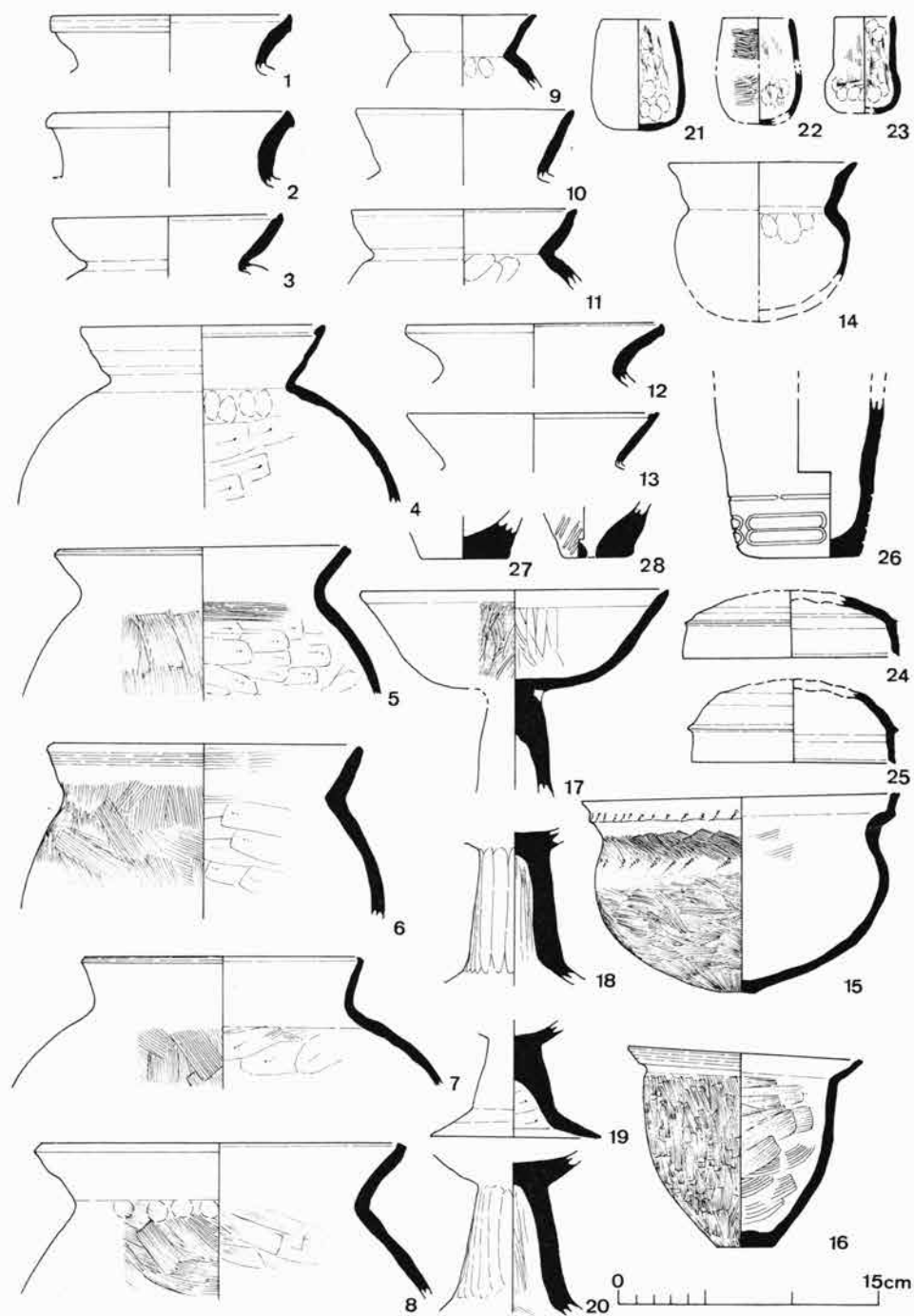
2 間×2 間の総柱建物跡と推定される。柱間距離は約 1.8 m を測る。柱穴は隅丸方形を呈する東西辺 41 cm, 南北辺 32 cm を測る。出土遺物は柱穴内より土師器が出土した。

掘立柱建物跡 (SB 07)

2 間×2 間の建物である。桁行約 3.4 m, 柱間距離 1.2 m の規模をもつ、柱穴は方形を呈し、もっとも大きなもので、一辺約 50 cm, 深さ約 23 cm を測る。主軸はほぼ東西方向である。

掘立柱建物跡 (SB 08)

2 間×2 間の建物である。建物跡の中央に直径約 2.4 m の土坑があり、中央の柱穴の存



第30図 出土遺物 (1)

在が不明である。そのため、総柱建物である可能性がある。桁行約 3.2 m, 柱間距離 1.6 m の規模をもつ、柱穴は不定形のものが多いが隅丸方形を呈するものもある。柱穴はもっとも大きなもので一辺約 70 cm, 深さ約 42 cm を測る。主軸は南北方向より東へわずかにふる。

掘立柱建物跡 (SB 09)

1 間×2 間の建物である。柱穴は全体的に方形を呈している。東側中央の柱穴は SB 08 と重複しているため大きくなっているが、もっとも大きいもので、一辺約 75 cm, 深さ約 36 cm を測る。桁行約 2.2 m, 柱間距離 1.4 m の規模をもっている。主軸は南北方向から西へわずかにふる。

掘立柱建物跡 (SB 10)

2 間×2 間の建物である。桁行約 2.6 m, 柱間距離 1.3 m の規模をもつ。柱穴はほぼ円形を呈するものが多く、径約 43 cm, 深さ約 28 cm を測るものがもっとも大きい。主軸は南北方向からわずかに東へふる。出土遺物は柱穴から土師器が出土している。

掘立柱建物跡 (SB 11)

2 間×2 間の建物である。桁行約 1.8 m, 柱間距離 1.2 m を測る。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺約 43 cm, 深さ約 20 cm を測る。主軸は南北方向から大きく東へふる。出土遺物は柱穴から土師器片少量が出土した。

掘立柱建物跡 (SB 12)

桁行約 4.6 m, 柱間距離 2.2 m を測る。柱穴は方形を呈する。一辺約 90 cm, 深さ約 5.5 cm を測る。主軸は南北方向から西へわずかにふる。規模は 2 間×1 間か、2 間×2 間と推定される。出土遺物は土師器片が出土している。

柵列状跡 (SA 13)

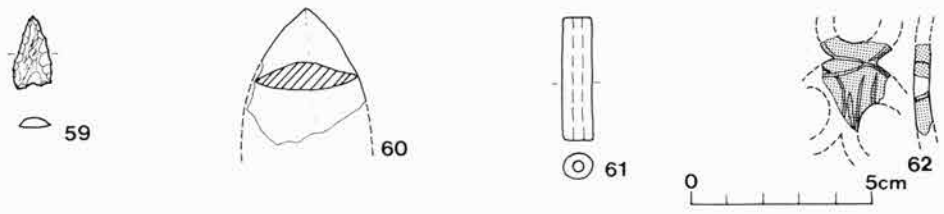
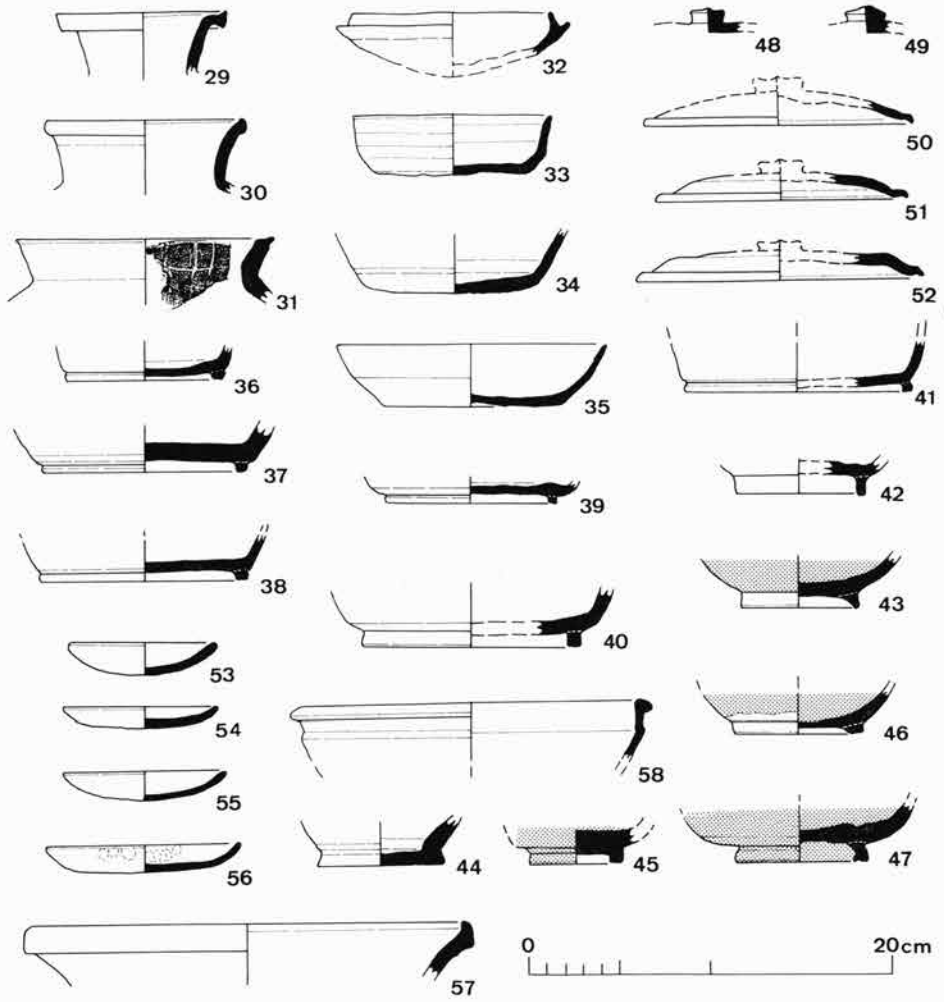
SB 11 と SB 07 の中間で南北方向にのびる柵 4 間分を検出した。柱穴は方形を呈し、一辺約 30 cm, 深さ約 25 cm を測る。方向的に SB 07 と同様であることから同時期のものと推定したい。出土遺物は柱穴から少片の布留式期の甕が出土した。

溝 (SD 14)

南西から北東方向に蛇行しながら北側へ流れる溝である。BY 37 地区で溝幅約 84 cm, 深さ約 47 cm を測る。堆積土は暗茶褐色土層である。出土遺物は庄内期併行の甕と鉢が出土した。

土塚 (SK 15)

BK・W 39~41 地区に位置し、方形を呈する。土塚の西辺から北側へ直線状にのびる細い溝と南辺の延長でのびる西、東側の細い溝がある。土塚は南辺 5.8 m, 西辺 3.6 m あり、も



第31図 出土遺物 (2)

っとも深いところで 48 cm を測る。

4. 出土遺物

出土遺物としては、弥生時代末から古墳時代中期のものが多い。竪穴式住居跡内からは布留式期の土師器と古式須恵器、製塩土器、管玉等が出土した。溝 SD 14 からは庄内期併行の甕と鉢が出土した。また、掘立柱建物跡等の柱穴や包含層より奈良時代から平安時代の土器や緑釉陶器、灰釉陶器、青白磁器なども出土した。

以下、主要な出土遺物についての概要を述べる。

千代川遺跡第5次出土遺物(1)(第30図)

小型丸底壺 (9・10・14) の3点がある。(9・14) は「く」の字状に外方へまっすぐ伸びる口縁部で端部はうすくおさめる。(10) は「く」の字状に外反し端部をまるくおさめる。(9) は竪穴式住居跡 SH 02 出土。(10) は竪穴式住居跡 SH 04 出土。(14) は竪穴式住居跡 SH 03 出土である。

甕 (1～4・11～13・15) の庄内期併行から布留式期にかけての甕8点と古墳時代中期以降の甕(5～8)の4点がある。(1・2) は外反する口縁部で端部は若干肥厚させ、外面に面をもつ。(1) は口縁外面の凹線がナデ消されている。(2) は凹線をもたない。(3・4・11～13) は「く」の字状に口縁部を外反させたもので、口縁端部内面に凹みをもつもの(3・11) と肥厚させたもの(4・13) と口縁端部をつまみ上げたもの(12) がある。(15) は受口状口縁で口縁外面と頸部にクシ状工具により列点文を施している。頸部から体部下半にかけて右下りのハケ目を施す。底部は外面に下方向に向かって強くハケ目を施し、小さな平部が上げ底状に凹む近江系の特徴を残している。(1・3・4・13) は竪穴式住居跡 SH 02 出土である。(2) は CA 41 地区、(11) は BY 37 地区出土。(12) は竪穴式住居 SH 04、(15) は溝 SD 14 出土である。(5～8) は「く」の字状に外反する口縁部であるが、(6) は直立気味に立ちあがる。口縁端部に面をもつもの(5・8) と薄く端部をわずかに内側へつまみ上げている(6) がある。外面斜めハケ、内面頸部までへら削りを施すもの(5～7) と内面斜めハケ目を施す(8) がある。(5) は BW42、(6) は BW41、(8) は CB40 地区の遺物包含層出土である。(7) は掘立柱建物跡 SB 10 北側中央柱穴内出土である。

鉢 (16・26) がある。(16) は「く」の字状に大きく外反させ、口縁部を外方向につまみ出している。口縁外面は擬凹線を施した後、ナデ消している。体部は外面タタキの後縦ハケ、内面は横方向のハケ目を施している。底部は小さな平底でハケ目を施した後ナデ消している。(26) は円筒状に直すぐ立ち上がる薄い器壁と平底をもつ鉢である。底部内面は強

く横ナデを施している。底部中心には直径約 1 cm の凹みがある。体部外面には丁寧な研きを施した後、ヘラにより水平に 4 本のヘラ描き沈線を施し、上方の 3 本は 2 個の楕円に綴じ、下方 1 本は円の中央で途切れる擬流水文を描いている。出土地は (16) が溝 SD 14, (26) は BY 42 地区遺物包含層である。

底部 (27・28) は弥生時代末から庄内併行期のもので (28) はタタキを施した甑である。(27) は竪穴式住居跡 SH 04, (28) は BV 35 地区溝 02 出土である。

高杯 (17~20) の 4 個体がある。中実の柱状部で内面ヘラ削りを施し、直線状に開く脚部を呈するもの (17・19) と中空筒の柱状部を呈し、外面縦方向の削り、内面にシボリ痕を残し、裾部で大きく開くと考えられる脚部を呈する (18・19) がある。(17) は鉢状の外面縦ハケを施す杯部を有する。出土地は (17) が SH 03。(18) が BX 39 地区。(19) が SH 02, (20) が SH 04 である。

杯 (24・25) は須恵器の杯蓋である。低い天井部を有し稜はわずかに断面三角形を呈する。(24) と天井部が高く外面にヘラ削りを施す (25) がある。両者とも口縁端部内面に段を有する。出土地は SH 02 である。

製塩土器 (21~23) は無頸の円筒状で丸底を呈するものである。器壁は非常に薄く、内面に指圧痕を残す。外面に縦ハケを施すもの (23) とタタキ痕を残す (22) がある。製塩土器は竪穴住居跡 SH 02 から 5 個体分、小片が約 50 片出土した。

千代川遺跡第 5 次出土遺物 (2) (第 31 図)

壺 (30・31) 短かく外反する壺の口頸部である。口縁端部は丸くおさめ、わずかにつまみ上げている (30) と端部に平面をもち外方向につまみ出し、口縁部内面にヘラ記号をもつ (31) がある。出土地は (30) が BX 43 地区, (31) が BY 40 地区である。

杯 (32~42) は須恵器の杯身である。たちあがり非常に退化した (32), 平底の底部から口縁部まで真っすぐ立ち上がる (33), 平底で口縁部まで大きく開き真っすぐ立ち上がる (34・35), 高台を有する (36~42) がある。出土地は (38・39・41) が BY 41 地区溝 25 で、他の (32) が CA 41, (33) が BV 34, (34) が BX 42, (35) が BV 43, (36) が BY 42, (37) が BW 37 地区である。

瓶 (29) は頸部から口縁部にかけてのものである。口縁部は上方外方へつまみ上げている。出土地は BX 43 地区である。

鉢 (44・58・57) は鉢の口縁部と底部である。(44) は平底で糸切り痕を残す。(58) は口縁部断面が丸味をもち肥厚する。(57) は口縁端部を上方へつまみ上げたものである。出土地は (44) が CA 39 地区, (57) が BY 41 地区の柱穴 P 53, (58) が BV 40 地区 SK 21 である。

蓋 (48~52) は須恵器の杯蓋である。(48・49) は小さな宝珠形つまみである。(50~52) は蓋全体のふくらみが少なくなり、平らに近いものである。口縁部は折り曲げて端部断面が三角形を呈する。出土地は (48) が BX 37, (49) が BY 38, (50) が BY 41, (51) が CA 40, (52) が CA 42 地区である。

灰釉陶器 (43) は貼付高台を有する。内外面を丁寧なヘラ研きを施している。釉は内面と外面の高台以外にかかっている。出土地は BY 40 地区である。

緑釉陶器 (47・62) の2点以外に小片が約10点出土している。(47) は底部を糸切りの後、貼付高台を行っている。釉は暗緑色の濃いものが全体にかかっている。(62) は丸い透かしをもつもので、ヘラによる文様をもっている。釉は明黄緑色で全体に薄くかかっている。出土地は (47) が BY 41 地区柱穴 P 53, (62) が BY 39 地区である。

土師皿 (53~56) は口縁部にナデの段をもたない土師皿である。口径約 8 cm の (53~55) と 12 cm の (56) に分けられる。(53~55) は全体に器壁が厚い。(56) は全体に薄く、内外面に指圧痕が残る。出土地は (53) が BV 43, (54) が BV 42, (55) が BV 42, (56) が BV 40 地区である。

石鏃 (59) はサスカイト製の凹茎無茎鏃である。片面を粗く剥離し、片面に自然面を残す。全体に磨滅が激しい。出土地は BX 42 地区である。

鉄鏃 (60) は鉄鏃の先端部分と考えられる。中央の稜線は明確でないが、全体に肉厚である。出土地は BW 43 地区である。

管玉 (61) は青灰色の軟質なものである。大きさは長さ 3.5 cm, 径 9 cm, 孔径 2.5 cm を測る。出土地は堅穴式住居跡 SH 04 の北東壁溝内である。

5. ま と め

当調査は、昭和56年度の千代川遺跡2次調査と合わせて千代川町の西側段丘上における弥生時代末から古墳時代にかけての歴史変遷を知るうえで貴重な資料を提供したといえる。

前回の調査では、縄文時代から中世にかけての出土遺物と、弥生時代後期から古墳時代後期の堅穴式住居跡5基、土塚、柱穴等や奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡、土塚、溝、柱穴等があり、長期に亘る人々の営みが窺われた貴重な遺跡であることが確認された。特に弥生時代末から古墳時代中期にかけての過渡期にあたる出土遺物は庄内併行から布留式にかけてのものが多く、その遺物が出土した遺構である住居跡は隅丸方形を呈するものから方形に変る転換期にあたり、数少ない貴重な資料の追加となる。また、奈良時代から中世にかけての掘立柱建物跡、土塚、溝状遺構などや、灰釉、緑釉陶器、青白磁器などの出土

遺物があることから、千代川町にあったと推定される丹波国府を眼下に一望していた国府周辺における官衙付随施設が考えられる。

今回の調査においては前回調査した竪穴式住居跡 SH 01 以外の竪穴式住居跡 3 基、掘立柱建物跡 SB 05 以外の 7 棟、柵列 1 列、土塚 5 基、溝約 15 条などがある。遺構の変遷を大きく考えてみると次の 5 時期に分かれる。

第Ⅰ期 弥生時代末～庄内期併行

溝 SD 14 舌状丘陵の地形に沿った住居区画の溝及び丘陵下に排水するための溝と考えられるが、人工的な区画の溝としては蛇行している。CA 38 地区、溝内の中層より庄内併行の甕と鉢が完形に近い状態で出土した。

竪穴式住居跡 SH 04 長方形を呈する住居跡は北辺に同形体の貯蔵穴状の土塚が 2 基あることから西側への住居の拡張があり、北辺西側のものは後から作られたのであろう。

第Ⅱ期 古墳時代前期

竪穴式住居跡 SH 01・SH 03 主軸が南北方向から西側へわずかにふるもので、SH 03 が小型である。住居内からの出土遺物は布留式期の土師器が主流を占め、須恵器を含まない。

掘立柱建物跡 SB 07・SB 10 南北方向にほぼ近い状態の建物である。

柵列 SA 13 竪穴式住居跡 SB 07 に平行する柵列である。庄内期にあったと考えられる溝 SD 14 とも同様の方向をしめす。

第Ⅲ期 古墳時代後期

竪穴式住居 SH 02 南北方からわずかに西へふる。この住居跡プランは綾部青野遺跡及び由良川水系によくみられる青野型（方形に近い住居跡の一角が L 字状に住居内へ入り込んでおり、そこにカマドを有する住居跡）に類似している。ただし、青野型は 7 世紀のもので、本遺跡の住居跡とは年代的に合わないため直接的な関係はないものと考えたい。また、この住居跡は L 字状に入り込んだ部分が攪乱により残っていないため、カマドの有無は不明である。この住居跡に関しては今後の大きな課題を残すものである。

掘立柱建物跡 SB 06・SB 11 南北方向から大きく西側へふる。SB 06 は 2 間×2 間の総柱倉庫と考えられる。

第Ⅳ期 奈良時代～平安時代

掘立柱建物跡 SB 05・SB 08・SB 09・SB 12 南北方向から西へふる。SB 08 は第Ⅳ期の中でも後半期のもので SB 09 の建て直したものと考えられる。SB 08 は他の建物と方向を異にし、SB 09 東辺中央の柱穴が近接して短時間の中で使用されている。

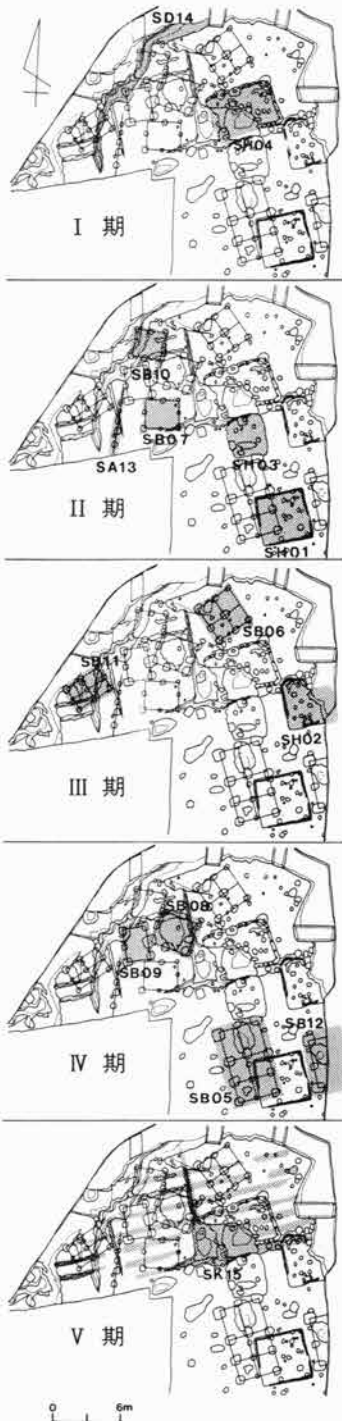
第V期 鎌倉時代

土坑 SK 15 東西方向の方形を呈する土坑。北にのびる東西方向の溝が同時に機能していたと考えられる。

溝 SD 16 SD 14 と同様に丘陵先端へのびる方向の溝である。検出部分が少ないため性格は不明であるが、丘陵先端への排水等と考えられる。他は東西方向に走る素掘溝が約10本程ある。

出土遺物については前回と同じく、庄内期併行から布留式期の遺物が多い。その中でも庄内期併行と考えられる第4図15の甕は近江系である。口縁部が受口状を呈し、クシ状工具による列点文や、外面下半の下方方向に調整する強いハケ、それにより小さな上げ底状を呈する近江系の特徴がみられる。これと共判出土の第4図16は口縁部は擬凹線を施した後ナデ消した丹後系的時徴を残す。体部はタタキを施した後、縦方向のハケで調整している。この特徴をもつものは園部町曾我谷遺跡^(注16)において多数出土しており、口丹波地方に多くみられる。口縁部は丹後的な擬凹線をもち、体部は畿内的なタタキを施しているものが口丹波地方を中心に北は曾我谷遺跡まで広がっている。おそらく、この範囲は大堰川を中心にして分水嶺である観音峠まで続く。また、この峠を越えた由良川水系では、より丹後的な様相をしめすものが多いと考えられる。

竪穴式住居跡 SH 02 からは、布留式期の甕、高杯と須恵器の杯蓋、製塩土器が出土した。これらの遺物は、この住居の機能した時期幅と考えたいが、布留期の甕、高杯は纏向の編年によると布留1式・2式古段階と考えられる。須恵器の杯蓋は「陶邑」^(注18)によると TK 23 で製塩土器の年代とほぼ一致する。



第32図 遺構変遷図

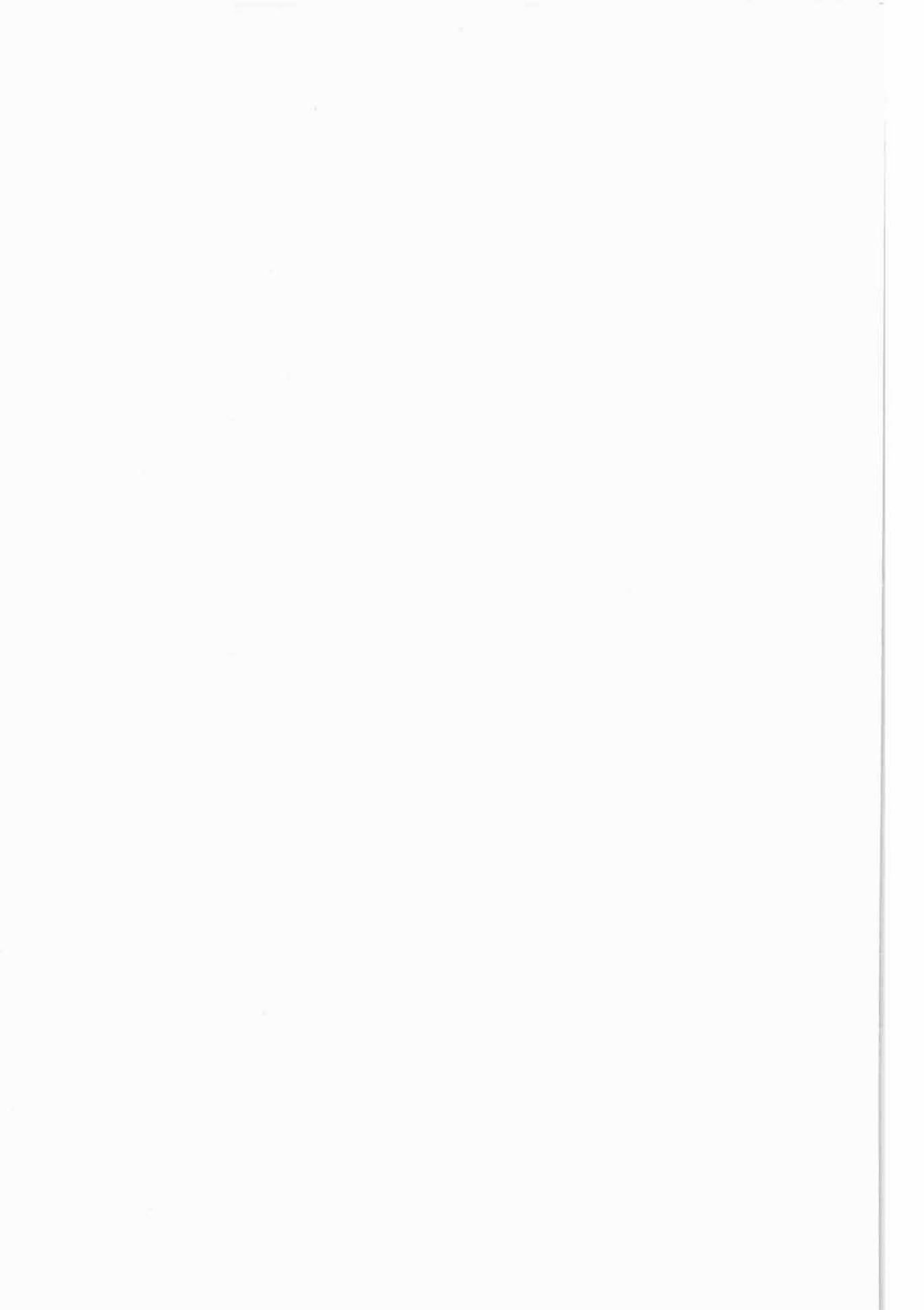
製塩土器については同住居跡内から5個体分出土しており、タタキをもつものが2個体ある。すべて瀬戸内系のものである。内陸部である亀岡盆地において若狭系のもは出土しておらず、他の土器もあわせて畿内周辺地、瀬戸内系の影響下にある地方である。亀岡盆地においては他に北金岐遺跡^(注19)において同様の製塩土器が出土している。

今回出土した遺物の中でもっとも古いものとしては第4図26がある。この鉢は畿内第I様式と考えられるものであるが、形体、文様等から他に類例がない。もっとも近いものとしては唐古遺跡出土の木製容器を模倣した土器^(注20)がある。唐古遺跡出土のものは全面に流水文を施しているが、本遺跡出土のものは文様帯が体部下半に集中しており、特異的なものである。この鉢についても、唐古遺跡と同様の木製容器を模倣したものと理解したい。他の出土遺物としては、須恵器が全体の半数以上を占める。8世紀以降のものは、亀岡盆地内にある篠窯で生産されたと考えられるものが多い。しかし、緑釉陶器は篠で生産されていたにもかかわらず、近江・東海系のもと考えられる糸切り底に高い貼付高台を有し、厚く濃い釉をかけたものや、灰釉なども出土している。これらの事から生産地と消費地の関係や、これらの高級な器を使用していた人々と、近接地に推定される丹波国府とのつながりについて、今後の大きな課題を残すものである。

(村尾 政人)

- 注1 村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報(1982-1)』(財)京都府埋蔵文化財調査センター)1982
- 注2 村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報(1983-1)』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983
- 注3 安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報』(1979)京都府教育委員会)1979
- 注4 堤圭三郎・安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会)1977
- 注5 樋口隆久『御上人林麿寺第5次発掘調査報告』亀岡市教育委員会1980
- 注6 森下 衛「千代川・桑寺遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984・3
- 注7 安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会)1978 注4と同じ
- 注8 八木茂美「丹波国分寺」『国分寺の研究』1938
樋口隆久『丹波国分寺第1次発掘調査報告』1983 亀岡市教育委員会 1983
注8と同じ
- 注9 安井良三・江谷 寛(『御上人林麿寺発掘調査報告』亀岡市教育委員会)1977
樋口隆久『御上人林麿寺第5次発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1980
角田文衛「丹波国分尼寺」『考古学論叢』1938
- 注10 『亀岡市史』上巻 1960
- 注11 注6・10と同じ

- 注12 木下 良『丹波国府址』1966
注6と同じ
- 注13 『亀岡市史』上巻 1960
竹岡 林「大井川右岸地域に於ける条里制—京都府亀岡盆地—」『亀岡高校研究紀要』第3集 1954
安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980)京都府教育委員会) 1980
注9・10と同じ
- 注14 魚澄惣五郎「丹波国沿革」『南桑田郡志』1924
安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1981)京都府教育委員会) 1981
水谷寿克・石井清司ほか「老ノ坂バイパス内篠窯跡群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注15 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告第9集』(1982)綾部市教育委員会) 1982
中村孝行「青野南遺跡第3次・4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告第10集』(1983.3)綾部市教育委員会) 1983
- 注16 平良泰久「曾我谷遺跡発掘調査概報」(『園部町埋蔵文化財調査報告書第2集』(1977)園部町教育委員会) 1977
- 注17 藤井利章「発志院遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊』(1980)奈良県教育委員会) 1980
- 注18 『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
- 注19 石井清司・森下 衛「北金岐遺跡B地点検出の大溝について」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984・3
北金岐遺跡現地説明会資料((財)『京都府埋蔵文化財調査研究センター』) 1983
- 注20 同志社大学大学院修士課程豊岡卓之氏からの御教示による。

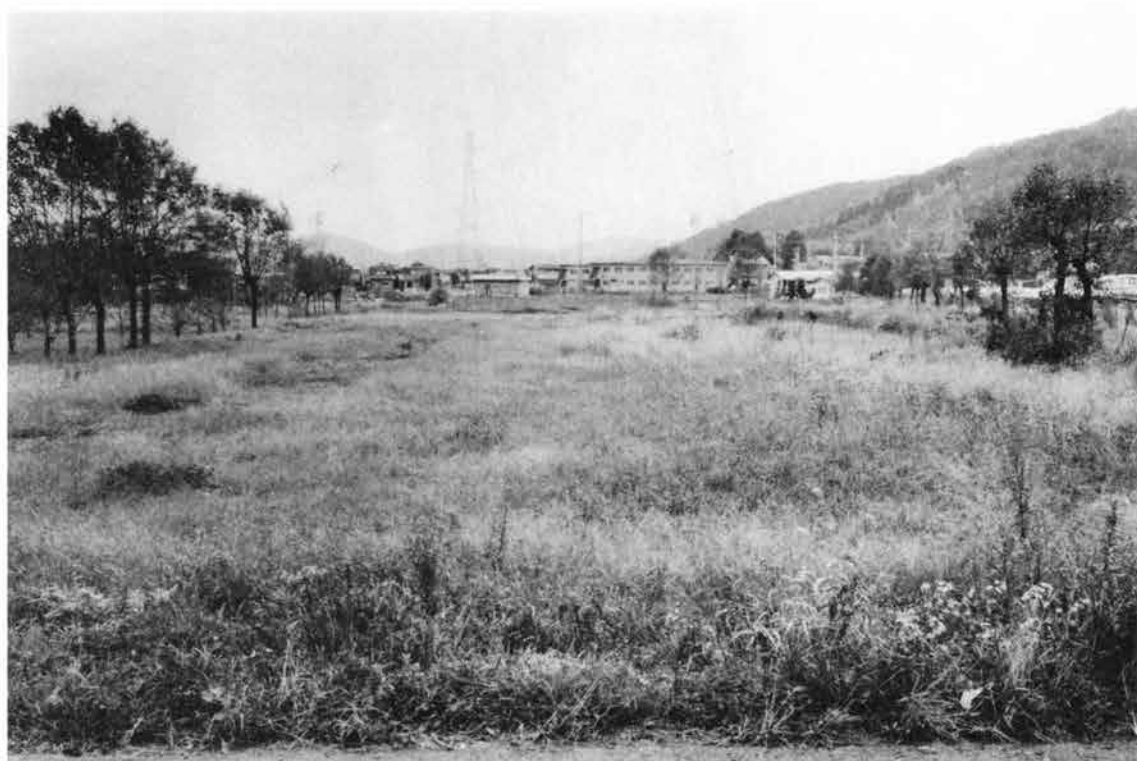


図

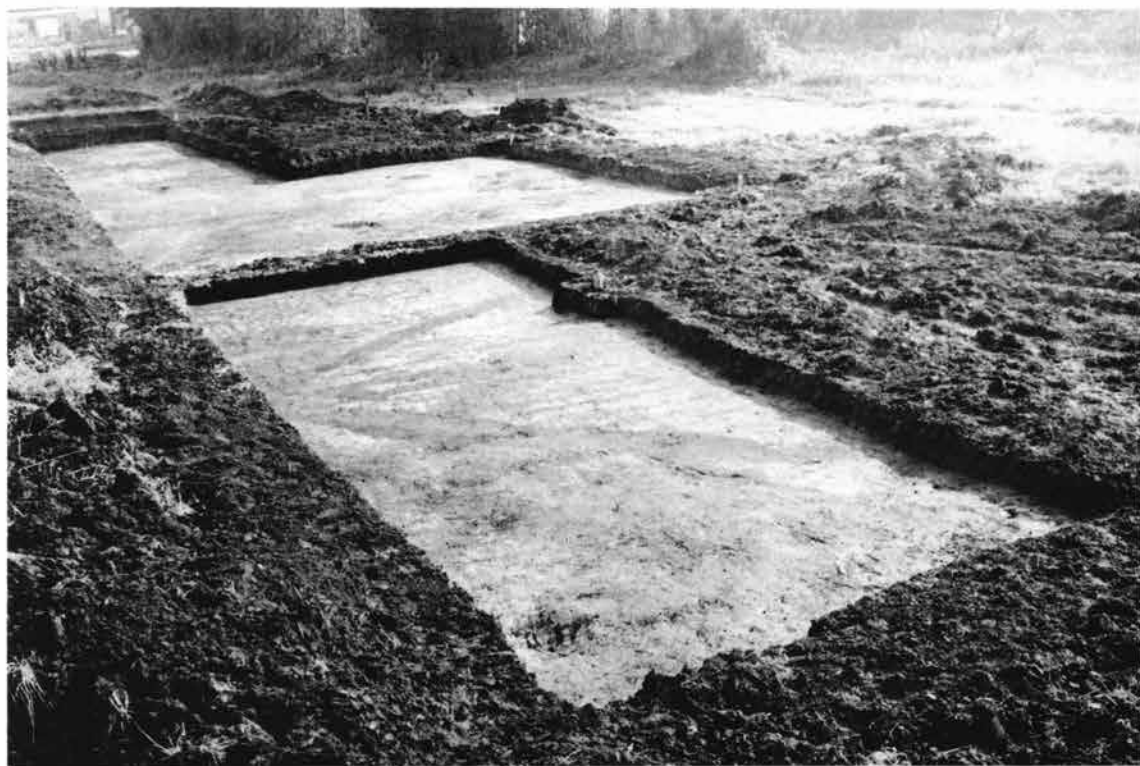
版



(1) 調査地遠景（西から）



(2) 調査地近景（調査開始前）（北から）



(1) A拡張全景（北西から）



(2) B拡張全景（北から）



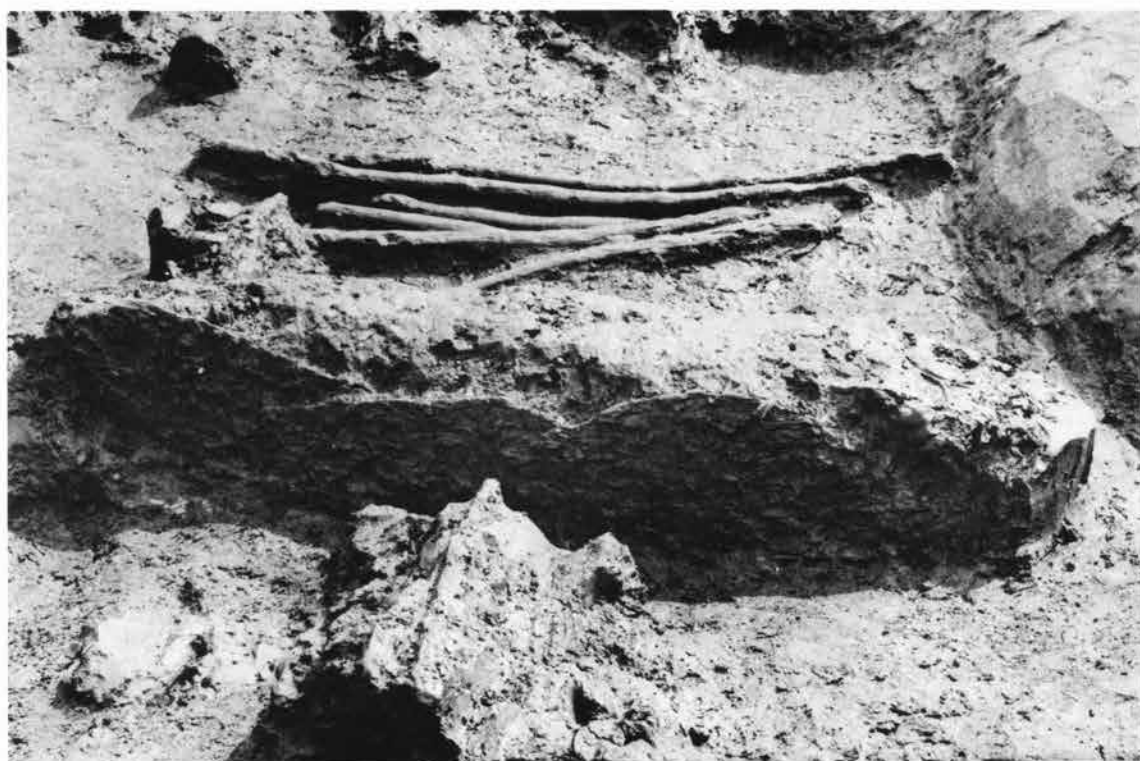
(1) S B01 (西から)



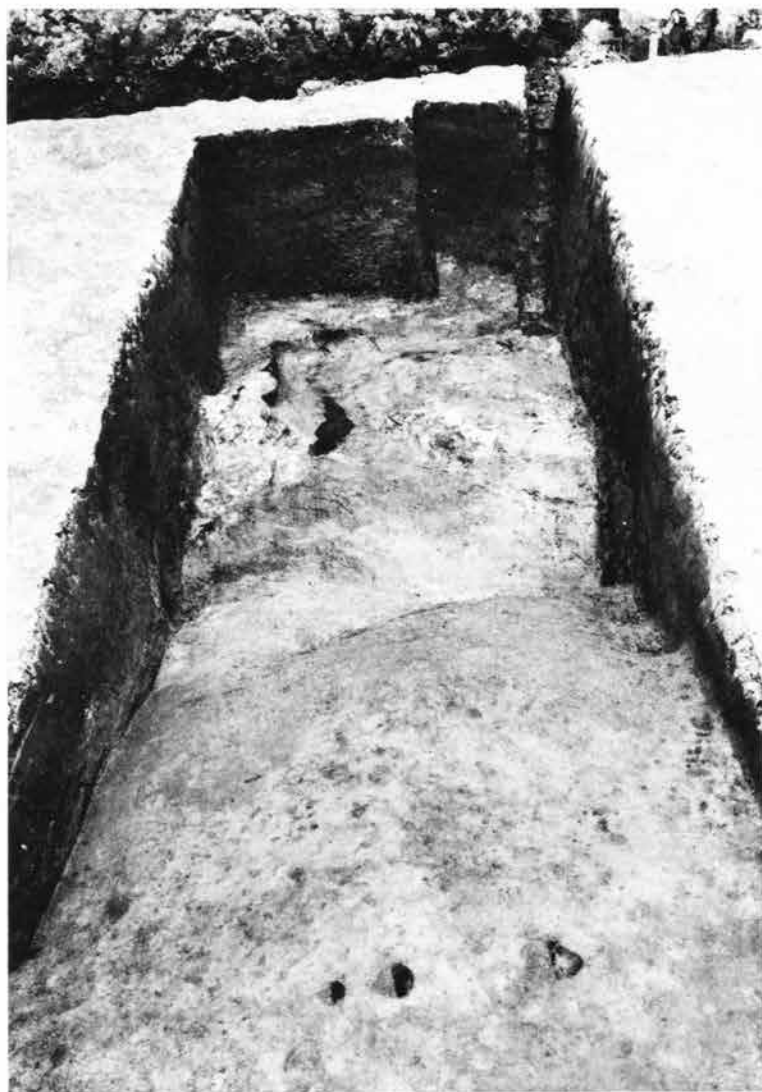
(2) S B02 (西から)



(1) B拡張東壁S D01断面 (南西から)



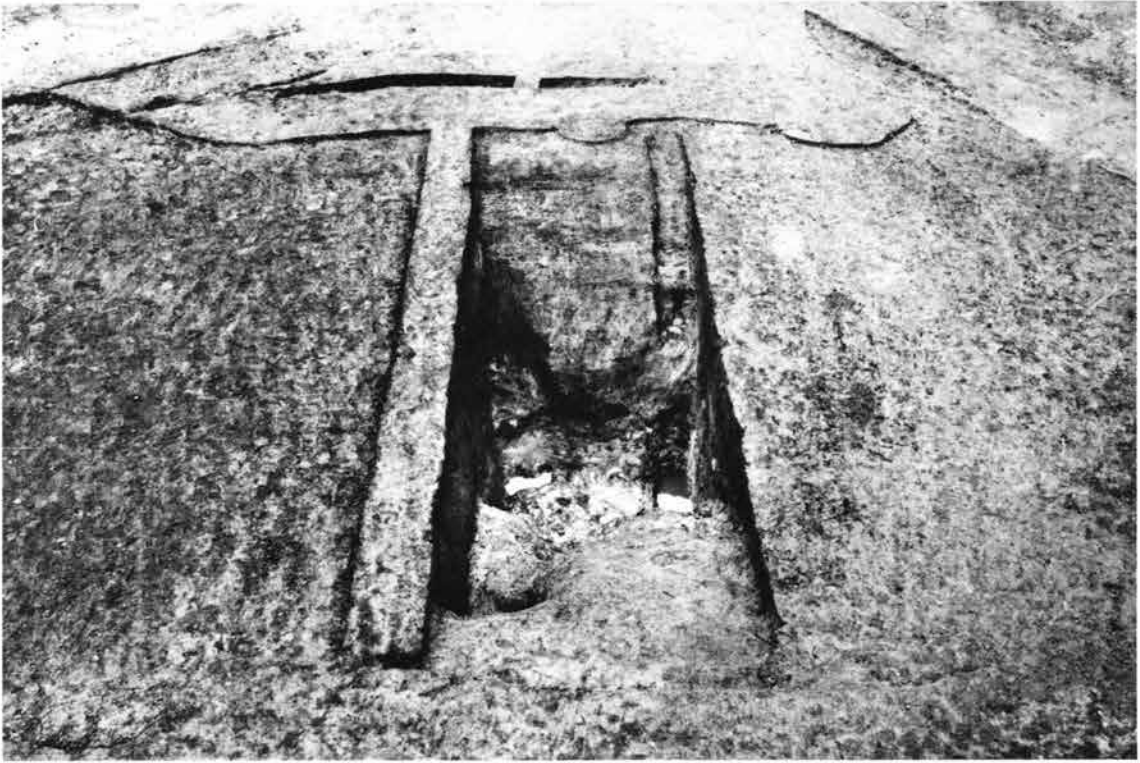
(2) 堰状遺構



(1) 第1トレンチS D01 (南から)



(2) 第1トレンチS D01 (東から)



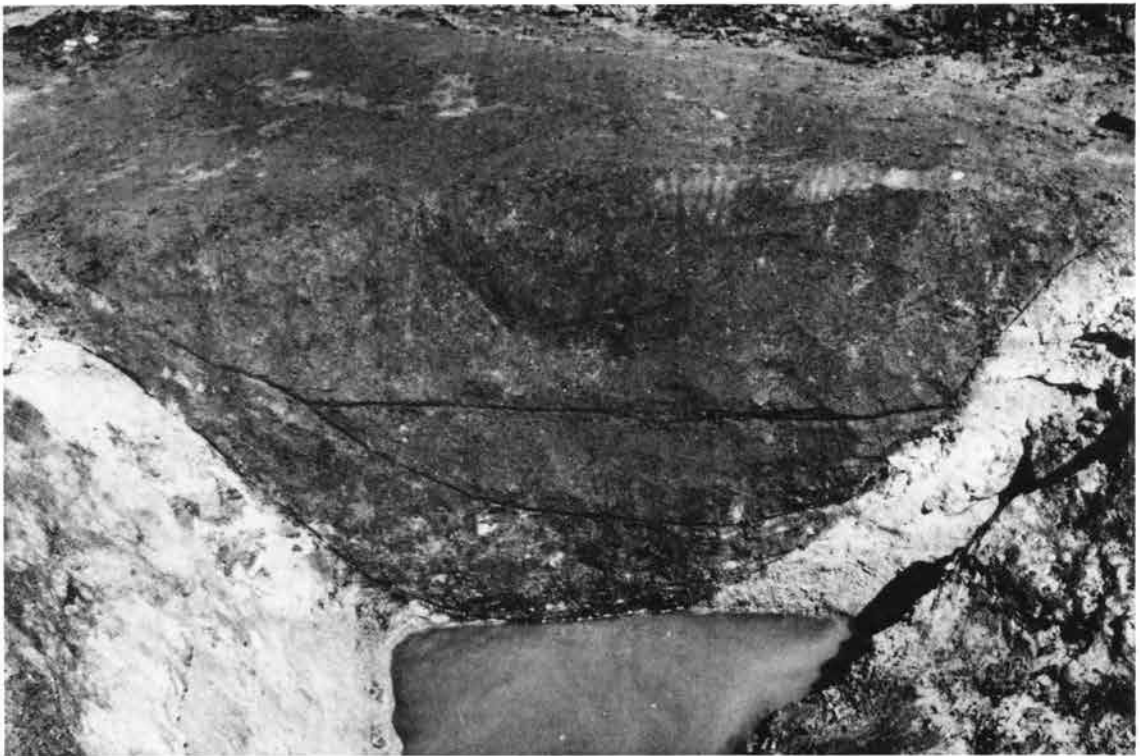
(1) 第2トレンチS D03 (西から)



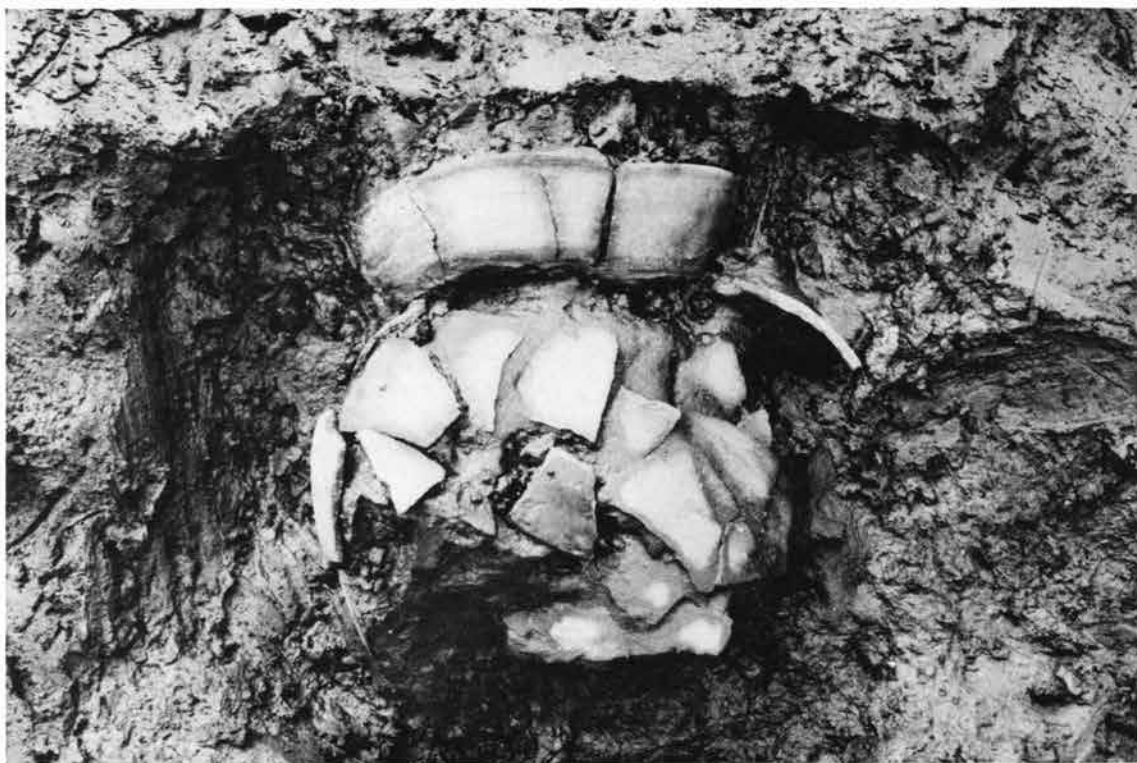
(2) S D03断面 (S D01合流手前)



(1) S D01・07 (南から)



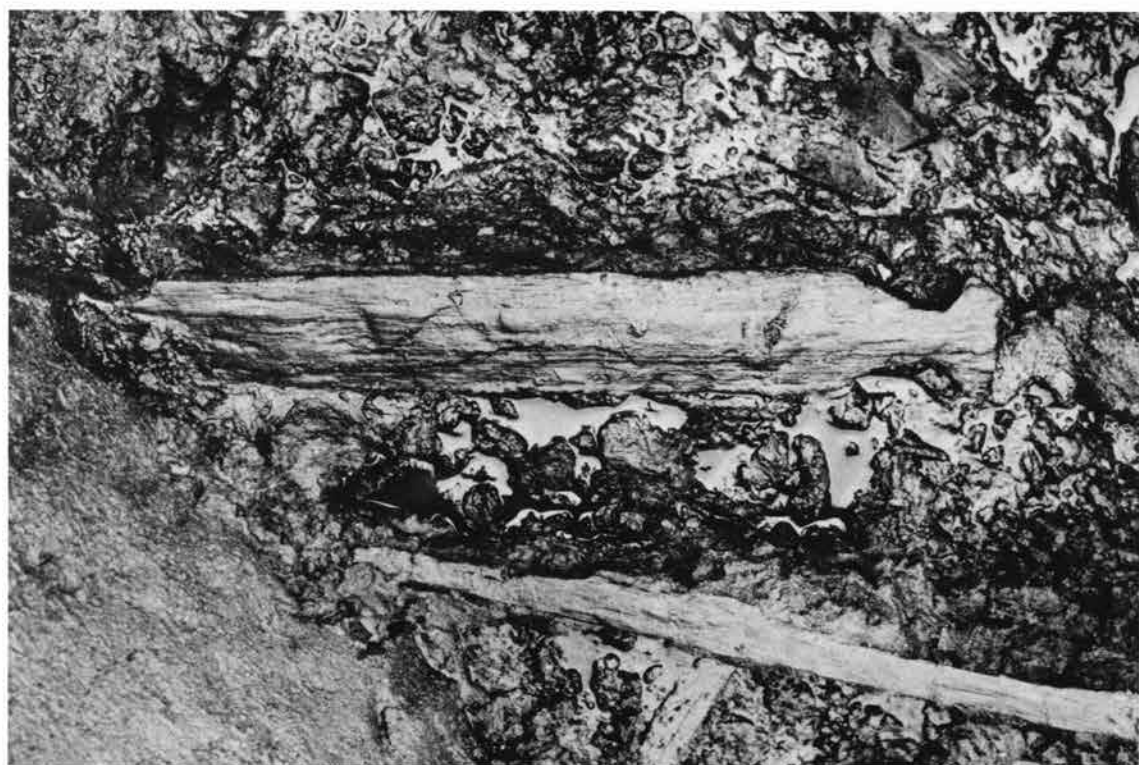
(2) S D07断面 (北から)



(1) 遺物出土状況



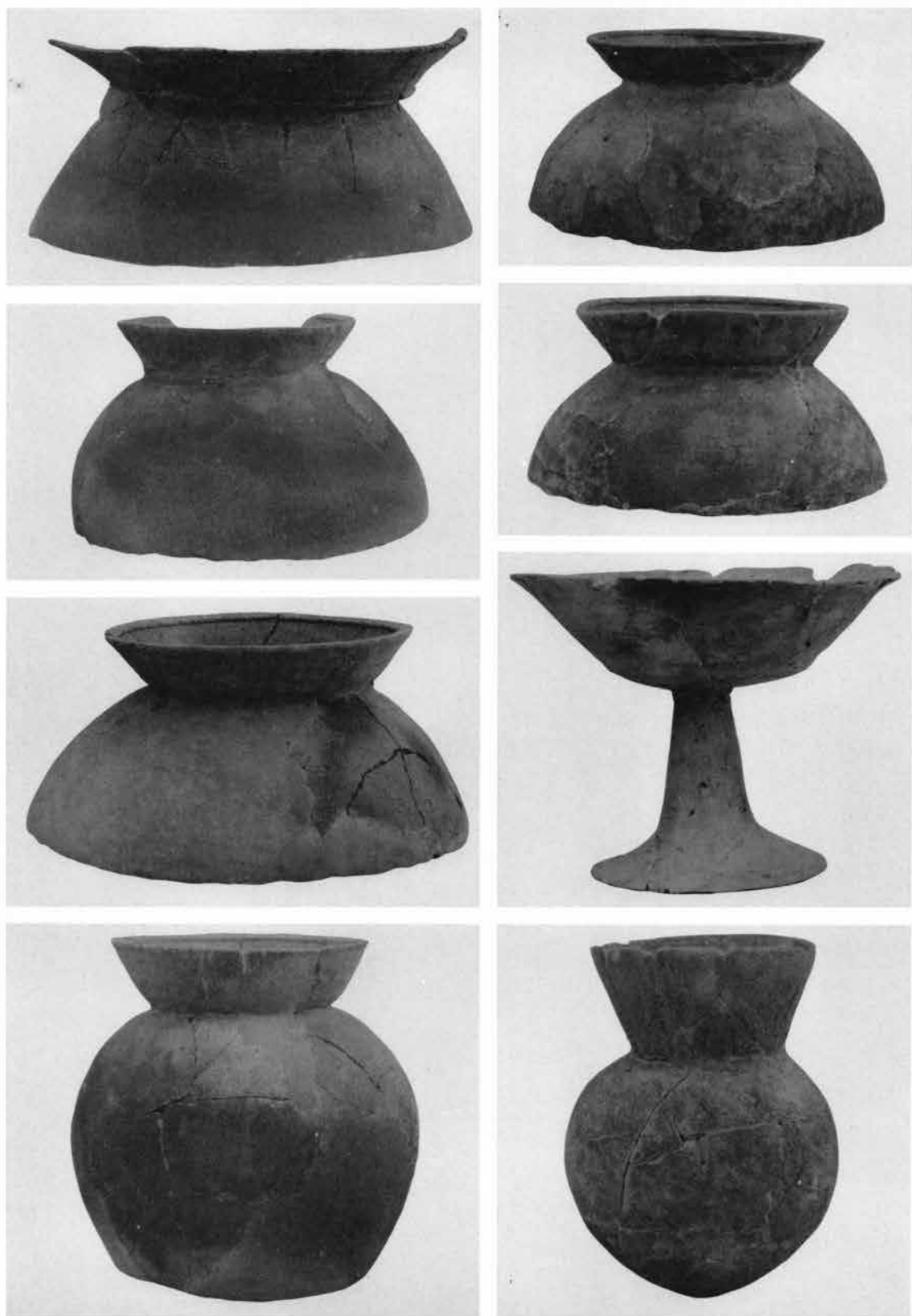
(2) 遺物出土状況 (S B01内)



(1) 遺物出土状況 (木製品)



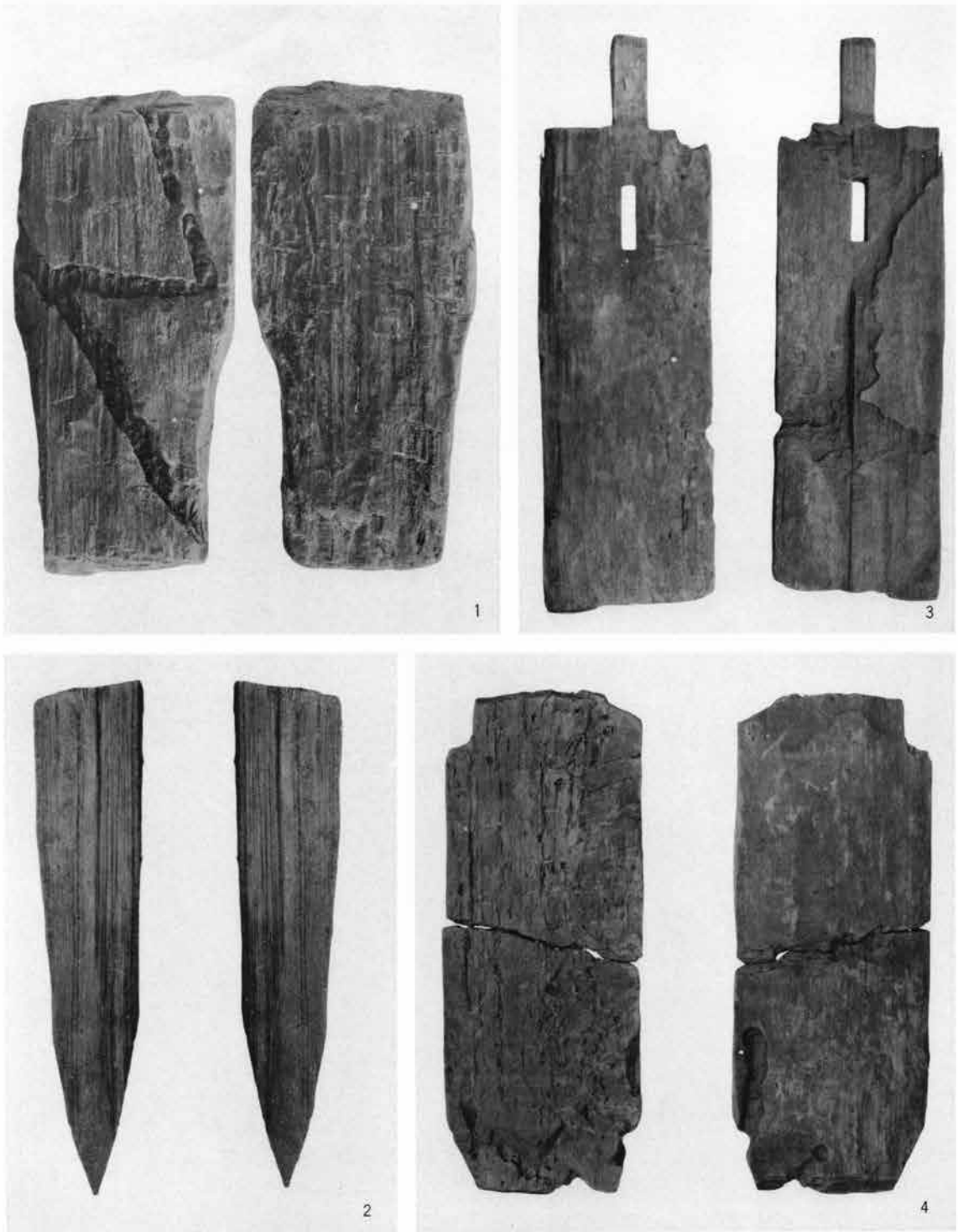
(2) 遺物出土状況 (木製品)



出土遺物 (1)



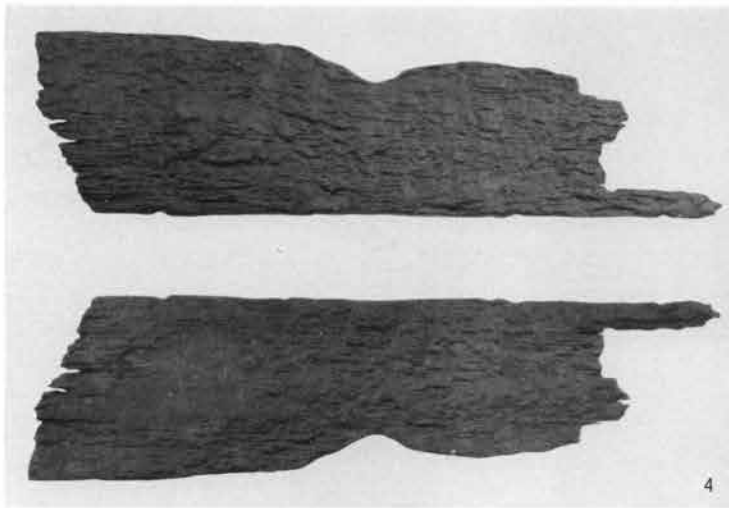
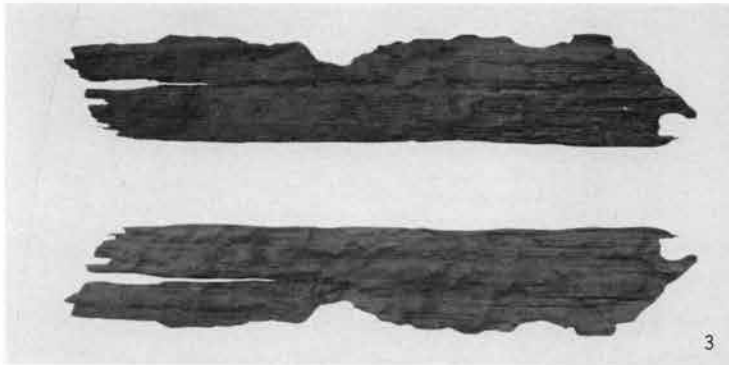
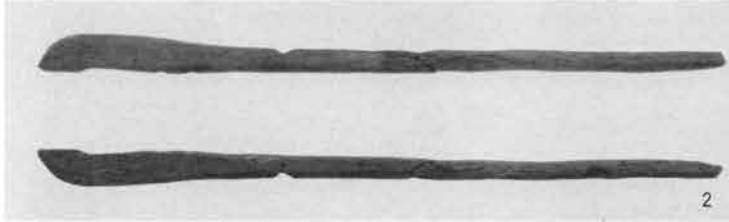
出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

1. くわ 2. くい 3. 建築材 4. 建築材

1. ちぎり 2. 織具 3. 板材 4. 板材 5. 流木 6. 流木
7. くい 8. くい 9. くい 10. 流木 11. 流木 12. 流木



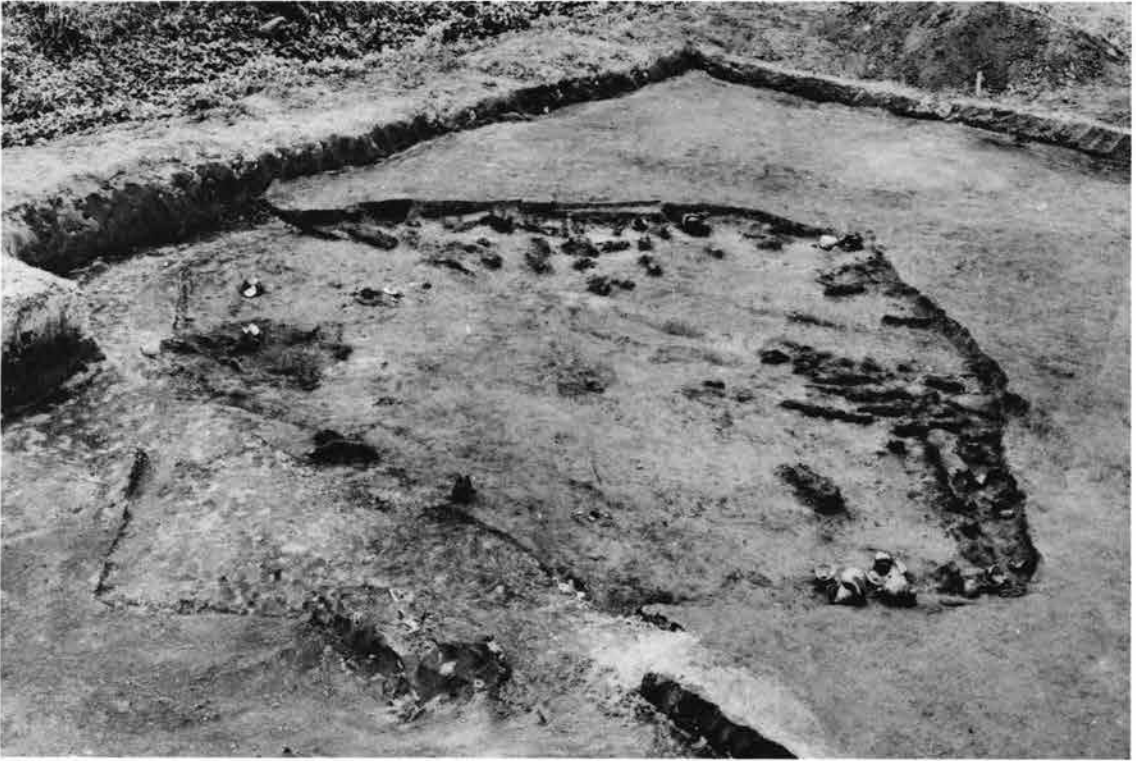
出土遺物 (4)



(1) B地点南半部の遺構（東から）



(2) B地点北半部の遺構（東から）



(1) B地点S B03床面直上遺物出土状態(東から)



(2) 同上(北から)



(1) B地点S D01完掘状態 (西から)



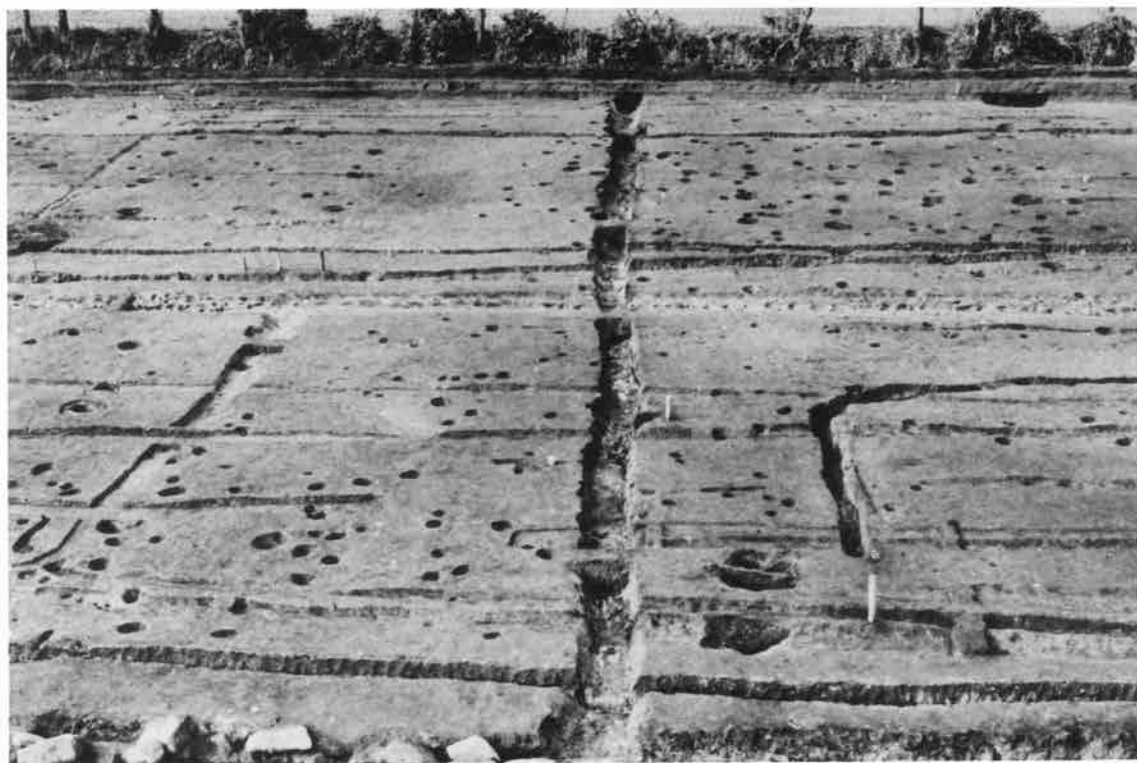
(2) 同上 (東から)



(1) C地点全景(南から)



(2) C地点北端部遺構検出状態(東から)



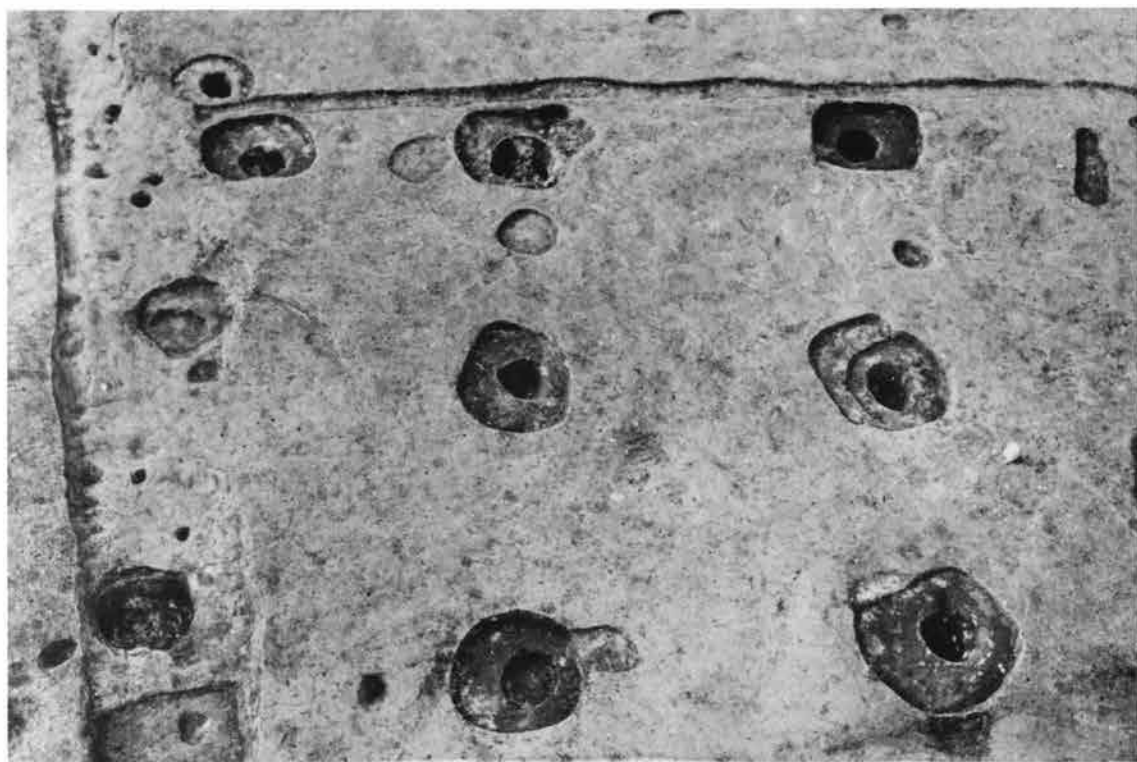
(1) C地点 SD04・SB13・SB14 (東から)



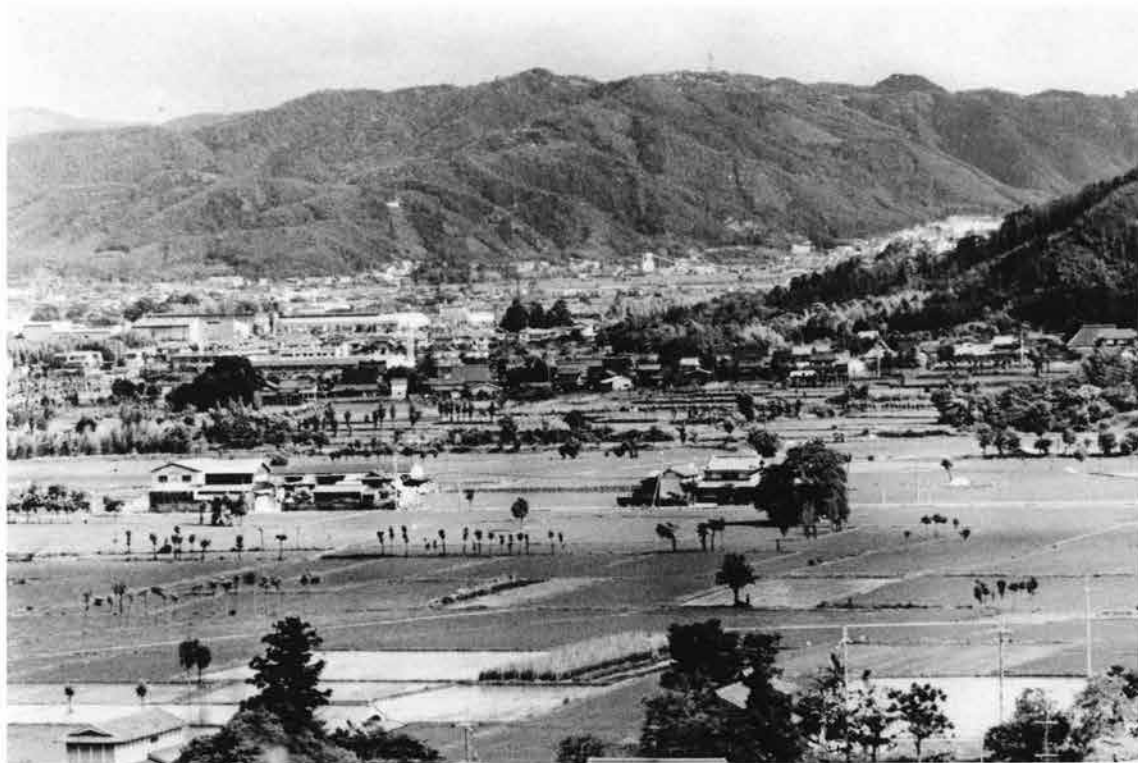
(2) C地点 SD04・SB14 (東から)



(1) C地点 SB19・SB20 (東から)



(2) C地点 SB20 (東から)



(1) 調査地遠景 (北から)



(2) 調査地遠景 (西から)



(1) 調査地全景 (南から)



(2) S H 0501~0504 竪穴式住居跡全景 (北から)



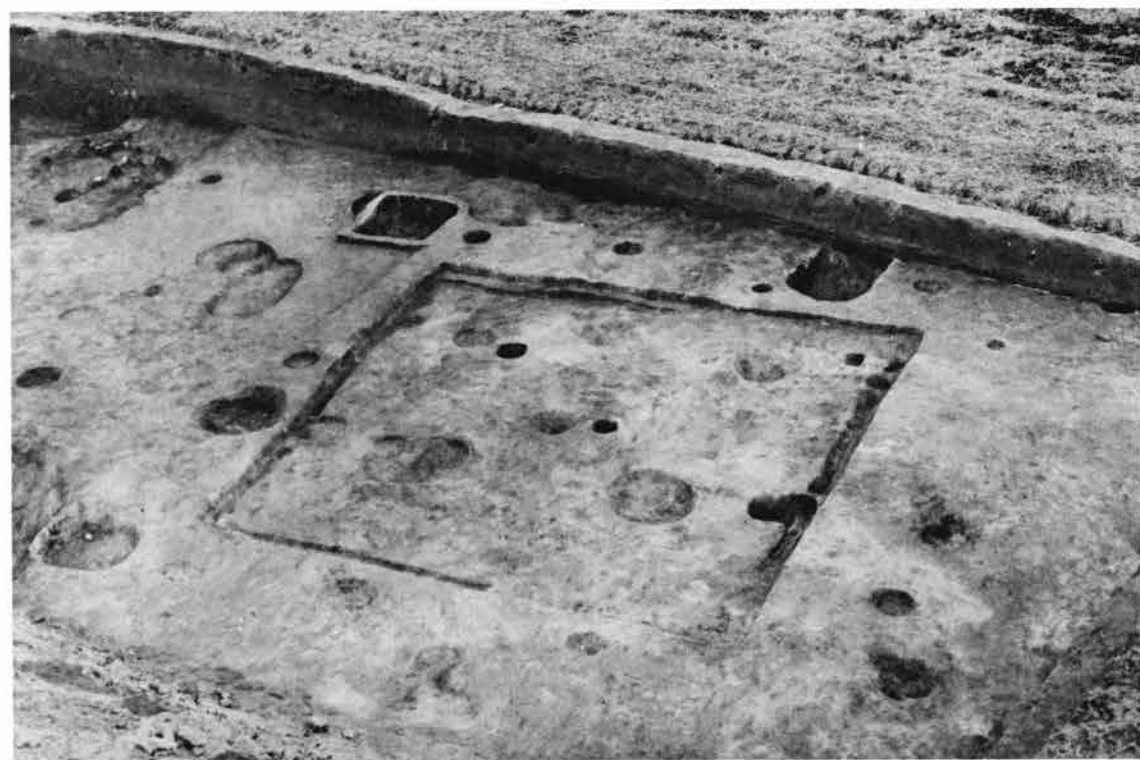
(1) S H0502, S H0503, S H0504 竪穴式住居跡 (東から)



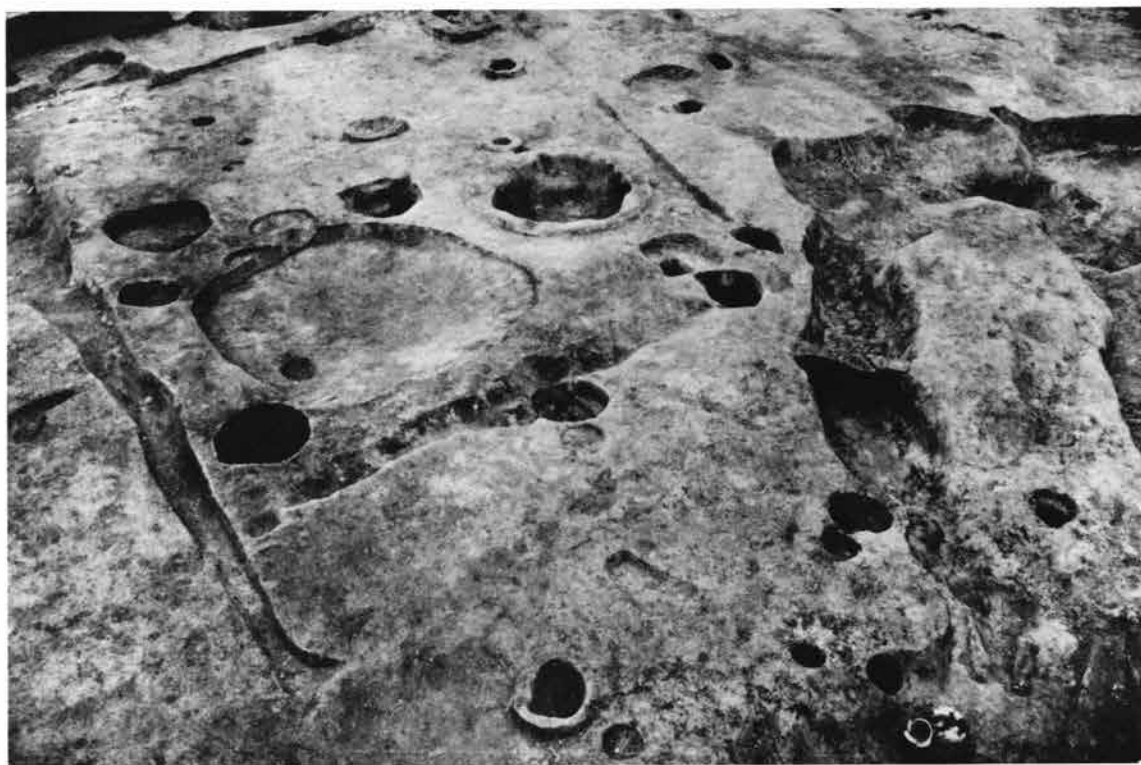
(2) S H0503 竪穴式住居跡 (東から)



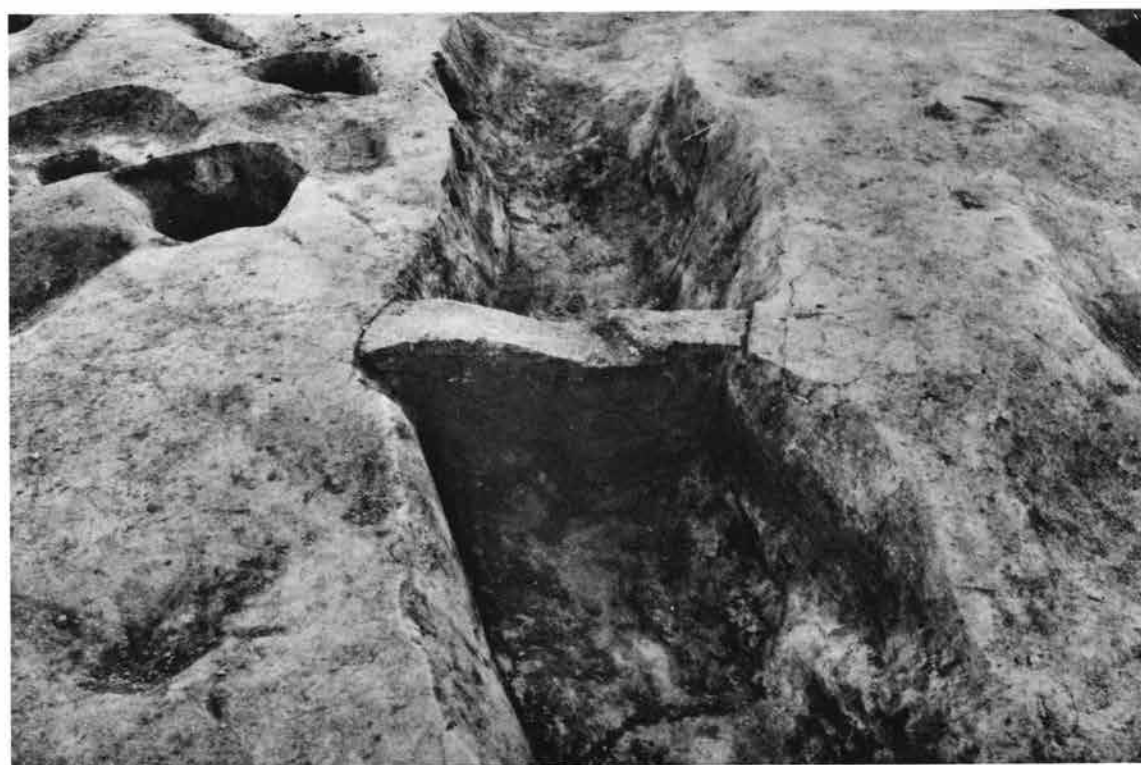
(1) S H0501竪穴式住居跡（北東から）



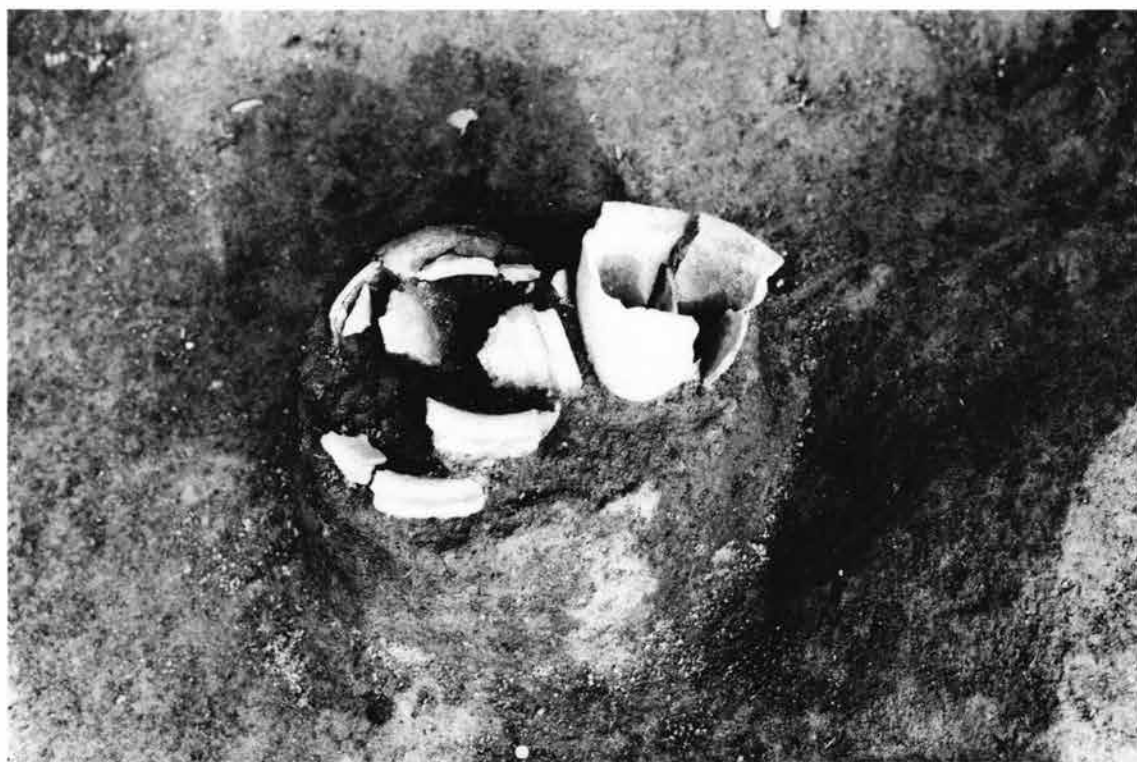
(2) S H0501竪穴式住居跡（南西から）



(1) 調査地西側全景（北から）



(2) S D 0501溝断面（北から）



(1) S D0501溝遺物出土状況



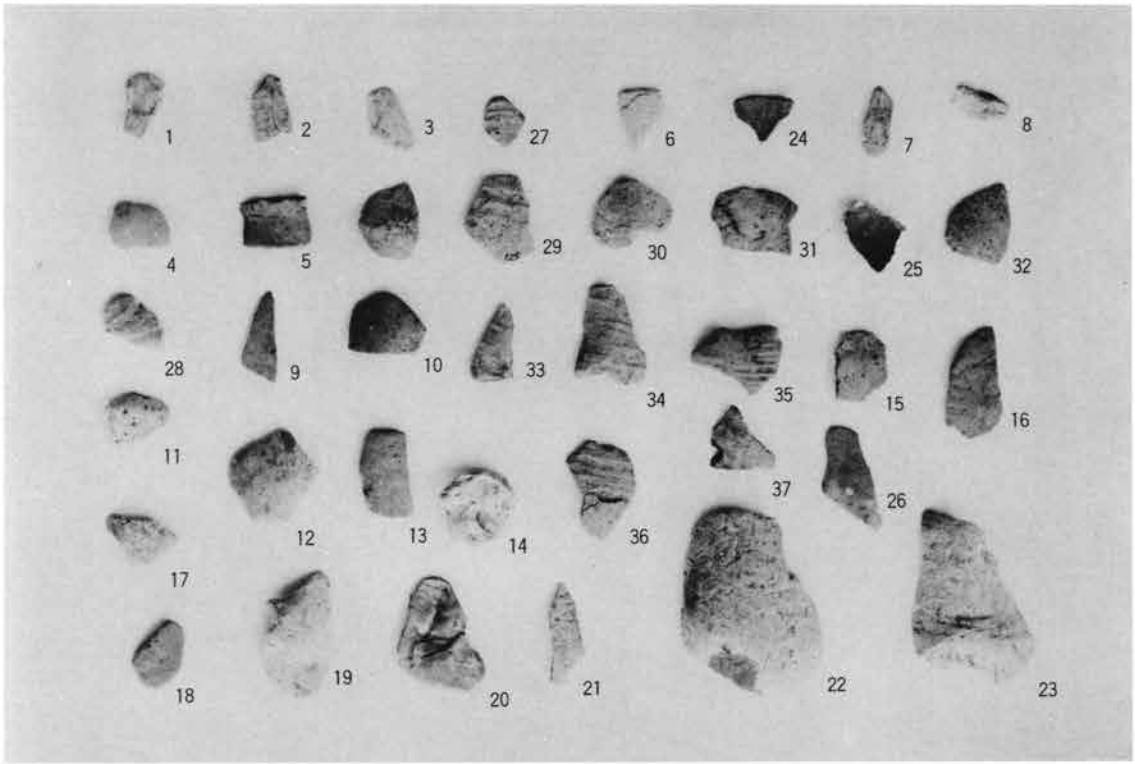
(2) S H0504竪穴式住居跡遺物出土状況



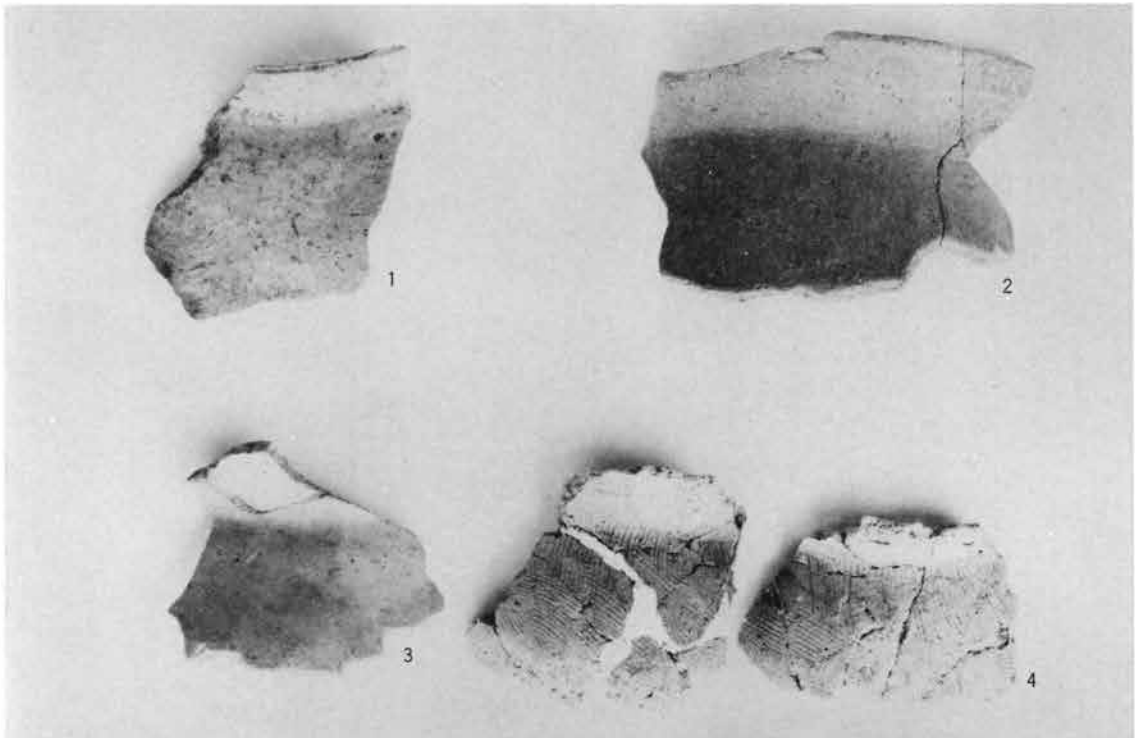
(1) C A42~38地区 旧地形断面 (東から)



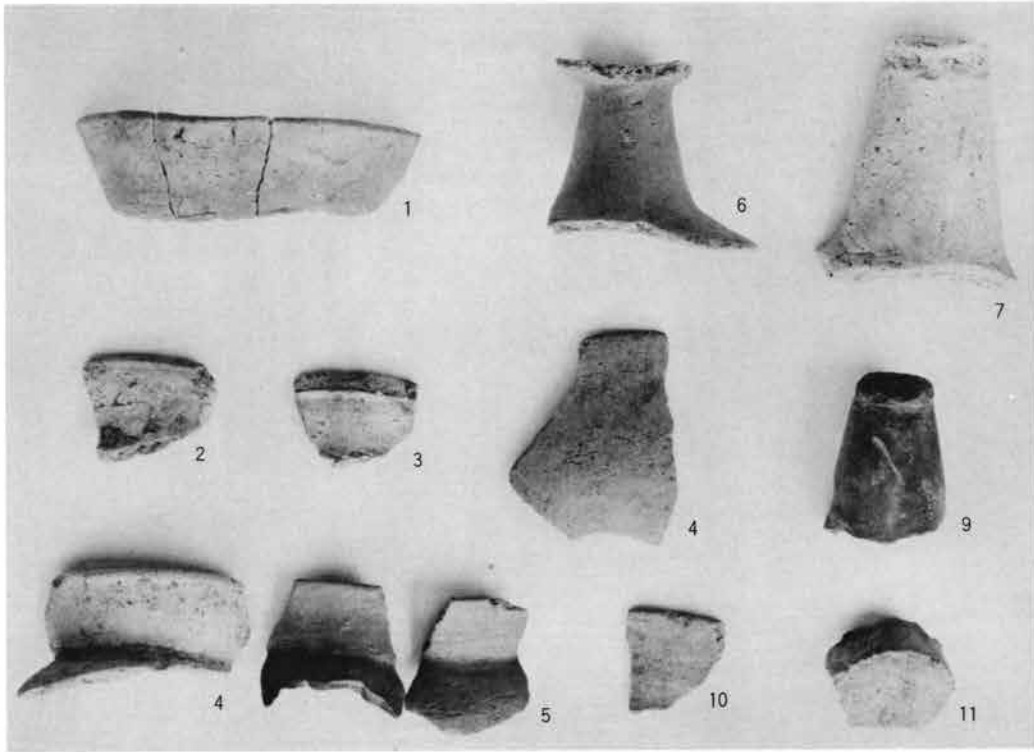
(2) B Y43地区 旧地形断面 (北から)



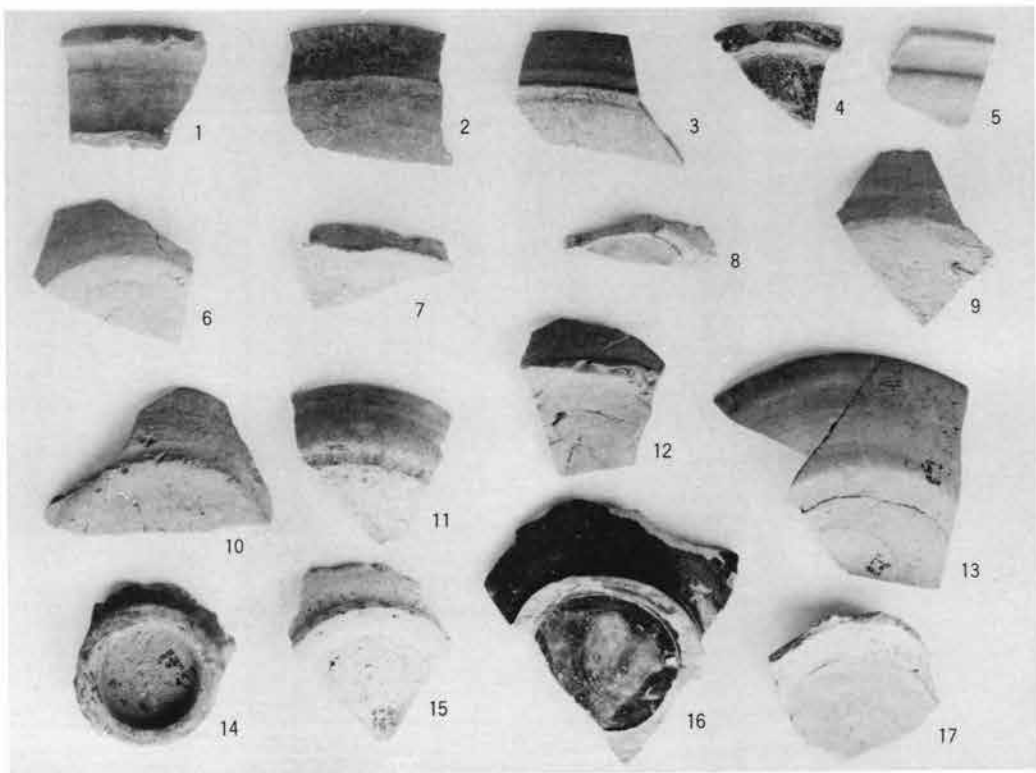
(1) 出土遺物1 (製塩土器)



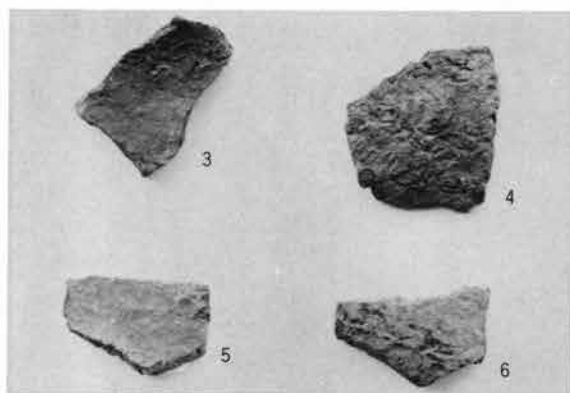
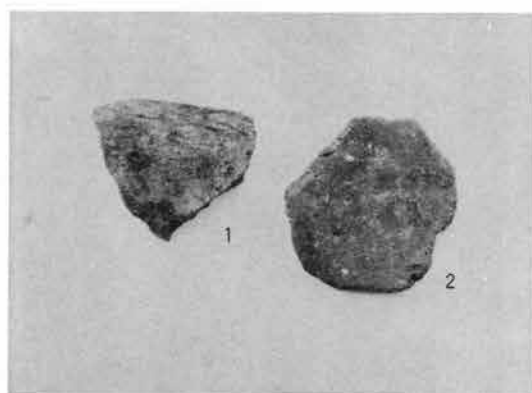
(2) 出土遺物2 (土師器)



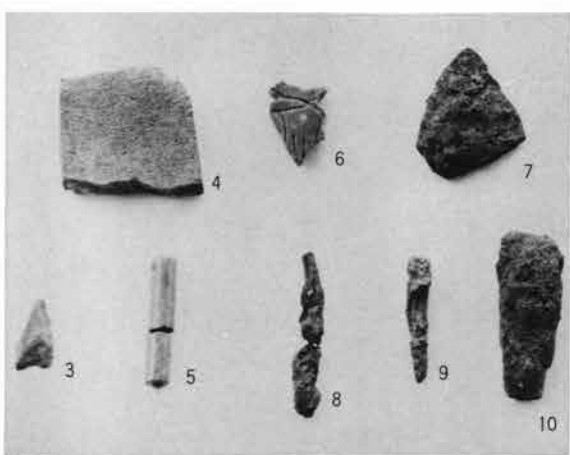
(1) 出土遺物 3 (彌生土器・土師器)



(2) 出土遺物 4 (須恵器・陶磁器類)



(1) 出土遺物 5 (縄文式土器)



(2) 出土遺物 6 弥生土器(1・2), 石鏃(3), 砥石(4), 管玉(5), 緑釉陶器(6), 鉄鏃(7), 鉄器(8~9),



(3) 出土遺物 7 (弥生土器)

京都府遺跡調査概報 第12冊

昭和59年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)